



金雀

旋律

目の前に幼い少女がポツンと立っていた。

あどけなく大きな丸い瞳は前を向いていたが、視線は定まっておらず、どこも見てはいない。

「こんにちは」

話しかけると首を横に動かし、視界に映った人間を見上げた。とてもゆっくりとした動きだった。少女はじっとこちらを見つめた。

「こんにちはと言われたら、こんにちはと返すんだ。言ってごらん？」

「……こんにちわ」

「そう、それでいい」

膝をついて目線を少女と合わせると、小さな頭をよしよしと撫でる。少女は目をぱちくりと開いた。

「あなたは……だあれ？」

舌足らずな声と、揺れている視線が頭を撫でる男に向けられる。

「わしか。わしはな——」

くるり、くるり。鮮やかに宙を舞うのは、金糸のごとく細かな金色の髪と真紅のリボン。そして青磁色に身を包まれた二つの剣。

対をなす二つの剣は、まるで吸い込まれるかのように手に滑り落ちていく。そしてまた宙へとその身を踊らせた。

金糸の髪と真紅のリボンを靡かせながら、剣を何度も宙へと放り投げるその人物は、なんと小柄な少女だった。

金の刺繍が施された袖のない紫紺の長衣を身に纏い、むき出しの細く白い腕には、髪を結び上げているのと同じ真紅のリボンが包帯のように巻きついている。

少女は踊っていた。

しかし履いているのは、踊りには不向きであろうがっしりとした無骨なブーツ。それなのに、木で作られたところどころ割れているお粗末なステージの上とは思えない程、ステップは軽やかだ。決して高くはない天井スレスレに舞う剣。そして少女自身が口ずさむ軽快な律動。

観客達は酒を飲む手を休め、舞台の上で踊る少女に見入っていた。

ここは出し物を見ながら酒が飲めるパブ。しかし、大して広くない店内とお粗末な舞台に、あっと驚くような芸を見せてくれる芸人は皆無。おまけに出てくるのは甘口の安い酒。

そんな格の低いパブに集まるのは、芸を披露する芸人を冷やかし目的で楽しむ客達だ。大きな声で馬鹿笑いをしても咎める者は誰もおらず、はめを外すには丁度いい。

しかし、十代半ばの少女が舞台上上がったとき、客達は一斉に静まり返った。

その少女は、最近このパブで有名な曲芸師だったから。

美しい金糸の長い髪を真紅のリボンで高く結び上げた少女は、蝋燭で灯されているだけの薄暗いパブの中を照らすかのように、輝いていた。

突然どこからともなくやってきた少女は、何故かこのパブで曲芸を披露するようになった。初めは不釣り合い極まりない少女に誰もが困惑していたが、少女が見せる鮮やかな剣舞に魅了され、彼女の舞を一目みようとして次々と客が押し寄せようになる。

少女は左、右、と交互に剣を投げ、少女自身も背中からくるりと宙を舞った。片膝をついて着地したと同

時に、小さな両手に剣の柄がそれぞれピタリと収まる。

刹那、湧き上がるのは歓声と喝采。観客達は全員立ち上がり、興奮した面持ちで一斉に少女を賞賛した。観客の賞賛を一身に受けた少女は、ニコリと笑って立ち上がり、自分の背中に向けて剣を放る。腰についている鞘に剣がスッポリと収まった。

「皆さん、盛大な拍手をありがとうございます！」

少女は手をあげて観客に振りながら高らかに言った。

「旅する男装の美少女曲芸師、リアの公演は、今日をもってお終いです！最後の公演を見にきてくださって、本当にありがとうございました！」

ペコリと一礼すると、観客はうってかわって残念そうに項垂れた。あらかじめ最終公演と銘打たれていたことだが、改めて本人の口から最後だと口に出されると、もの寂しい気分になってしまうのは当然かもしれない。

自身をリアと呼んだ少女は、観客達に惜しまれながら舞台を降りていった。

「本当に行ってしまうのかい？ リアちゃん」

パブの主人が観客達と同様に、本当に残念そうな顔で尋ねた。これで最後にする、と言ったのは他でもない、リア自身だった。

「うん。今までありがとね、おじさん」

リアはあっけらかんと主人に別れを告げる。

手に持っているのは、報酬の金貨数枚だ。リアが公演を行うようになってから、売上げが鰻登りにあがったらしい。本来なら、銀貨数枚ですぐに去ろうとしたところを、主人に頼み込まれ、報酬を金貨に変えるかわりに最終公演日を伸ばしたのだ。

「そうか……旅に出るんだっけ？ もしもお金に困ることがあったら、いつでも戻っておいで。リアちゃんなら歓迎するから」

「そう言ってくれるのは嬉しいけどー」

言葉を不意に途切らせながら、リアは素早く腰に吊るされた鞘から剣を右手で頭上に抜き放つ。

ギィン

金属同士が響きあう音が宙を揺らす。眼前にいる主人と真後ろから、息を飲む音が聞こえた。

「柄の悪い男の人に、鉄の棒を持たせて後ろから襲わせるようなおじさんとは、正直もうこれ以上係わり合いになりたくないんだよねー」

リアは抜いた剣で鉄の棒を受け止めながら、しみじみと言った。

不意打ちに失敗した男が驚愕している隙をつき、リアは身体を捻りながら剣を振り上げる。男がよろめくと懐に入り、鳩尾に肘鉄を食らわせた。男はうめき声を上げながら背中から地面へと倒れる。

全てを見届ける前に、リアは剣先を主人の鼻先に突きつけた。

「たった一人かぁ。わたしも随分舐められたものだね」

「なっ……なっ」

「こんなかわいい女の子が、一人で旅をしてるんだよ？ それ相応の実力があるって思うのは、当然だと思うんだけどなー」

辺りはもう大分暗くなってきている。店の裏方には街灯もなく、注意をひいて後ろから襲い掛かれれば、なんとかなると思ったのだろう。相当甘く見られていた証拠だ。

「これ以上引き止めるのは無理だから、気絶させて人買いにでも売ろうとしたんでしょ？ そんなこと考えるの、おじさんだけじゃないんだよねえ、このご時世」

生まれてからほとんどの時間を、旅をしながら生きてきた。その間、人買いに狙われた回数は数知れず。

自然と防衛意識がつくのは当然といえる。

「さて、失敗したからには、相応の報いとやらを受けてもらわないと」

リアは主人の目を見据えながらにっこりと微笑む。主人はあからさまに顔を引きつらせた。

「わ、わわわわ悪かった！ この通りだ！ 反省してる！ だ、だから命だけは……！」

「だめだよ、おじさん。おじさんがやろうとしたことは、一人の人間の運命を捻じ曲げることなんだから。軽い気持ちでしていいことじゃないんだよ。あっちの世界で反省してね」

命乞いをする主人を前に、リアは無慈悲に剣を大きく振り上げた。

立ったまま気絶している主人を見て、リアは思わず感心してしまった。ツンツンと軽く腕をつつくと、ぐらりと身体が傾ぎ、バタンと後ろに倒れた。

リアは持っていた剣でポンポンと手の平を叩く。

「これが切れない剣だって、知ってたはずなのになぁ」

まさかここまで怯えてくれるとは思わなかった。完全に欲に溺れたと思っていたが、恐らく若干残っていた良心が、それを忘れさせたのだろう。

「まァ、おじさんがそんな欲深になってしまったの、わたしのせいみたいなものだしね」

元々細々と経営をしていただけの店だったのに、突然客足が増えて味を占めてしまったら、それを手放すのが惜しくなってしまうのは当然だ。以前のような細々とした経営に不安が募り、こんなことをしでかしてしまったのだろう。

だが、それは失敗した。そして人身売買に手を出そうとしたことを、はっきり後悔しているのも見て取れた。これならば、本人が言った通り反省して、二度と人身売買に手を出したりはしないだろう。

「ちゃんと反省しながら生きてね。それがおじさんの罰だから」

リアは剣を鞘に収めると、くるりと踵を返した。腹を押さえて蹲る男の横を素通りし、街灯が照らす大通りへと足を運ぶ。

スウェニ王国王都バニティカ。リアがこの街にやってきたのはこれで二回目。以前きたのは二年前で、そのときのバニティカは今とは比べものにならない程荒れていた。

前国王が病に倒れてから今の現国王が王位を継承をするまで、政治が乱れに乱れていたから。王位継承権を持つ十三人の王子達の争いが、激化したのである。

現国王が継承権を勝ち取ったのは三年程前。継承争いの不安定な政情の直撃を受けたバニティカは、治安が至上最低にまで落ち込んでいたために、一年程では全く改善されてはいなかった。二年前は昼夜問わず、女子供の一人歩きが危険とされていたほどに。

昼間は自由に歩きまわれるようになった今は、大分回復したと言っていいだろう。

それでも夜の一人歩きはどんなに治安がいいところでも、危険に変わりはないにもかかわらず、リアはそんなことはおかまいなしに悠々と大通りを闊歩した。

あくまで危険なのは、普通の女性に対してであり、腕に自身がある少女には脅威の対象にもならない。襲われたのなら返り討ちにすればよいのだから。

だからこのまま、ずっとお世話になっている宿屋へ行こうと決めていた。女将さんはとても気のいい人で、一人旅をしているというリアに、いろいろと世話を焼いてくれる。パブで公演を行っていたため、必然的に帰りが遅くなってしまっても、リアの分として残しておいてくれた食事を温めなおしてくれるのだ。

今日のご飯はなんだろう。昨日は野菜たっぷりのシチューだったから、炒め物かもしれない。あ、でも温かいスープもいいなぁ。

食事のことを考えると、足取りが軽くなった。鼻歌を口ずさみ、宿屋への岐路に行く。

そんなリアの前方に、慌しく横切る複数の影があった。その影達はあっという間にリアの視界から消え

ていく。

リアはピタリと動きを止めた。止めざるを得なかった。眼前には既に誰もいないというのに。

――綺麗だった。

視界にほんの一瞬だけ入り込んだ色彩が、色鮮やかに脳裏に焼きついている。

街灯と星明かりに照らされて僅かに映し出されたのは、暗雲を抜けた先に佇む大空と、鮮血を思い起こす鮮やかな真紅の輝き。

気づくとリアは走り出し、影が消えていった道を辿りはじめていた。人気（ひとけ）の少ないこの時間帯ならば、逆に人気のあるところにあの色彩はある。

追いかける理由？ そんなの、もう一度みたいからに決まっているじゃないか。

人の気配を辿り、ひたすら走った。すると、複数の影がまるでリアを通さないかのように立ち塞がっている。色彩の後ろを走っていた影達だ。

「邪魔だよ」

リアは二つの剣を抜き放つ。まず、右の柄で一番手前にいた影の頸椎を叩き付けた。影が崩れ落ちる前に、近くにいた別の影にも左の柄で同じように叩き付ける。

同時に低く呻くような声が影から発せられたが、リアの耳には入らない。

驚いてこちらを向いた影の懐に入り、そこから右の剣を下から振り上げて顎を強打。後ろに倒れる影の横腹を蹴り飛ばして勢いをつけ、残った二人のこめかみめがけて剣を振り下ろした。

五つの影が地に倒れ、唯一立ち上がっているのは、月明かりを受けてより一層鮮やかに映し出された空色と鮮紅色。

「見つけた！」

リアは瞳を輝かせた。

どうしてこうなったのかと問うたなら、夜に宿を抜けてフラフラとしていた自分が悪いというしかない。あえて言い訳するならば、街に出るのは本当に久しぶりで、且つ、常に仲間と行動を共にしていたために、自分自身の方向感覚がこんなにも悪いだなんて知らなかったからだ。

この街に来てから一週間程経つ。日のあるうちは、休む時間を惜しんで街中を毎日歩き回っていた。あることを調べるために。

元々あまり期待はしていなかったが、結局有力な情報は見つからず、心身共に疲労を感じていたときふと窓の外を見て、星と月明かりがとても美しく瞳に映った。

軽い気分転換として外に出たくなったとしても、別段不思議はない。

問題はその後、宿の周りだけをのんびり歩いているつもりが、気づけば宿から遠く離れ、見慣れない場所へ来ていたことだろう。

しかし焦らず、昼間何度も街中を散策していたのだから、宿屋への道くらい覚えているだろうと、記憶を頼りに来た道に戻るが、いつまで経っても宿へと辿り着くことができない。

いくら闇に覆われた時間帯だとしても、街灯や星明りがあるのだから、道も建物もはっきりと見える。それなのに一向に宿屋へ戻れないというのなら、考えられる理由はただ一つ。自分の方向感覚が悪い。それしか考えられなかった。

この歳で迷子になる日がくるとは思わなかった。もしも親しい者達に知られたら、ここ三ヶ月はこのネタでからかわれるに違いない。それを思うと気分がすっかり重くなった。

自分が宿を出てから、もう随分時間が経つ。仲間には一応言付けをして出てきたから、帰ってこない自分を訝しんで探してくれている頃かもしれない。迷惑をかけてしまう事実深く嘆息する。

そしてどうも悪いことは重なるものらしい。後ろから、おい、と声をかけられ振り向いた先にいたのは、どうみても悪いことを考えてます、と表現している柄の悪い数人の男達。

「こんな夜中に一人で街中をうろつくななんて危ねぇよ。――それが綺麗な顔した兄ちゃんなら尚更だ」

「よければ俺達が守ってあげようかぁ？」

「謹んで遠慮させていただきます」

彼らの言葉が額面通りなわけがなく、すぐさま踵を返して走り去る。ただの物盗りならまだいい。問題は、彼らが人買い目当てに声をかけてきた場合だ。大分取り締まりが強化されたとはいえ、撲滅には至っていない。

案の定、後ろから男達が追いかけてきた。ここら辺は建物が入り組んでいるから、小路に入ってしまうと何か撒けるかもしれない。

しかし、その目論見は無残にも砕け散る。気づけば目の前は壁だった。行き止まりだ。

「袋のネズミたぁこのことだな」

男達が退路に立ち塞がる。完全に逃げ場を失った。

ニヤニヤと下卑た笑みを浮かべた男達に顔を嚙めながら、自分の不注意さを呪う。

「……生憎、金目のものは持ち合わせていないのですが」

「そんな心配はいらねぇよ。お前自身が金になるんだからなぁ」

ゲラゲラと口汚く男達は嗤う。

人買い目当てだったか。彼らに聞こえないよう小さく舌を打った。

男の数は五人。これが一人だったなら隙を見て逃げるくらいならできただろうが、五人もいるとそ

れすらもできない。

唯一の望みは、探してくれてるであろう仲間の存在だ。しかし、こうタイミングよく現れる可能性なんて、あってないものだろう。この広い街でたった一人を見つけることなど、容易ではないのだから。

だからといってむぎむぎ捕まるのも癪だ。それだったら、一縷の望みにかけて大声をあげてみるのもいいかもしれない。もしも仲間がこの近くにいるのなら、声を聞きつけてやってきてくれるはず。

ジリジリと下がりながら、男達に気づかれぬよう腹に息を溜めはじめた。

「邪魔だよ」

そのときだった。突然誰かが割り込んできたのは。

「がっ！」

「ぐえっ！」

低い呻き声をあげながら、男達は次々と地面に沈んでいく。

視界に映ったのは、儂い星明かりを受けて暗闇を淡く照らす金糸の髪。まるで踊っているかのように宙を舞った。

(女神……?)

思わずそうってしまったのは、宙を舞う金糸の髪が、とても美しかったから。人のものとは思えない程に。

女神は舞うのをやめてピタリと立ち止まる。そのとき、彼女としっかり目が合った。僅かな星明かりが映し出した瞳の色は、夕焼けを思い起こす鮮やかな朱色。神秘的な雰囲気、思わずはっと息を飲む。

「見つけた！」

しかしその声音は、神秘的な雰囲気を打ち破るものだった。え？ と困惑すると、突然胸の辺りにドンと衝撃が走り、身体が後ろへと傾ぐ。腰から倒れ尻餅をついた。痛みに顔を顰めていると、眼前に爛々と輝く朱色の瞳が、恍惚の光を宿しながら自分を凝視していた。

「うわぁ。やっぱり綺麗！　すごい！」

「……」

感嘆の声をあげるのは、どこからどうみても女神などではなく、同じ年頃の少女だった。

先程の衝撃は、どう考えてもこの少女が原因だろう。でなければ、覆いかぶさるように身を乗り出された体勢に説明がつかない。

真っ直ぐな視線を受けて、居た堪れなくなってきた目線を逸らす。逸らした視線の先にあったのは、襲ってきた五人の男達。彼ら全員が地に倒れ伏し、気絶していた。思わず目を瞠る。

この少女が突然やってきてから、まだ一分経ったか経たないかというところだろう。いくら不意をついたとはいえ、大の男五人を、あっという間に地に沈めるなどと、普通の少女にできるはずがない。男でさえ、一人一人気絶させることすら容易いことではないのだから。

「お前は一体何者だ？」

胸騒ぎがする。この少女は普通ではない。素直に答えるとは思えないが、得体の知れない少女を野放しにするのは危険だ。緊張が全身に走る。この少女に比べたら、人買いに売るために絡んできた男達の、なんて他愛無いことだろう。

少女は自分の問いかけにパチクリと目を丸くした。すると、身を乗り出すのをやめ、体重を預けていた手を胸に当ててニッコリと笑った。

「わたし、『旅する男装の美少女曲芸師』のリア！　よろしく！」

「……何だ、その馬鹿げた名前は」

ふざけているとしか思えない返答に、身体が脱力しそうになるのを何とか堪えた。

「えー、酷いなあ。普段これで通ってるのに。それじゃあ『歌って踊れる男装の美少女曲芸師』ならどう？」
「……」

余計酷くなったとか、なんでそんな軽いんだとか、つつこみ所はたくさんあったが、何もいう気になれなかった。あまりにも馬鹿らしくて、警戒しているこちらが馬鹿みたいではないか。

「……お前は何者だ」

抜ける力を奮いおこして、もう一度問うてみた。少女はにっこり笑って、
「『歌って踊れる——」

「ああ、もういい」

この調子だと、この少女は何度も同じ調子でふざけた答えを繰り返すだろう。そう言うことで、己の正体を隠しているのかもしれない。いくら馬鹿らしくても油断は禁物だ。

「——ル、いますか!? いたら返事をしてください！」

突如聞こえてきたのは仲間の声。どうやらやっと近くまで来てくれたようだ。

「——ここです、インディクト卿！」

声を張り上げると、息を切らせながら彼はやってきた。寝巻きに外套を肩にかけただけという格好に、常に自慢にしている豪奢な赤い巻き毛が整えられていないことから、慌てて探しに出てくれたのだとわかった。

「アンゼル！ よかった、無事で——」

彼は地面に倒れた男達を見て、顔を強張らせた。そのままじっと男達を見据え、金色の瞳に剣呑を走らせる。

「彼らは……そこのお嬢さんが倒したのですか？」

「僕に、こんな芸当ができるわけないでしょう」

土ぼこりを払いながら立ち上がる。彼は信じられない、といった表情で、不思議な顔をして座っている少女を見た。

「お嬢さん、失礼ですがお名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「人の名前を聞く前に、自分から名乗るのが礼儀なんじゃないの？ そっちのお兄さんも礼儀知らずだねー」

少女は大袈裟に肩を竦めた。も、というのは何者だと尋ねた自分のことを言っているのだろう。しかしいきなり見知らぬ者に飛びついた人間も、充分礼儀知らずに当てはまるのではないだろうか。

「——これは失礼致しました。私はガリスタ・インディクトと申します。麗しいお嬢さんの機嫌を損ねてしまったこと、どうか許してはいただけないでしょうか」

彼は少女の態度に気分を損ねることなく、貴族の令嬢に対する態度と同じように、恭しく一礼した。そんな彼の態度に、少女はきょとんと目を丸くする。

「もしかしてお兄さん貴族？ それじゃあこっちのお兄さんも？」

そうやって少女が指を差したのは自分だった。彼がガリスタと名乗った以上、自分も名乗らなければならないだろう。

「僕はアンゼル・クランバート。お前の言うとおりの、貴族のようなものだ。——こちらが名乗ったのだから、お前も真面目に名乗ってくれないか」

二人の男の視線を受けながら少女は立ち上がる。

少女は口の端を二、とつり上げた。刹那、双つの剣が宙を舞う。少女の腰につけられた鞘に収まっていたはずの剣がない。

抜いた瞬間が見えなかった。

それはガリスタも同じだったのだろう、目を大きく見開き、携えていた剣の柄に右手を添えたまま固まっ

ている。

少女は驚いている二人の男に構わず、剣と同じように自身の身を宙へと踊らせた。金糸の髪と紅いリボンをなびかせながらくりと一回転すると、右腕を上、左腕を下に伸ばしてピタリと止まる。その両手には、先に宙を舞っていた二つの剣が握られていた。

「わたしはリア。見ての通り曲芸師だよ」

剣を収めながら少女はにこりと笑った。

(――本当に曲芸師だったのか)

アンゼルの呆然と少女を見据えた。ふざけた前書きのせいで冗談だとしか思えなかったが、これは顔くしかない。無造作に投げられたとばかり思った二つの剣が、着地と同時に手の平に収まるよう回転するなど、常人に真似出きるような技ではないのだから。

「……それでは、何故あなたのような曲芸師のお嬢さんが、アンゼルと共におられるのですか？」

呆然としているアンゼルの変わり、ガリスタがリアと名乗った少女に尋ねた。

「えっとね、パブでの公演が終わって宿に行こうとしてただけだよ」

間延びした口調で少女は語り始める。

「そしたら、キレイな色をしたそこのお兄さんが横切ってくのが見えたの」

母親譲りの空色の髪に鮮紅色の瞳。社交で色彩や容姿を褒められることに慣れているはずなのに、何故か胸がくすぐったくなって、アンゼルの思わず少女から視線をはずす。

「もう一度、また見たくなくて追いかけたんだけど、途中でそこの人達が道を塞いでて」

問答無用で地に沈めた男達を指差した。

「それで道を開けて、やっと見つけることができたの。ああ、やっぱりキレイだなあ、お兄さんの髪と瞳(め)」

そういうと、少女は両手を顎の下で絡ませ、うっとり目を細めながらアンゼルの傍により、顔を見つめてきた。彼女は背が低いため、見上げていると言った方が正しいかもしれない。

気圧されたわけでもないのに、アンゼルの思わず一歩身を後退させた。しかし彼女の言葉を頭の中で反復し、ふとあることに気づく。

「……ちょっと待て。お前は、この男達が人買いと判断して倒したのではなく、ただ通路妨害をしていたから気絶させた、ということか？」

「うん。ってことは、この人達悪い人だったんだ。よかったね」

何事もなかったかのように顔く少女に頭痛を覚えた。

「――全くよくないだろ！」

確かに彼らが悪事を働こうとしていた男達だったから、結果的にはよかったものの、もしも何の罪もない一般市民だったらどうなっていたことか。

「だから悪い人でよかったね、って言ってるんだよ。いい人じゃなかったんだから、別にいいじゃない」

「それは結果論だ。お前のその勝手な行動で、罪もない人を傷つけていたのかもしれないというのに……！」

「だから悪い人だったんだから、それでよしでいいじゃない。お兄さん頭固いね」

「今後お前が、同じような状況で誤って一般人を傷つける可能性があると言ってるんだ！ 開き直っていい問題じゃない！」

全く反省する気のない少女に苛立ちが募った。怒鳴りつけるように声を荒げると、横からポンと肩を軽く叩かれる。ガリスタだ。長身の彼から覗き込むよう見下ろされ、そしてゆっくり顔を横にふった。

「落ち着いてください、アンゼル。貴方らしくありませんよ。確かに彼女の行動原理に問題はありますが――今はそれよりも、優先すべきことがあります」

まるで駄々をこねる弟のように窘められて、アンゼルスはぐ、と口を引き結んだ。大人しくなったアンゼルスを見て、ガリスタは満足げに笑う。

「それでは、簡潔にまとめさせていただきます——アンゼルスは、そこで寝ている人買い目当ての男達に襲われそうになった。そして偶々通りすがったお嬢さんが、事情を知らないとはいえ、彼らを気絶させた。これで合ってますか？」

「……ええ」

アンゼルスは苦々しく肯定した。

ガリスタは軽く目を伏せると、少女に向かって膝をつく。騎士が高い身分の者に対する礼の姿勢だ。決して身分の低い少女に対してするような礼ではないが、彼は女性に対しては誰にでも同じように接することをアンゼルスは知っている。

「それならば、貴女はアンゼルの恩人ということになります。なのでお礼を言わせて下さい。アンゼルスを手助けいただき、ありがとうございました」

「あ、どういたしまして」

少女はひらひらと右手をふった。途端、ガリスタの口元が若干引きつったのがわかる。

アンゼルスも少し驚いた。彼から騎士の礼を受けて平然としている少女を、初めてみたから。

ガリスタは取り繕うように、コホンと軽く咳払いをしながら立ち上がる。

「……えー、つまり、そういうことですので、恩人である貴女に心ばかりですが謝礼をしたいと……」

そう、どんなにふざけた相手でも、助けられたことに変わりはない。その事実で頭が痛くなった。

「謝礼ってお金？ そんなのいらないよ」

少女は徐にくすんだ皮袋を取り出し、顔の前に掲げる。

「稼いだばかりで充分あるから。必要以上にあっても重くなるだけだし」

思わずアンゼルスとガリスタは顔を見合わせた。このぐらいの年頃の少女は、いろいろと入用だと経験から判断している。なくて困ることはあれど、あって困ることはない。なのにいらないと言った少女の言葉に淀みはなかった。

「その謝礼で、貴女の美しい髪に彩りを添える髪飾りでも、お買いになったらいかがでしょう？ もしくは、首飾りや腕輪でも」

「それもいらないよー。踊るのに邪魔じゃない」

街中を歩く少女達は、揃って装飾品をつけて身を飾っていたものだから、この少女も同じだろうと思っていた。しかしどうやらその部分でも、この少女は普通の少女とは異なっているらしい。

先程見せてくれた宙回転。確かにあんなことを何回も繰り返したら、頭から飾りは落ちるだろうし、他の装飾品も邪魔になるかもしれない。

「しかしそれでは……こちらの気が済まないのですよ」

ガリスタが困惑気味な表情を浮かべ、軽く腕を組む。アンゼルスとしても、この少女に借りを作っただけなのは気が引けた。

「それなら、何か望みはないか。こちらが叶えられる範囲であるならば、叶えよう」

これが一番手っ取り早い気がした。この少女は普通ではないのだから、こちらが頭を捻るより、本人に決めてもらったほうがいだろう。

「あ、それならね——」

少女は再びアンゼルの眼前にやってきて、顔を見上げた。朱色の瞳に見つめられて、思わず心臓がどきりと跳ねる。

「もう暫くお兄さんの傍にいさせてよ。もっとその髪と瞳（め）、見てたいから」

「は？」

言うなり少女は、じっとアンゼルを見つめはじめた。朱色の瞳が星明かりを宿し、きらりと光る。純粹で真っ直ぐな視線に頭が真っ白になり、アンゼルは何も言えなくなった。

「お嬢さん。私達はそれでいいとして、貴女のいう『暫く』とはどのくらいの時間をさすのですか？ ——今夜はもう、貴女のような可憐なお嬢さんが出歩いていい時間ではありません。アンゼルの髪と瞳を觀賞するのは悪いことではありませんが、よろしければ、それは明日にしていただけないでしょうか」

「そういえば、もうそんな時間かぁ」

ガリスタの助け船に、少女はパッと視線を外した。視線が離れたことにほっとする。が、
「それでは、明日私共が貴女の宿に出向きたいと思いますので、宿の名前を教えてくださいませんか？」
「いいよー」

逆にどンドン話を進めてしまい、再び慌てた。

「イ、インディクト卿！ 勝手に話を進めないで下さい！」

つまりまた明日、この少女に觀賞植物のごとくジロジロと見つめられろということか。しかも今度は恐らくこの少女の気が済むまでの間。彼女のいう『暫く』がどれくらいかわからないが、すぐには開放してくれそうにないのは明らかだ。

「こんな可愛らしいお嬢さんに見つめられることの、何が嫌だというのですか。私からしたら、何とも羨ましい話ですよ」

「なら代わって下さい」

「えー、そっちのお兄さんじゃ意味ないよー」

アンゼルの提案は少女の不満気な声で却下された。ガリスタの笑顔が若干引きつったのは言うまでもない。

「麗しいお嬢さんからの御指名なのですよ？ 男なら応えるべきでしょう。それとも、貴方には他に何かいい案があるのですか？ あるのなら言ってください」

ニコニコと浮かべた満面の笑みには、有無を言わせぬ迫力があつた。多分にやっかみが含まれているのは気のせいではないだろう。しかし言い返す言葉も見つからない。少女に何か望みを尋ねたのは、他ならぬアンゼル自身なのだから。

少し冷静になって考えてみれば、少女が望んだことは取るに足らないことだ。そんなことかと思うのが普通であって、渋る理由はない。むしろ普段の自分なら、なんの躊躇いもなく頷いていただろう。

それなのに何故気が乗らないのか。否、よく考えずとも、じろじろ見られて気分がよくなるわけがない。アンゼルは女性の視線を受けて喜ぶガリスタとは違うのだ。

それなら、ただ我慢すればいい。確かに自分の色彩は珍しいが、ずっと見続ければいずれ飽きるだろう。何だかんだでこの少女に助けられたのだから、それくらいの間は我慢してやるべきだ。

「……わかりました。それで彼女が満足するなら」

「やったー！」

少女が諸手を上げて喜びを表現する。何がそんなに嬉しいのかはわからないが、それで満足したということなのだから『謝礼』の代わりには充分だろう。

「明日、こちらから伺おう。それでいいな？」

「うんうん！」

少女は大きく頷くと、ぴょん、と軽い足取りでアンゼルの前にやってきて、

「ありがとう！」

無邪気に微笑んだ。

「――！」

途端心臓が大きく音を立て、慌てて少女から目を逸らした。

ああそうか、渋ったのはこれが原因だ。この少女に見つめられると、何故か落ち着かなくなってしまう。

しかし何故落ち着かなくなるのだろうか。今まで容姿と家柄のため、じろじろと人に見られることはあれど、こんな風に落ち着かなくなることは一度もなかったというのに。

「今夜はもう遅いですから、宿までお送りしますよ」

「別にいいよ。何かあっても自分で対処できるし」

また明日、と少女は右手を大きくふり、金糸の髪を揺らしながら、小さい姿を更に小さくさせていった。

「私達も宿に戻りましょうか。寝ている男達は、そのうち夜警の兵士が拾ってくれるでしょう。鉢合わせでもしたら説明が面倒です」

「――そうですね」

自分達は今、内密の調査に来ている。本来なら街中に、しかもこんな時間帯にうろうろしているような身分ではないのだ。口止めできないこともないが、せずに済むならそれにこしたことはない。

二人は宿に向かって歩き始めた。

暗闇が濃くなった気がするのは、眩い金糸がいなくなったからだろうか。

明日またあの少女と会う。暗闇の中でさえ輝いていたあの髪が日の光に触れたとき、一体どれほどの輝きになるだろう。

ふとアンゼルは、あの少女に再び会うことを悪く思っていない自分に気づいた。確かに変わった少女だったが、髪だけは綺麗だったと思う。貴族の中に金髪の持ち主は多いが、彼女のような見事な金糸の髪の持ち主は見たことがない。

あの少女は自分の髪と瞳の色が綺麗だと言っていたが、己自身の髪の方がよっぽど綺麗ではないだろうか。

「――アンゼル、一ついいでしょうか」

ガリスタが不意に立ち止まる。その声音は空気を凜とさせる神妙なものだだった。

「明日、あの少女と共に王宮へ戻ってくれませんか？」

「な!？」

アンゼルはガリスタの金瞳（め）を凝視した。そこに穏やかさはなく、切れ長の瞳が鋭く細められていた。「あの少女が倒した男達ですが……全て正確に急所を強打されていました。痣がくっきりと残っていたので間違いありません」

言われて、あの少女が突然やってきてから、一分にも満たない僅かな時間で五人の男達を地に沈めたことを思い出す。それを頭で理解したとき、この少女は危険だと判断した。彼女のペースにすっかり気をとられ、警戒すべき相手だということを失念していた。

「これは普通の人間どころの話ではありませんよ。急所を打つことに躊躇いがなさすぎる。それと同時に死なないう、加減もされていました。この意味がわかりますか？」

「……そんな芸当ができるのは、訓練された暗殺者（アサシン）以外にありえませんか」

王位継承者の王子達が、一つだけの継承権を賭けて争いを激化させたとき、王侯貴族は常に暗殺の危機に晒されていた。皆が皆、拳（こぞ）って暗殺者（アサシン）を雇い、邪魔者を排除しようとしていたから。

そのせいで十三人いた王子達は、四人にまで数を減らした。王位を継げなかった三人は、それぞれ辺境の地にある屋敷に幽閉されたが、命を落とさなかつただけかもしれません。

継承者にふさわしい王子に期待をかけ、権勢を誇ろうとしていた貴族達も、多くが暗殺者（アサシン）の手にかかったとされている。

血腥（ちなまぐさ）い王位継承争いに終止符が打たれてから三年が経った今、王都の治安も大分回復し、政情も安定してきている。その分仕事が減った暗殺者（アサシン）達は、足を洗う者が続出したと聞いている。リアという少女も、そのうちの一人かもしれない。

「今追っている事件を逸早（いちはや）く解決したいというのに、満足に調査もできていない状態です。相手は正攻法が通じる相手ではありませんから。――けれど彼女なら」

「成る程――しかし、そんな危険人物を、わざわざ王宮へと連れて行ってもいいのですか？」

ガリスタは見た目は派手ではあるが、剣の腕は確かな騎士だ。そんな彼が少女の手腕を危険視している。もしもあの少女が裏の世界から抜けておらず、王宮の要人を暗殺するために潜伏しているとしたら、危険人物をわざわざ招いてしまうことになりかねない。

「ですから王宮に向かうまでに、リアさんが我らにとって害となるか利になるか、見極めて下さい。陛下を見定めた貴方の洞察力に期待してますよ」

「……そういうことですか」

厄介なことを任せられたかもしれない。確かに物事を見極め、冷静に判断することは得意だが、それがあの少女に通用するだろうか。

事実、少女と会ってからは始終ペースを崩されていた。突拍子もない性格もだが、何よりも、あの少女にまっすぐ見つめられると心が落ち着かなくなる。

「……まあ、確かに彼女は変わってますね。女性にあんなに軽くいなされたのは初めてですよ……」

ガリスタは金の瞳を遠いところへ向けた。必死に取り繕っていたが、やはり相当ショックだったらしい。

「あまり自信はありませんが……僕なりに見定めます。そのうえで、陛下に進言してみましよう」

「ええ、頼みましたよ」

二人は再び夜の街を歩き出した。早速あった分かれ道を、アンゼルは左に曲がる。

「アンゼル、宿はそちらではありませんよ」

「……」

今度は迷うことなく宿へと戻れそうだ。

「今度は君の名前を教えてくれるかな」

名乗ったあと少女に尋ねると、少女はゆらりと小さな首を傾げる。

「……いつも、何と呼ばれているんだい？」

言い方を変えてみると、少女は再び沈黙した。何か必死に考えているようだ。

「むすめ」

ポツリと口に出した言葉は、到底名前とは思えないものだった。

「おとうさま、は、いつも、そうよぶ」

「他にはないのか？」

「……おまえ、とか、これ、とか……こんじきの、とか」

今度はこちらが沈黙する番だった。まさか人としての名前すら与えられていないなんて。

「――なら、わしが君に名前をあげよう」

少女に向かって微笑むと、彼女は再び瞳をぱちくりと見開く。

「その金色の髪はとても綺麗だし、そうだな、この名前はどうかかな――」

硝子の窓から射し込み始めた日の光が、白いシーツを照らす。日が昇るごとに角度は変わり、シーツに小柄な身体を包んで眠っていた少女の顔に、容赦なく光を注ぎ込む。

「うみゅ？」

少女は寝返りをうつと、身体をもぞもぞと動かした。一つの束に纏められた金糸を身体で潰さないよう気をつけながら、ゆっくりと身体を起こす。腕を伸ばして大きく伸びをすると、視界はこれで見納めになる部屋の中を映した。

ベッドから降り、窓を開けて少女は日差しを一身に浴びる。金糸の髪がキラキラと輝いた。

「おー、絶好の旅立ち日和」

少女が空を見上げると、雲ひとつない青空が広がっていた。

コンコン

素晴らしい朝の到来に感動していると、扉が軽くノックされる。

「はーい」

「あ、リアちゃん起きた？ 朝ご飯の支度できてるから、降りてきてね」

「着替えたらいきまーす」

扉の向こうにいる宿屋の女将に、いつもの間延びした声で答えると、借りていた白い寝間着を脱いで、いつも着用している袖のない紫紺の男物の長衣を纏い、無骨なブーツを履く。

髪を一つにまとめていた三つのリボンをほどいて首をふると、さらりと音を立てて背中を覆った。その長さは腰までである。数少ない荷物の中から櫛をとりだすと、こめかみから伸びる髪だけ残し、それ以外の髪を頭の高い位置へと持っていく。先程解いたリボンの一つを手に取り、素早く結った。

残った二つのリボンをむきだしの両腕にしっかりと巻きつけ、ベッドの上に置いてある、対を成す剣が括り付けられたベルトを腰に巻いた。

歌って踊れる男装の美少女曲芸師の完成だ。

寝起きの名残のない軽やかな足取りで部屋を後にし、温かい朝食の待つ食堂へ向かう。

リアを待っていたのは、焼きたてのパンとミルクで作られたコーンスープ。宿の宿泊客達が、おいしそうにそれを頬張っていた。彼らの横を通り過ぎ、定位置であるカウンター近くの四人用テーブルの椅子に

腰掛ける。

「おはよう、リアちゃん。よく眠れた？」

「おはよう、女将さん。もうぐっすりだよ」

白髪交じりの茶色い髪を一つ括りにした四十絡みの女将は、人が良さそうににっこり笑うと、持っていたお盆をリアの前に置く。スープから立つ湯気と匂いが食欲をそそった。

「いっただっきまーす」

行儀よく手を合わせると、パンをちぎってスープにつける。そして零れないようそれを口へと運んだ。

「んー、おいし！ やっぱ女将さんの料理は最高だね！」

顔を綻ばせながら幸せそうに食べるリアを見て、女将は少し寂しげに顔を曇らせた。

「リアちゃんとも今日でお別れなんて、寂しくなるわね」

女将は腕を組みながら左手を頬にあて、物憂げな溜め息をもらす。

聞いた話によると、リアがやってくる二週間くらい前に、この宿で働いていたリアと同じ年頃の少女が、突然行方不明になってしまったらしい。

明るく働き者で女将を実の母のように慕い、女将もそんな少女を実の娘のように可愛がっていたという。街中を聞いて歩いて探し回ったようだが見つからず、落ち込んでいたところへやってきたのがリアだった。

女将はリアに本当に世話をかけてくれた。リアが公演を行っていたパブを教えてくれたのもこの女将だ。初めは日が暮れてからの公演に心配そうな顔をしていたが、公演が大好評だと聞くと、自分のことのように喜んでくれた。

しかし、未だに失踪した少女は戻ってこなかった。リアがやってきたのは大体一ヶ月程前。つまり失踪してから一ヵ月半が経とうとしている。女将の見せる笑顔の裏に、寂しさが潜んでいることに気づいている客は、どれほどいるだろう。

チリンと来客を示す鐘が鳴った。女将は慌てて早足で扉の方へ向かう。

女将のことは可哀想だと思うが、だからといってだらだらと長居をすることは、女将のためにはならない。大切な人がいなくなってしまうたら、確かにとても悲しいけれど、楽しく生きるためには、それを自分で乗り越えることも重要なのだ。

後少しで朝食を全部平らげるところまできたとき、女将が頬をうっすらと赤らめながら、リアの元へと戻ってきた。

「リアちゃん、貴方にお客さんよ。しかもカッコいい人が二人も！」

先程の寂しげな雰囲気や嘘のように上機嫌な女将の後ろを見ると、見覚えのある色彩を持った男性がいた。

リアの瞳がキラリと輝く。青空と同じ色の髪に鮮やかな紅い瞳。間違いない、昨夜出会ったあのときの男の人だ。

気づくと身体が勝手に動いていた。跳ねるように椅子から降りて女将の横をすり抜け、彼の手前にいた背の高い男の人を手で払い除ける。

「来てくれたんだ！」

そして彼に勢いよく飛びついた。彼の身体がぐらりと傾ぎ、二人してばたりと床へと倒れる。

彼が約束を破ると思っていたわけではないが、再び会えたことが嬉しかった。

明るくはっきり見える彼の色彩は、暗闇の中で見たときよりも美しい。しかし、彼の瞳に宿っているのは苦々しい光だった。

「……っ、いきなり何をするんだお前は！」

「え？ 何をとって、お兄さんを見てるんだよ」

満足するまで観賞させてくれるのではなかったのだろうか。真下からの不満気な視線を受け続けていると、彼は目を細めて横を向いてしまう。

「……リアさん、確かに約束を持ちかけたのはこちらですが、その体勢は流石に……」

リアは床に両手をつき、アンゼルの顔を真上から見つめていた。簡単にいうと、彼を押し倒した上から見ている。

この体勢に何か問題があるとするなら、

「あ、そか。背中痛かった？ ごめんね、嬉しくてそこのこと考えてなかったよ」

押し倒した際に彼が背中を打ってしまったのを放っておいたことだろう。リアは身体を起こしてアンゼルからどくと、彼もほっとした面持ちで身体をおこす。

「そういうことでは……いえ、結果オーライですかね……」

「？」

ガリスタの眩きに首を傾げながら立ち上がる。アンゼルの方を見ると、思い切り顔を逸らされた。そんなに背中が痛かったのだろうか。

「リアさん、よろしければ座りながら話でもしませんか？ 実は、私から貴女に頼みがあるのです」

「頼み？」

リアは右手を顎にあてふと考えると、朝食全てを食べきっていないことを思い出す。席に戻り、二人に向かいの椅子に座ることを促した。

僅かに残ったスープをスプーンを使って喉に流し込む。リアの向かいにガリスタが座り、斜めにアンゼルが座った。彼はあいかわらずこちらを向いてくれない。

「ブラックコーヒーを二つお願いします。リアさんも何か飲まれますか？」

「わたしはいいよー」

成り行きを見守っていた女将にガリスタは注文すると、女将は再び頬をうっすらと染めながら、かしこまりました、と告げて上機嫌でさがっていく。

「それで、話ってなに？」

最後の一口を口に運びながらリアは尋ねた。

二人は確か貴族だと言っていた。ちらりとガリスタを見遣る。臙脂色の背広にじゃらじゃらと、やたら豪華な釦や飾り紐がついている。豪華な赤い巻き毛も相俟って、遠目から見ても百人中全員が貴族だとわかるはずだ。

一方アンゼルは、小奇麗だが一般的に広く出回っているような簡素な旅装束を纏っている。一見すると彼はガリスタの従者に見えなくはないが、もしも彼が本当に従者ならば、主であるはずのガリスタが、わざわざ単身で夜の街を探そうとするとは思えない。

そんな彼らが何故行動を共にしているのかは知らないが、おそらく『頼み』とやらに関係があるのだろう。「あまり大きな声では言えないのですが……私達は現在、極秘裏にとある調査をしまして」

やはりか。しかし極秘任務にしては随分派手な格好に思える。

「貴族さんも大変だねー。それで、わたしに何をしてほしいの？」

つまり、彼らの調査に協力しろということだろう。道を塞いでいた男達を地に沈めた手腕が買われたに違いない。荒事だろうか。

「話しが早いですね、助かります」

ガリスタは満足そうに笑うと、左手でアンゼルの示した。

「リアさんに頼みたいことというのは、彼の護衛です。一旦報告に戻らないといけないのですが、二人同時に戻るわけにはいかなくて」

思わぬ内容に思わずアンゼルを見つめた。彼は僅かに視線を泳がせたが、今度はそのまま逸らさずにリアの持つ朱色の瞳と合わせてくれた。

「昨夜の様に襲われることはないと思うが、念のために、だ」

確かにアンゼルは、髪と目の色だけでなく顔自体の造作もかなり整っている。すっきりとした鼻梁に白い肌。鮮紅色の瞳は細く長く、意思の強さが宿っている。

簡単にいうと美人なのだ。男性に向かって言う言葉ではないが、そうとしかいえなかった。

昼間は夜の様にあからさまに狙われることはないだろうが、柄がよろしくない人間にへたな因縁をつけられ、絡まれる可能性は充分にありうる。

「どうでしょう？ アンゼルの傍にいたいという貴女の要望とも一致しますし、受けて下さるなら、報酬代わりに、ここの宿代をこちらで負担させていただきますが、いかがでしょうか」

そんなの、よく考えるまでもない。

「うん、いいよ。結構長い間泊まってたからかなり高くつくと思うけど、そっちがそれでいいならね」

彼と一緒にいられるうえに宿代まで出してもらえるのだから、断る理由なんてあるはずがなかった。

一旦話しがまとまったと同時に、女将がお盆を持ってリアのテーブルへとやってくる。

「コーヒーお持ちしました。——リアちゃん、食器下げてもいいかしら？」

「うん。おいしかったよ、ありがとう」

コーヒーの変わりに空になった皿をお盆にのせ、ウッフ、私もあと十年若ければねえ、と小首を傾げながら片手を口元に当てた。リアの向かいに座る二人をちらちらと見ながら、別の客の所へと足を運んでいく。

「ありがとうございます、リアさん」

ガリスタはコーヒーカップを持ち、にっこりと微笑んだ。同時に周りから、キャ、と小さな黄色い声があがった。こういう動作を『優雅な動き』というのだろう。

「そういえば、二人はなんの事件を追ってるの？ 御家騒動の一環？」

二人のコーヒーカップを持つ手が一瞬ピタリと止まった。すぐに何事もなかったようにカップに口をつけたが、それだけであまり触れてほしくない話題なのだと思えるには充分だった。

「言いたくなければ別にいいよ。わたしも、つまらないごたごたに巻き込まれるのはゴメンだし」

彼らが調べていることに直接関わるわけではないのだから、知らなくてもいい情報をわざわざ知る必要はないだろう。面白そうな事件には自ら首をつっこんだりはあるが、貴族の事情に深入りはしない方がいい。機密を知ったせいで命を狙われる可能性もある。

「貴女が思うような殺伐とした御家騒動ではありませんから、そこは安心して下さい。ただ、先程も申し上げた通り私達は極秘裏に調査しているので、人の耳が多いところでは話すことができないのですよ。こちらとしても、説明したいのはやまやまなのですが」

「その割にはお兄さん、派手な格好だね」

何気なく口にした言葉に、アンゼルは顔を引きつらせた。同時にガリスタは片手で顔を覆い、大仰に溜め息をつく。

「ああ、貴女にもこれが派手だと映るのですね。私が所持している数多の衣装の中で、一番地味なものを必死に選び抜いたというのに……！ それなのに皆が皆、派手だ派手だと……！ 一体これ以上、どう地味にしるというのでしょうか」

彼は本当に忍ぶ気があるのだろうか。少なくとも、じゃらじゃらしたものを全て取り外せば、大分落ち着くのではないかと思うのはリアだけではないはずだ。

「……そういえば、お前は旅をしているんだろう？ 保護者はいないのか」

まだまだ言い足りなさそうなガリスタを止めるべく、アンゼルは話題をきり変えた。服装に頓着のない

リアとしても、彼の話は退屈しそうだったので丁度よかった。

「今はいないよ。四年前までは、育ててくれたじいちゃんと一緒に旅をしてたけどね」

四年前、十二歳のときに血の繋がらない祖父は病死した。そのとき立ち寄っていたのは小さな村で、まともな医者なんているわけがなく、リアは必死に介抱したが、甲斐なく祖父は亡くなってしまった。それ以来、ずっと一人で旅を続けている。

「……無神経なことを聞いたな、すまない」

「別にいいよ。親がいないっていうの、平民じゃ珍しいことでもないし。じいちゃんが死んじゃったのは悲しかったけど、思い出までなくなったわけじゃないしね」

祖父と旅をするようになってから、様々なことを教えてくれたし鍛えてくれた。旅をするのに必要なこと、人を見定める目、そして剣舞。今のリアがあるのは、全て祖父がいたからに他ならない。

「失礼ですがリアさん、どこか一箇所に定住するとか、旅芸人の一座に入るとかしないのですか？ 貴女が強いのはわかりますが、それでもやはりうら若き可憐なお嬢さんに変わりはありません。不安定な一人旅を続けるよりも、その方が安心して毎日を過ごせると思うのですが」

「あー……誘われたことはあるんだけどねー」

ぼりぼりと、リアは人差し指で頬をかいた。

実際、立ち寄った公演のできるお店で、専属で働かないかと言われたことはある。各地を転々としている旅の一座にも、声をかけてもらったことはあった。しかし、リアは全てを断ってきた。それはその店が気に入らないとか、そこにいる人々と一緒にいたくないという理由ではなく。

「わたし、一箇所で踊り続けるんじゃないで、いろんなところで、いろんな人の前で踊りたいんだよね。だからそのへんの道端でも普通に踊るよ。そういうところに入ったら、それができなくなるもの」

場所にも人にも縛られず、好きなように踊るには、一箇所に留まっていたはできないことだ。もしも旅の一座に入ったとしたら、一座の定期公演以外で人に見せるということを自由にさせてはくれないだろう。もしも無料でそのへんの道端で披露してしまったら、一座自体の価値が下がってしまうから。

「世界中のいろんな人とあって、いろんな場所にいて、それで好きなときに踊る。これができるのは一人だからこそだし」

だから、誘いの手を差し伸べる人たち全てを丁寧に断り、一人旅を続けている。

「成る程、自由気ままに生きているんですね」

ガリスタがカップを置いて朗らかに笑った。

そう、旅は気楽だ。もしも厄介ごとに巻き込まれたとしても、身一つで逃げてしまえばいい。気が合わない者と毎日顔を合わせる必要もなくなる。親しくなった者達との別れは寂しく感じもするが、出会いがあるからこそその別れだ。

「それではそろそろお暇しましょうか。代金は私が払いますので、アンゼルのよろしくをお願いしますね、リアさん」

「まかせて！」

ガリスタに向かって、ぐ、と拳を握る。ガリスタは席を立つとアンゼルの肩をポンと軽く叩いて顔を少し寄せた。

「報告の方、よろしくお願いします。私も、成果があがらなければ切り上げて戻ると伝えてください」

「わかりました」

「――彼女の話、どう思いました？」

「……嘘はついていないと思います」

最後の方は小さく呟いていてよく聞き取れなかった。コソコソ話すということは、仕事の内容のことか

もしれない。

ガリスタは女将に話しかけると、丁寧な物腰で事情を説明しはじめた。女将はまるで少女になったかのように頬を綻ばせている。

リアとアンゼルも席を立ち、出入り口の方へと向かう。カランと小気味よい鐘の音が鳴った。

外へと出ると、リアはくるりとアンゼルに向き合う。

「改めてよろしくね、アンゼル」

にっこりと微笑みながら、アンゼルの方へと右手を差し出す。アンゼルは戸惑いながらも、リアの手に自分の手を重ねてくれた。

線は細いが、しっかりとした手だった。

ひょこひょこと結い上げられた金糸が動く。相手の目線が頭一つ分以上も低いため、自然と高い位置にある髪がアンゼルの視界によく映った。

何が楽しいのかはわからないが、少女は上機嫌でアンゼルの隣を歩いている。そして時折覗き込むように顔を見上げてきては、満足そうに笑う。そのたびに音をたてる心臓がいちいち煩かった。

会話は全く弾んではない。話しかけられはしても、簡単な相槌を返すだけで終わらせているからだ。ガリスタに少女を見定めるよう言われたのだから、相手の会話に乗って人柄を把握しなければならないのに、気の効く言葉が見つからない。

これが貴族の令嬢だったなら、心にもない褒め言葉を、微笑みを浮かべつつ並び立てればそれで済むはずだ。しかし同じように頭の中で美辞麗句を浮かべても、これは違いうらうと内心首を横にふってばかり。何度もガリスタの見よう見まねをしたことがあるというのに、この少女相手だと、それができなかった。

せめてもの救いは、そのせいで少女の機嫌が損なっていないことだろう。手ごたえのない話相手だというのに、思ったことを何でも口にだし、無邪気に笑う。彼女の目的はあくまでアンゼルが持つ色彩であるから、それさえ拝むことができればいいのかもしれない。

「ねえねえ、アンゼルってお父さん似？ それともお母さん似？」

暫く二人で歩き続けて、話の内容が突然変わったり、いろいろ聞かれるのには大分慣れてきた。

「色彩以外の外見は、父に似ているといわれている」

「それじゃあその綺麗な色はお母さんに似たってことかあ」

「お前はどうかんだ？」

ふと、その見事な金糸がどちらから受け継いだのか気になった。

「わたし？ わたしは多分お母さんだと思う、かな？」

「……何故疑問系なんだ」

「だって気づいたときから、お母さんいなかったからね」

あまりにも明るくいうものだから、内容の重さに一瞬気づかなかった。

アンゼルは、思わず聞き返してしまったことを後悔した。彼女の技量と、血の繋がらない祖父に育てられたと言っていたことを考えれば、両親からの愛情に恵まれなかったことくらい想像できるはずだ。

何故こうも、この少女に対して落ち着いて対処することができないのだろう。

「お父さんの顔も覚えてないけど、金髪じゃなかったのは覚えてるから、お母さん似なんじゃないかな」

リアの声音は変わらずに明るい。無理をしているようにも見えなかった。

「……何故、両親のことをほとんど知らないのに、そんなに明るくいられるんだ……？」

それは少女への問いかけというより、自然と漏れてしまった言葉だった。言ってしまっただけからはっと口を押さえるが既に遅く、リアはきょとんとした顔でアンゼルを見ていた。

「何で、って言われてもね……。いないのが当たり前だったから、今更悲しくなんて思わないよ」

人差し指を顎に当てあがら小首を傾げる少女に何も言えないでいると、

「邪魔だ！」

ドン、と突然後ろから何者かに突き飛ばされた。身体が傾ぎ、前のめりになりながらも、何とか足を踏み出して踏みとどまる。顔をまっすぐあげると、小さめの鞆を手にもった男が、謝りもせずひたすら走り去っていくのが見えた。

「待て！ 卑しい盗人め！ 待てと言ってるのが聞こえないのか！」

小太りだが上質な濃紺の外套を羽織った貴族らしき男が、声を必死に張り上げながら鞆を持つ男を追いかけていた。小太りの男は走るのがあまり得意ではないらしく、既に荒く息を乱しているというのに、鞆を持つ男との距離は縮まるどころか広がっている。

「誰かそいつを捕まえろ！ 私の鞆を盗みやがった！」

自力で取り戻すことを諦めたのか、膝に両手をつきながら周囲の人間に呼びかける。しかし、男の偉そうな物言いに顔を顰める者はあれど、手を貸そうとする者は現れない。男は憎らしげに顔を歪め、これだから下民は、と吐き捨てた。

くい、とアンゼルの袖を誰かが掴んだ。

「アンゼル、大丈夫？」

リアだった。大丈夫とは、先程突き飛ばされたことを言っているのだろう。

「大丈夫だ。大したことはない」

倒れることはなかったので怪我もしていない。そう伝えるとリアはほっとしたように笑う。

「よかったー。――あとさ、あのおじさんの鞆、取り返してあげてもいい？」

リアは肩を大きく上下させながらのろのろと走っている男を指差した。相変わらず周囲の人間は彼を助けようとはせず、失笑もしくはざまあみると言わんばかりに見物している。

王位争いの政治の悪化の直撃を受けたバニティカの街の人々は、当然ながら貴族のことを好ましく思っていない。それが偉そうな小太りの男なら尚更だ。

その気持ちは充分理解できるため、彼に協力しようとしないうる街の人々を責める気はない。だが、相手がどんな人物であろうと、犯罪を目の当たりにして放置しておくことはできなかった。

「頼んでもいいか？」

だからリアの申し出は渡りに船だ。彼女に任せれば無事に捕まえてくれるかもしれない。

「まっかせて！」

リアは両拳をぎゅ、と握る。頼もしい返事だ。

さっと身を翻すと、リアはあっという間にのろのろと走っていた男に追いついた。それを軽い足取りで颯爽と追い越し、かなり先を走る盗人との距離を縮めていく。

アンゼルも遅れてリアを追いかける。あまり体力に自信がある方ではないが、小太りの男を追い越すのは、それほど難しくはなかった。

走り続けると、先の方でどよめきが走った。足を急がせると、長い金糸の髪を持つ少女が、鞆を持った男の腕をひねりあげ、地面に押さえつけているのが見える。

「っ！ この、離せ！ クソガキ！」

リアに押さえつけられた男は、どうにかして逃げようともがいていた。

「だめだよおじさん、人の物を盗んじゃ。――そんなの楽しくないよ」

男にかけた宥める言葉に、アンゼルは思わず足を止めた。『楽しくない』。そう言ったリアの表情は少し悲しげに曇っていた。男が悪事をしたことを咎めているのではなく、悪事を働くのは楽しくないことだと気づいてほしいと訴えているようだった。

「うるせえ！ どけてんだよ！」

しかし、リアの心は男には届いてはいない。金があり、かつ追いかけてくるのが苦手な相手を選び、そのうえ逃げることに些かも後ろめたさを感じられなかったことから、手馴れた犯行だとわかる。この男は恐らく、常習的に引手繰りを繰り返しているのだろう。

リアは思いが通じないと分かると、一つ嘆息して頸部に手刀を落とした。喚いていた男は意識を手放し、だらりと身体から力が抜けたのがわかる。

「申しわけありませんが、誰か巡回している兵士を呼んで来てくれませんか？」

遠巻きにしながら傍観を決め込んでいた野次馬根性のある街の人々にアンゼルの呼びかけると、ぱつ、と何人かが動き始めた。これなら数分もすれば兵がやってきて、この男を連行してくれるだろう。

「お、おお……！ この男を捕まえてくれたのか！」

大分温かくなってきた季節とはいえ、夏にはまだ充分早いというのに、汗をだらだらと垂らしながら、鞆を盗られた貴族の男が漸くやってきた。

「おじさん、これ」

リアが取り返した鞆を男に渡す。男は顔を輝かせながらその鞆を受け取ると、リアの顔をじろじろと睨め回し、口の端をにい、とつりあげた。リアの目がピクリと動くが、男はそれに気づかない。

「おー、おー。平民にしてはなかなか見目麗しいお嬢さんじゃあないか。どうだね、私の鞆を取り戻してくれた礼に、我が屋敷で働くというのは。丁度女手が欲しかったところなのだよ」

下心丸出しの表情と猫撫で声に、アンゼルの自分に向けられたものでもないのにぞわりと身の毛がよだった。

「――絶対、い・や。下心が見え見えだよ、おじさん」

リアは嫌悪感を包み隠さず前面に押し出す。

その気持ちはわかる。わかるが、真っ正直にそんなことを言われて気分を害さない人間がいるわけがなく、

「な、なっ……！」

案の定、小太りの男は憤りで顔を真っ赤に染め上げた。

アンゼルの右手を額に当てて大きく嘆息した。昨夜出合ってから、薄々は思っていた。リアは思慮が足りていない。宿で抱きついてきたことや、今のことでそれがはっきりとした。

「私を誰だと思ってる！ 下民ふぜいが調子に乗りよって……！」

「おじさんが誰かなんて知らないよ。それより普通なら、まず『ありがとう』っていうんじゃないの？ 子供でも知ってる常識だよ」

リアはやれやれと両手を広げて肩を竦めた。本人はその態度が、相手にとって火に油を注ぐ行為だとわかっていないに違いない。

小太りの男は赤い顔のまま、短く太い腕を何度も小刻みに動かしリアを怒鳴りつけている。しかし当のリアはただ呆れた顔をするだけで、それがさらに男の憤りを買うという悪循環だった。このままでは、暫くここに足止めをされてしまう。

「――申しわけありません。私の連れがご無礼を」

アンゼルの二人の間に割って入った。興奮で目と鼻の穴が大きく開いた顔をできるだけ見ないようにしながら、右手を胸に当てて頭を下げた。

「上質なお召し物から、相当の地位についている貴族の方とお見受けしました。貴方のような尊い方の機嫌を損ねてしまったことを、彼女に代わり深く謝罪致します」

この手の無駄に自尊心が高い貴族に対して、正論は一切通用しない。そんな相手に有効なのは、その自尊心を満足させてやることだ。

「上流階級の方々は、海よりも深い懐の持ち主だと伺っております。その深いお心で、どうか彼女を許してやってはいただけないでしょうか」

「ふ……フン、貴様はどうやら礼儀をわきまえているみたいだな」

男は偉そうに腕を組むが、その声音は満更でもないようだった。

気がかりは、リアが余計なことを口走らないかということだが、リアから口を開く気配はしなかった。自分でも面倒くさい状況になっていたことぐらいは、わかっていたのかもしれない。

アンゼルは身体を起こし、潜めるように声のトーンを落とした。

「街の人々に兵を呼ぶよう頼みました。暫くしたらやってくるでしょう。そのとき貴方の顔を見た兵に、貴方が盗人ごときに遅れをとるような、取るに足りない方だと思われてしまうかもしれません」

「何!?!」

「貴方の名誉をお守りするために、ここは私に任せては貰えませんか？ 決して貴方のお名前に傷をつけないと約束します」

男は少し考える素振りを見せると、仕方がないと言わんばかりに頷いた。

「私は、盗人ごときのせいで見くびられていいような人間ではない。そう思うだろう？」

「ええ。ですから、速やかにここを立ち去られた方がいいでしょう。貴方のような方が街にまでお出でになったということは、何か重要な御用件がおりなのでは？」

男は細い目をはっ、と見開く。どうやらこの騒ぎで本来の目的を忘れていたようだ。

「そ、そうだったそうだった。私には重要な用事があったのだよ。この場は君に任せるとしよう」

取り繕うのに必死な男に笑顔で一礼をすると、彼はそそくさとその場を退散していった。姿が見えなくなったところで、アンゼルは軽く息を吐く。ひとまずはこれでいいだろう。

「ありがとう、アンゼル」

振り返ると、にっこり笑ったリアと目があった。さっきまでは落ち着いていた鼓動が急激に跳ねる。またか。

「……このままだと、闇雲に時間を消費すると思っただけだ。礼を言われることじゃない」

「わたしがお礼を言いたくなかったから言っただけだよ」

にこにこ嬉しそうに笑う。少女の視線から逃れるように、アンゼルはくるりと背を向けた。やはり慣れない。

丁度そのとき、街の人々が衛兵を二人ほど連れてきた。これ幸いと、自ら兵に近づき具体的な事情を説明する。現行犯なうえに、目撃者も多く存在しているのだから特に問題もなく裁かれるだろう。

「犯人確保のご協力、感謝する」

「いえ、彼を捕まえたのは私ではなく……」

アンゼルはリアを示した。

「彼女ですので、お礼は彼女に言ってあげてください」

衛兵はリアを見て、目を丸くした。金の刺繍が施された男物の紫紺の長衣を身に纏い、むき出しの腕にリボンを巻きつけた奇抜な格好もさながら、見た目だけは背の低い華奢な少女だ。知らない者が見れば、こんな少女が引手繰り犯を捕まえたなどと、信じられないのも無理はない。

兵達は困惑気味に顔を見合わせるが、結局はリアのところに行ってアンゼルと全く同じ言葉を口にする。「ねえ、兵士さん。このおじさんどうなるの？」

リアが不意に兵士に尋ねた。先程までにこにこ笑っていた笑みは消え、顔を曇らせている。

「うん？ まずは牢へと繋いで、その後しかるべき裁きを下すが、それがどうかしたのか？」

「その、国によって罪の大きさが違うから……」

確かに同じ罪でも、国ごとに重さが違う。とある国では重罪とされることもあるし、別の国では軽犯罪で済むところもある。しかしリアが聞きたがっているのはそういうことではないだろう。

「引手繰りの場合は数年の懲役と罰金が課せられる。彼は常習的に繰り返していた可能性が高いからその分罪は重くなるだろうが、それでもせいぜい懲役期間が伸びる程度だ」

兵達の変わりに答えると、リアはポカンとアンゼルを見上げた。

「――死罪になるような罪じゃない。だから気に病むな」

国によっては窃盗で死刑に処されることもある。しかし、スウェニ王国において、引っ手繰りは命を奪わなければならない程重い罪ではない。

「――！」

はっと息を飲むリアを後目に、二人の衛兵に引っ手繰り犯を任せた。これで面倒な手続きは全て彼らがやってくれるはず。

ひと段落ついたところでリアを横目でみた。意識がないため、ずるずると引きずられるように連行されている男をじっと見つめている。

引っ手繰りを追ったことは不測の事態だったが、そのおかげでリアのことが少しはわかったかもしれない。

犯人を捕まえようとする前に、リアは許可を求めた。引っ手繰りを気にしつつ、依頼した『護衛』の任務中だということをしっかり意識している証拠だ。思慮が足りていないところもあるが、もしも許可を下さなかったら、彼女はアンゼルの傍を離れることはなく依頼を優先させただろう。

そして犯人に対して口にした『楽しくない』という言葉。単純な正義感からでも、無責任な正義の押し付けからくる言葉でもない。罪を犯すことがどういうことなのか、身を持って知っている者の言葉だ。その言葉をリアが口に出したとき、アンゼルスは犯人に自分を重ねているように見えた。

それで裏の世界から完全に足を洗ったとはまだ判断できないが、リアを王宮に連れて行ったとしても、特に問題はないだろう。

何より、リアは人の命が失われることを恐れている。そうでなければ、己が捕まえた者の刑罰のことを気にするわけがない。そんな少女が、国の要人の暗殺を請け負うとは思えなかった。

「リア、そろそろ行くぞ」

衛兵を見送っていたリアに声をかける。そこでふと、あることを思い出した。アンゼルスは昨夜リアに助けられたことに対し、礼を言っていないことを。

リアが貴族の男に言っていた言葉が脳裏に蘇る。あのときは、リア本人にもアンゼルスを助けたという意識がなかったから気にしていないのかもしれないが、助けられた事実は変わらないのに、アンゼルの第一声は『お前は一体何者だ』だ。子供でも知っている常識を、アンゼルスもできてはいなかった。

言うならば早い方がいい。続けて口を開こうとするが、ブン、と勢いよく振り返ったリアが、大きな朱色の瞳を更に大きく見開いてアンゼルス凝視するものだから、出かかった言葉が喉に詰まってしまう。

「――やっと呼んでくれた」

「は？」

「名前！ リアって呼んでくれた！」

リアの朱色の瞳がキラキラと輝いたと思った瞬間、ドン、という衝撃が胸に走る。完全に不意打ちを食らったアンゼルスに、突然抱きついてきた少女を受け止めてやるなんて芸当ができるわけもなかった。

二度あることは三度ある、という言葉は一体誰が生み出したのだろう。地面に打ち付けた背中と腰がズキズキと痛みを訴えているが、今はそんなことはどうでもいい。金糸の髪を持つ少女が覆い被さっている状態の方が、よっぽど問題がある。

「公衆の面前で押し倒す奴があるか！」

アンゼルスがこんな風に怒鳴り散らしたのは生まれて初めてかもしれない。

それでもにこにここと上機嫌に笑う少女を見て、アンゼルス頭からは、すっかり礼を言うことが抜け落ちていた。

辿りついた先にあるのはとても大きな建物だった。

大きく堅牢な壁の上から幾つもの尖った尖塔が見え隠れしている。ドーンと厳かに建つそれは、巨人が住んでいるといわれても思わず頷いてしまいそうだった。

辿り着くまでに随分時間がかかった。のんびりと、時折一方的に話しかけながら歩いてきたため、それなりに時間はかかるだろうとは思っていた。しかし道が次第にバニティカの出口の方に向かっていたのでふと、

「バニティカの外に出るの？」

と尋ねると、アンゼルスは訝しげに顔を顰めた。

「いや……王宮に向かっているつもりだったんだが」

「え、王宮？」

だとしたら反対方向ではないか。王が住む宮殿は、王都の中心部にあるのが普通だ。バニティカも、王都の端に建てられているのでなければ、街の中央にあるのではないだろうか。

「……非常に言い難いが」

「道に迷ったの？」

そうとしか思えなくて口にすると、アンゼルスはぼつが悪そうに頷いた。

「アンゼルスって方向音痴だったんだねー」

「……否定はしない」

道に迷ってしまったのなら仕方がない。王宮のような有名な場所なら知っている者がほとんどのはずだ。近くの人に聞きながら行けばいいだろう。

「すまない……その、街を出歩くのは、本当に久しぶりで……」

「あー、アンゼルスって家の中に引きこもってそうだもんね」

それなりに背は高いが、細身であるアンゼルからは、外を駆け回る姿は想像しにくい。厳かな椅子に座り、筆をとって執務に励む姿なら容易に想像できる。

「引きこもりは心外だ」

アンゼルスは無然とした表情を浮かべた。言われてから、確かに引きこもりと言われて嬉しいとは思わないな、と思った。

「言葉のあやだよ。アンゼルスって部屋の中で難しい書類とにらめっこしながら過ごしてそうだなって思って」

そういうとアンゼルスは納得してくれたようだった。

その後は街の中央を目標にし、時折人に道を尋ねながら歩みを進めた。

近隣国では一番の大国と言われているスウェニ王国の王都は、とても広かった。大通りで馬車が行き交っている光景を初めて見た程に。馬車自体は珍しいものではないが、たくさんの馬車が道を行き来している街は見たことがない。

それらの馬車は、国が運営している一度に二十人くらいを乗せられる大きな馬車達で、運行されてからまだ一年程しか経っていないらしいが、バニティカ市民の移動手段として浸透したらしい。行き交う馬車はどれも人で溢れていた。

アンゼルスに馬車を使うことを提案するが、そのためには王宮行きの馬車を見つけなければならず、見つけたとしても利用者が多く、すぐには乗れないとのこと。

「あんまり便利じゃないね」

「予想を超える利用者の数に、こちらも驚いている。今は馬車の数を増やそうとしている最中なんだ」

馬車の利用を諦め、結局徒歩のまま王都を歩き続けた結果、ついたときには日が真上に昇っていた。
「近くで見るとほんとおっきいなあ。お城をこんな間近で見たの初めてだよ」

様々な国に立ち寄ったが、用事も興味もなかったため、王宮を遠目で見ることはあっても、傍まで来たことは一度もなかった。二年前に立ち寄ったときも、バニティカを多少散策した程度で、王宮まではきていない。

アンゼルの行き先が王宮でなかったら、これから先も来ることはなかっただろう。

門の前には槍を持った番兵が二人と、漆黒の衣装に身を包んだ藍色の長い髪を持つ青年が、穏やかならぬ表情で立っていた。

「――トーヴァス！」

何かあったのかと首を傾げていると、アンゼルが彼らの元へと駆け寄っていく。

トーヴァスというのは長髪の青年のことだろうか。

「アンゼル!? 戻ったのか」

「ええ、たった今戻りました。――それより、貴方には陛下のお目付け役を任せましたが、何故こんなところに？」

「……それが」

リアも後に続いてアンゼルの後ろに立った。トーヴァスと呼ばれた青年は、表情を曇らせながら謝罪する。

「文官から追加の書類を受け取った隙をつかれて、窓から逃げられてしまった……すまない」

「――あの放蕩太子……！」

アンゼルが拳を握り締め、わなわなと身体を震わせた。噴火しようとしているものを、必死に抑えているようだった。隣に移動してちらりと顔を見上げると、案の定、鮮紅色の瞳に宿っているのは苛立ち混じりの怒り。

「――！」

息を飲む音がしてふとそちらを向くと、トーヴァスがリアを見ていた。大きく目を見開きぎょっとした表情は、相当驚いている。

リアもトーヴァスを見てみた。アンゼルより少し高めの長身に、漆黒の衣装に包まれた体軀はとてもがっしりとしていて、相当鍛えられているのがよくわかる。ガリスタのような優雅さはないが、動作に無駄がない。海のように深い蒼い瞳は驚きつつも、すぐに冷静さを取り戻していった。感情をコントロールするのに慣れている。

しかし精悍な顔立ちながら、まだ若さがありありと残っており、リアやアンゼルより年上だろうがあまり離れてはいなそうだった。宿屋の女将が彼を見たら、また少女のように頬を染め、十年若かったらと言出しそうである。

「アンゼル、彼女は？」

「報告のために戻ってきたのですが、インディクト卿とは別行動をすることになりまして。念の為の護衛のようなものです――害はないので安心して下さい」

最後にボソリと呟いた言葉は聞こえなかったが、護衛と聞いてトーヴァスは腑に落ちた顔をする。

「話しを戻しますが、貴方の口ぶりからして、あの人はまだ見つかっていないのですね？」

「ああ。本当にすまない……俺の力不足だ」

「いえ、あの人が抜け目ないだけですよ……」

アンゼルは嘆息しながら額に手を当てた。

二人は脱走したという人物に何度も手を焼かされているのだろう。言外に、またか、と言っているようにリアには聞こえた。

「今、番兵に聞いていたんだ。門を通らなかったかと。どうやら外には行っていないらしい」

「……成る程、まだ敷地の中にいるのですね」

アンゼルの声のトーンが急激に下がった。ギラリと鮮紅色の瞳に、穏やかならぬ光が宿る。

「トーヴァス、僕も手伝います。外に出ていないということは、暢気に惰眠でも貪っているのでしょう。――王宮内を徹底的に調べます」

「あ、ああ」

丁寧だが、有無を言わせぬ迫力が込められた声音に、トーヴァスは一步後退した。リアも思わずアンゼルの凝視してしまう。

「丁度いい。リア、お前にも手伝ってもらおう」

「え!？」

いきなり話しをふられてリアは目を丸くする。

逃げ出した人を一緒に探してくれということはある。しかしリアはその人のことを全く知らない。

それなのに、アンゼルのその人物の具体的な特徴すら言わず、ずんずんと一人で門を潜っていってしまう。そして近くにいる人達にテキパキと指示を飛ばした。皆一様にアンゼルの気迫に気圧され、顔を引きつらせながら一礼し、その場を走り去っていく。

「知らない人をどうやって探せっていうの……？」

ポツリと呟いた言葉は、当然アンゼルの耳に届くはずがない。

リアとしても、アンゼルが困ってるならなんとかしてあげたいが、特徴がわからなければ探しようがなかった。

「その……手伝ってくれるのか？」

うーんと困惑していると、上から声がしたので振り返った。朱色の瞳が藍色の長い髪を捉える。確かトーヴァスだ。

「何か困ってるみたいだし、手伝ってあげたいとは思うけど、アンゼル何も言わずに行っちゃったから、探しようがないなあと思って」

「……ありがとう。陛下の特徴なら、俺が教えよう」

トーヴァスの口角が僅かに笑みの形を作る。それ以外に表情の変化があまりなく、彼は笑顔を作るのが得意ではないようだ。

「そういえば名乗ってなかったな。まあ聞いたとは思いますが、俺はトーヴァス。トーヴァス・トゥルーナだ」

「わたしはリア。――逃げたのって陛下なの？ さっきアンゼル、太子って言ってたような気がするけど」

トーヴァスの口から逃走を聞いた際、彼は確かに言った。放蕩太子、と。陛下とは王の呼び方であり、太子は王子の呼び方だ。本当に探しているのはどちらなのだろう。

「ああそれは、アンゼルは陛下が王位を継承する前からの付き合いで――王子だったころから、何度も脱走して頭を悩ませていたらしい」

「うわー、アンゼルも苦労したんだねー」

だから手馴れた様子で指示をしていたのか。

「そんな人が王さまで大丈夫なの？」

「あ、いや、確かに陛下はよく抜け出したりするが……民を思う心を持つ立派な方だ。ただ、集中力に斑があるだけで……」

それは褒めているのかよくわからなかった。しかしこれ以上は話が脱線してしまうと思い、リアは改め

て陛下とやらの特徴を尋ねる。

「陛下は背が高く細身だ。髪は赤みのある銀色で癖が強く、瞳は灰色。かなり人目を引く外見をしているから、それだけで充分わかるだろう」

「そうなんだ、ありがとね」

つまり背の高い銀髪を捜せばいい。それだけ特徴的なら、顔はわからずとも見つけることができるだろう。

「二人ともそんなところに立ってないで、探してください！ 見つけたら直ちに伝えること！ いいですね!?!」

アンゼルの叱責にトーヴァスと顔をあわせ、やれやれと肩を竦めた。

(うわあー広いなあ)

リアがいるのは城の中ではなく、周囲に広がる庭だった。芝生と砂利が敷き詰められ、間隔ごとに樹木が植えられている。更に進むと池があり、中央から水が噴き出していた。そこからちろちろと小さな川が流れている。

落ち着いた色彩を持つ花々も所々に飾られ、派手すぎない程度に目を楽ませるものだった。段差がないため、遠くもよく見渡せる。

しかしこんな見渡しのいいところに、本当に陛下は隠れているのだろうか。

アンゼルは絶対外にいると断言した。今回脱走するまでは、トーヴァスがしっかり見張っていたため、ここ一週間程はずっと執務に励んでいたらしい。その分の鬱憤が溜まって逃げ出したのだから、城の中に潜伏するのではなく、外の空気を吸いたがるはずだ、と。

そして彼はアンゼルが戻ってきたことを知らない。鬼の居ぬ間の洗濯ならぬ、鬼の居ぬ間の居眠りを悠々と決め込んでいると、アンゼルは踏んだ。

広い庭を固まって探すのは非効率ということで、リアは初めて見る大きな庭を、たった一人で捜索していた。一人、と言ってもちらほらと同じように探している人々が代わる代わる視界に映る。

彼らは本当に探すのに必死で、見知らぬ少女が庭園内をうろうろしていることを咎めようとはしなかった。探すのに夢中で気づいていないのかもしれない。

リアが探すのを手伝う分には都合がいいが、これでは不審人物がいたとしても、皆見逃してしまうのではないだろうか。少し警備のことが気になったリアだった。

これだけの人間が探しているというのになかなか見つからないということは、相当上手く隠れているのだろう。目だけで探すのは骨が折れそうだ。

リアは目を伏せ、ピタリと動きを止めた。視界が暗闇に覆われていても、慌しく動いている人々の存在を感じることはできる。だから目で探すのは止めて、感覚で探すことにした。

目を閉じたまま再び歩く。その足取りは目を開いているときと何ら変わりなく、リアが目を瞑っていることに気づく者は誰もいない。

暫く進むと、せわしなく動いている人々とは打って変わって、全く動くことのない気配が一つあった。リアはパチリと目をあけて、その気配がした方へと走り出す。

そこには大きな樹木が列を作っていた。枝の一つ一つが細かく、下から覗いても葉同士が重なり合い、大きな影を作っている。成る程、これなら肉眼で探そうとしても見つからないわけだ。

「王さまー、そこにいるのは分かってますー。皆探してるから降りてきてくださいーい」

試しに呼びかけてみるが何も反応はなかった。確かに呼びかけて出てきてくれるのなら、アンゼルも探している人々も苦労はしないだろう。

リアは居ると目をつけた木に、ひょいと身体を登らせる。枝と葉の隙間を掻い潜りながら上へといくと、

紺色の丈の短いジャケットと鼠色のズボンで覆われた長い足が見えた。どんどん近寄っていくと、その人物が赤みのある癖の強い銀髪の持ち主だということがわかった。

「王さまみっけ」

しかし、相変わらず無反応だった。灰色だと言われた瞳は伏せられ、規則正しい寝息が静寂の中をこだましている。

寝てる。

アンゼルの読みは完璧だった。木の枝に上手く身体を支えさせて足を組み、完全にリラックスしている。当たったアンゼルもすごいが、この王様も随分器用だ。

次なる問題が浮上した。見つただけでは意味がない。アンゼル達に知らせなければならないが、もしリアがここを離れたら、その隙をついて彼も移動してしまうだろう。

彼が狸寝入りを決め込んでいることぐらい、リアはお見通しだ。

「王さま一、起きてるのは分かってますよ一。だから起きてくださーい」

再び声をかけてみるが無反応だった。狸寝入りがバテていると分かったうえで無視を決め込んでいる。相当神経の図太い人物だ。

「――起きなければ最終手段をとらせてもらいますけど、いいですね？」

やはり相手は無反応だった。やれるものならやってみろ、ということか。それなら実行に移すまでだ。

リアは寝ている王を支えている枝の一つに目をつけた。そっと移動して頭上にあるしっかりとした枝を両手で掴んで身体を持ち上げ、そして枝に向けて体を落とす。それを何回も繰り返し、枝に細波を立てた。

「うわ!？」

安定していた支えを失った王は跳ね起きた。ぐらりと身体が傾ぎ、枝から落下する。間一髪のところを片手で枝を掴み、ぶらりと長い身体が揺れた。顔を下に向け、表情を強張らせている。

「おいおい……この高さから落ちたら洒落にならないぞ」

「だから言ったじゃない、最終手段をとらせてもらうって」

リアは王の近くの枝にちょこんと座る。彼は顔を引きたまももう一方の手でも枝を掴み、身体を振り子のように揺らせて枝の上に身体を持ち上げた。

「初めて見る顔だけど、俺に何の用だい？ 可憐なお嬢さん」

間近で見る王はまだ若く、アンゼルと同じくらい端整な顔立ちの持ち主だった。しかし纏う雰囲気はまるで違う。アンゼルが鋭利な刃物のごとく鋭い美貌を持つのに対し、彼が持つのは新月の夜に咲く月下美人のごとく儂き美しさ。銀髪と灰色の瞳という、全体的に白っぽい色彩を持っているからかもしれない。

しかしそれは顔だけを見ての話だ。彼は口元では苦笑を浮かべつつも、灰色の瞳は爛々と輝いている。突然落とされかけたことよりも、リアが何者なのかに興味津々といった様子だった。先程の図太さも相俟って、見た目から感じる儂さは微塵もない。

「用があるのはわたしじゃなくて、お城の人達だよ。皆一生懸命探してるんだから」

「全く、見知らぬお嬢さんまで巻き込んで、一体何をやっているんだ」

「あなたのせいでしょ」

おどける王に冷静につっこみを入れると、彼は徐に左手を額に当てる。そして僅かに瞼を下げながら目を伏せる。その姿は、まるで悲しみをぐっと堪えているかのよう。

「聞いてくれよお嬢さん。あいつら皆酷いんだ。この一週間、朝早くから夜遅くまで仕事、仕事、仕事と仕事漬け。人は誰しも休息というものをとるべきであるのに、それを決して許してはくれない。信頼していた奴も見張りに立つという裏切りをおこし、四六時中目を光らせる。完全に孤立無援となった俺は、休息を申請しても受理されないだろうと判断し、千載一遇の好機を得て、這う這うの体でここまで何とか辿り

着き、見事休息を勝ち取ったというわけだ」

立て板に水のごとくペラペラと、嘆いたり悲しんだり得意げになったり、王は表情を次々と変化させながら熱く語る。リアは相槌を打つ暇すらなかった。

「それなのに君は束の間の休息を手放せというのかい？ ああ、やはり俺の味方は誰もいないのだな。王とは孤独な生き物だと、一体誰が言ったのだろう」

「……馬鹿なことをほざいてないで、さっさと降りてきてください」

リアでも王でもない冷ややかな第三者の声が下から割り込む。下を見ると、枝と葉の隙間から空色と藍色が見えた。

「げ、アンゼ……」

王はあからさまに顔を引きつらせる。

「アンゼル、よくここがわかったね」

「木の上から誰かが落ちそうになるところを数人が目撃した。そして来てみたら案の定、だ」

ハア、と嘆息する音が聞こえた。表情を伺うことはできないが、呆れていることだけは確かだろう。

「僕が暫く留守にする際、貴方は任せろとおっしゃいましたよね？ 記憶力だけはずば抜けている貴方が忘れるはずがありません。その約束を守ってくださると信じて、執務を全てお任せしたというのに……」

「もしも帰ってきたときに、仕事が溜まっていたらどうなるか分かってますよね？ って俺を脅したのは誰だったかな」

「脅したとは心外ですね。仕事が溜まって困るのは、結果的に貴方ですよと忠告してさしあげただけではないですか」

ああ言えばこう言うとはこのことか。繰り返される言葉の応酬は他者が口を挟む暇を与えず、止む気配がまるでない。

「アンゼル……そのへんにしとこう。皆が不安げにこちらを見ている」

いい加減見かねたのか、トーヴァスが止めに入った。姿は見えないが困惑した何人かの人達が、木の周りをうろうろとしているのがわかる。木から落ちそうになった王を目撃したという者達だろう。

「——そういうことですので陛下、もう充分休息をとったはずですから降りてきてください」

「こんないい天気の日なのに室内に籠らなければならないなんて、勿体無いとは思わないか？」

「天気のいい日は今日だけではありません。——いい加減降りてこい、放蕩太子」

丁寧ではなくなったアンゼルの声音は、自身が持つ雰囲気と同じような鋭さを持っていた。周囲にいる人々に緊張が走る。

しかし木の上にいる王は至って平然としていた。口元を見ると僅かにつり上がっている。この状況を楽しんでいるとしか思えなかった。

「アンゼル、王さま降りる気配ないよー」

報告してあげると、王は開き直ったかのように枝と枝の間に身体を預け、悠々と足を組む。これは本格的にここに居座るつもりだ。

「リア、責任は僕がとる」

枝と葉が重なりあって、真下にいるだろうアンゼルの姿もあまり見えないはずなのに、紅い瞳と目があったような気がした。

「陛下をそこから落としてくれ、手段は問わない」

「うん、わかった」

アンゼルがそうしてほしいのならば、リアに躊躇う理由はない。

先程と同じように枝を揺らすため、枝を掴みながら立ち上がる。それを見て王は目をぎょっと見開き、が

ばりと身体を起こした。

「ちょ、おい！ 本当にやるつもりか!? ここから落ちたら怪我じゃ済まないぞ!？」

「利き腕さえ無事なら執務はできます。むしろ足の一本でも折れた方が、逃げられなくなる分都合がいいです」

しれっと言い放つアンゼルの冷ややかな声音が、王を更に焦らせる。リアは王が身体のほとんどを預けているだろう枝の上に乗れ、ぐ、と体重をかけた。

「わ、わかった！ 降りる！ 降りるから！ だから落とすのは止めてくれ！」

「王さまこういってるけど」

いつでも落とせる姿勢のまま、アンゼルの尋ねた。自分から降りる気になってくれたのなら、それが一番いいと思う。怪我をしたら痛い。痛い思いをしたくないのは皆同じだ。

「本当に降りる気になったのなら、今すぐ降りて下さい。十秒以内に。一、二」

「数えるの早すぎだろ!？」

王は慌てて木の上から降り始めた。

急いでいたせいで服の端が枝に引っかかってほつれ、猫のように柔らかそうな銀髪は、次々と葉っぱを絡めとっていく。ある程度の高さまでくると木から身体を離し、飛び降りた。

それをしっかり確かめたリアは、落ちたら怪我では済まないと言われた高さを、躊躇うことなく飛び降りる。

アンゼルの十と口にすると、二人はほぼ同時に地面に着地した。リアは体勢を崩すことなく、すっと軽やかに。王はぜー、はー、と肩を大きく上下させながら。

王は恨みがましく歪めた灰色の瞳をアンゼルのに向けた。

「お前に容赦という言葉はないのか……！」

「初めからさっさと降りてくれれば、僕だってこんなことはしませんよ」

アンゼルの瞳を窄め、あくまで冷やかだった。その言葉にショックを受けたのか、王は涙目になり、いかにも哀れんでくれと言わんばかりの表情でトーヴァスの方を向く。その表情に擬音をつけるならぐすん、だろう。

トーヴァスは戸惑いつつも、嘆息しながらはっきり言った。

「……やり方はどうであれ、陛下が降りてこないのが悪いと思います」

「トーヴァまでアンゼの味方をするのか！」

王は木の上で見せてくれたときと同じように、儂い容顔を悲嘆にくれさせた。それを見たアンゼルとトーヴァス以外の人々は、あたふたと慌てはじめる。しかし慌てはするものの、誰一人慰めようとする者はいない。それ以前に彼らは王を気にしているのではなく、アンゼルの気にしているようにリアには見えた。

「ああ、やはり王とは孤独な生き物なのだ。冷淡な補佐は俺を政治の道具としか見ず、唯一の味方と信じた者にも裏切られ……！ こんな哀れな俺に、救いの手を差し伸べてくれる心優しきものも存在せず……」

リアは彼を悲劇の主人公を演じている舞台俳優みたいだと思った。木の上でペラペラと捲し立てていたときも、同じように芝居がかった。彼は王よりも、役者の方が向いているように思う。

「一言いたいことはそれだけか？」

一際声のトーンが落とされた言葉は、心臓を突き刺すかのように冷たく鋭かった。アンゼルからゆらゆらと、見えてはいけなものが立ち上っているように見える。さあっ、と周りの人々の顔から血の気が引いていく。

どうやら芝居がかった台詞のせいで、アンゼルの堪忍袋の緒が切れたようだ。

アンゼルのつかつかと王に歩みよると、自分より背の高い王の胸倉をがし、と掴み、射殺さんばかりに睨

み付ける。

「ふざけるのもいい加減にしろ。執務に戻れ」

その声音は静かで落ち着いていたが、それが逆にアンゼルの苛立ちを表していた。

「……相変わらず、冗談が通じないなアンゼは」

王はやれやれと嘆息した。さっきまで泣き出しそうだった表情は一変し、あっけらかんとしている。台詞と同じく、表情も芝居だったらしい。

「戻るから、その怖い顔をやめてくれ。皆怯えているじゃないか」

「誰のせいだ、誰の」

アンゼルは顔を顰めながらも、掴んでいた胸倉を離す。同時にほっと安堵する声が回りからおきる。彼らが恐れていたのはやはり王ではなく、アンゼルだった。

同時に、王は自分達の仕事に戻るよう指示を出す。皆一礼をした後、そそくさとその場を退散していった。アンゼルとトーヴァスと王と、そしてリアだけがこの場に残る。

「さて、とりあえずお帰りと言っておこうか」

「……ただいま戻りました」

王は満足そうにニ、と口の端をつり上げた。その表情はあどけなく、やはりリアとあまり歳が変わらないように思える。

「まず、そのお嬢さんが一体誰なのか聞かせてもらおうか。俺の記憶が確かなら、お前と一緒に出かけたのはガリスタだった気がするんだがな」

その言葉でもって、王を探すことを第一優先としていたせいで先送りにされていたリアの素性を、アンゼルは簡潔に説明し始める。

「成果なし、という報告をするために先に戻りました。彼女はそのための護衛です」

「そうでーす」

「護衛？ ーああ、成る程」

王は一度眉根を寄せるが、すぐに得心がいったとばかりに頷いた。理解の早さにリアは思わず目を丸くする。トーヴァスもリアを見ただけで『護衛』だと納得していたが、彼の場合は自身も相当な実力を有しているからこそ悟ったのであり、背こそトーヴァスより高いが、細身でひよろりとしている王が、簡単に納得するとは思わなかった。

「あの高い木から飛び降りて平然としているんだ。それだけで普通のお嬢さんではないと思うのには充分だよ」

リアの心をまるで読んだかのように王はクスリと笑う。

そしてリアの前に立つと優雅に右手を胸に当てて一礼した。

「我が大事な友にして、優秀な補佐であるアンゼルの道中を守ってくれてありがとう。俺はスウェニ王国現国王、ジェライド・D・スウェニ。堅苦しいのは好きではないから、君の好きなように呼んでくれ」

そういつてジェライドは微笑んだ。灰色の瞳に宿る悪戯っぽい光は、やはりとてもあどけなかった。

「で？ リアを連れてきた理由を聞こうか」

執務室に戻るとジェライドは専用の椅子にどかりと座り、偉そうに足を組んで机の上に乗せる。

護衛をしてもらうためだけに連れてきたのではないと、とっくに見破っているらしい。それどころか、何故連れてきたのか検討もついているだろう。

「ご想像の通りです。今追っている事件を解決するために、彼女の力が役に立つのではないかとインディクト卿が判断したので連れてきました」

リアは今、ここにはいない。王直々に礼がしたいという名目で客室に案内されている。しかし彼女も馬鹿ではないから、それを額面通りに受け取ってはいないだろう。

「ハハ、ガリスタか。いつも女性に対してフェミニストを心がけているというのに、目的の為には手段を選ばないところがあいつらしいな」

ジェライドはニヤリと口の端をつり上げる。

「リアが危険人物か、そうでないかを判断するために、まずは護衛として雇ったというところ、だろ？」

「その通りです」

彼はいつもふざけているようで、僅かな情報から全てを把握し理解する。末の王子でありながら十二人の兄王子から玉座を勝ち得たのは、他ならぬその才覚のなせた業だ。

「それで連れてきたってことは、害はないと判断したんだな。俺も、彼女が要人を暗殺にきたとは思えない。多少変わってはいるが、人を殺しに来たにしては人懐こすぎる」

「むしろ彼女は、人の死を――特に第三者に命を奪われることを恐れているように思えます」

道中にあった引っ手繰りのことを説明した。ジェライドは顎に手を当ててふむ、と呟く。

「この件について説明したら、積極的に協力してくれそうだな。――なんせ、人命が掛かってるんだ」

リアは特別正義感が強い人間ではない。だが、自らが捕まえた人間の生死すら気に病む心根の持ち主だ。人命がかかった事件を聞けば、放っておけないと自ら協力を望むかもしれない。

「因みに、腕の方の具体的な強さはわかるか？」

いくらジェライドでも、見ただけで具体的な強さまではわからない。その道に精通しているわけではないから。只者ではない、ということがわかる程度だ。

「……彼女は相当な実力者です」

出会ったときのことを説明するより先にそう口を開いたのは、トーヴァスだった。

「彼女には、隙が全くありません。楽しそうに笑って話している時に、もしも俺が背後から剣を振り下ろしたとしても、仕留められるとは思えません」

「……それはすごいな」

アンゼルの、リアを見たときのトーヴァスの驚きようを思い出す。危険人物が堂々とやってきたことに対して驚いていたと思ったが、それ以上に動揺していたようだ。普段の彼は感情の起伏に富まず、滅多なことでは表情は変わらない。リアはそんな彼が目を大きく見開いて驚愕するほどの使い手なのだと、改めて実感する。

「ですが……俺は彼女を巻き込むべきではないと思います」

「何故だ？」

「アンゼルが、先程言いましたよね？ 人の死を恐れていると。俺は彼女が既に暗殺者から足を洗っていると思います。人の死を恐れていたら、暗殺者は務まりませんから」

確かに暗殺者にとって、一瞬の躊躇は命取りだ。

「悪人の生死すら気に病むような子が、暗殺を仕事と割り切れるとは思えません」

「そうだな。だからといって断定するのは危険だが、俺もそう思う。だけど、俺達が彼女に頼みたいのは人を殺すことではないぞ」

「彼女が足を洗ったのならば、一般人と何ら変わらないということになります。俺は、無関係の少女を巻き込みたくはありません」

トーヴァスの言い分は正しい。本来ならば、自分達の力だけで解決しなければならないのだから。しかし、そうも言われていられない事情もある。

「この件は、本当に信頼できる者のみで調査をしなければならないにもかかわらず、お前の知ってる通り、信頼できる者はほんの極僅かだ。今は一人でも多く味方がほしい。それはわかるだろ？」

「……はい」

トーヴァスは軽く目を伏せた。彼は口数は少ないが、誠実で真面目な騎士だ。いくら実力があるからといっても、少女を巻き込むことに抵抗を覚えるのは無理もない。

「トーヴァはわかるとして。アンゼ、俺にはお前もリアを巻き込みたくない、って見えるが、いいのか？」

「僕が？」

まさか自分に振られるとは思わず、アンゼは目を丸くする。確かに提案したのはガリスタだが、アンゼも納得の上リアをここまで連れてきた。リアが協力してくれるのならば、自体は確実に進展すると判断して。

ジェライドはふう、と一つ嘆息すると、組んでいた足をほどいて体を起こし、うっすらと微笑みを浮かべながらアンゼを見据えた。

「お前は何でもかでも客観的に決めてしまうから、自分でも気づいてないんだろ。――リアのことを話し始めてから、声のトーンが僅かだが落ちていたぞ。それと瞳が揺らいでいる。いつもの鋭さはどこへいった？」

「！」

思わず逃げるように顔を背ける。同時に脳裏に過ぎったのは、長い金糸の髪を持つ少女の笑顔。気づかないよう無意識に封じていた扉が、こじ開けられてしまった。

「自分の感情を無視しすぎるのがお前の悪い癖だな。お前だって本当は、巻き込みたくはないんだろ？」

言い返す言葉が見つからず、アンゼは口を閉ざした。指摘されて初めて、リアにこの件のことを話したくないと思っている自分に気づく。思い返してみれば、その思いはガリスタから提案を受けたときからあった。しかし彼女の力があつた方がいいと客観的に判断して、その思いを打ち消した。

「別に責めてるわけじゃない。むしろ俺は嬉しく思ってる。ガリスタ以上に手段を選ばないお前が、そんな風に誰かのことを気にかけるなんて初めてだからな。俺達は人形ではないのだから、感情を吐露することぐらいしてもいいだろ」

アンゼは顔を歪めながら目を伏せた。ジェライドの方が二つ年上なせいも、彼はたまにアンゼを弟のように接してくるときがある。兄弟がいないアンゼにとっても、ジェライドは主でありながら、兄のような存在でもあった。

「正直、自分でもよくわからないんです……」

リアと出合ってから、ずっと胸に何か渦巻いていた。こんなことは初めてで、これが一体何を表しているのかがわからない。

「ただ、彼女が……表情を曇らせるのは似合わないとは、思います」

引手繰りに対して見せた陰りある表情。何も考えず、のらりくらりと生きているのだとばかり思って

いたが、そうではなかった。彼女なりに苦勞を乗り越えて、そのうえで笑っているのだ。

「確かに彼女は陽だまりの中で笑っている方が似合っているな。トーヴァもそう思うだろ？」

「そう……ですね」

そんなリアの表情を自分が曇らせてしまうのは忍びなかった。彼女に悲しい顔をさせるのは本意ではない。

「つまり、俺も本音を言えば巻き込みたくはないんだ。だからアンゼ、お前が決めてくれないか？ 好きなほうを選んでくれて構わない。お前の判断に任せる」

「……それは、僕に責任を押し付けているのではないですか？」

「選択肢を与えてやったと言ってほしいな。感情に従うもよし、客観的判断に従うもよし、だ」

ジェライドはニヤリと口の端をつり上げる。

「それに、リアを連れてきたのはお前だろう？ なら、お前も俺に決断することを押し付けず、最後まで責任を持ってくれ」

まさにその通りだったため、アンゼは押し黙った。ジェライドが決めたことならば、アンゼ自身がどう思おうと、それに従うだけ。知らず知らずのうちに彼に決断を求めていたことに気づき、自分の甘さに内心溜め息をついた。

「少くくは考える時間をやろう。今からお前は一人でリアを呼びに行ってくれ。もしもリアを巻き込むべきでない、と判断したらそのまま戻って来い。それでいいな？」

「――わかりました」

アンゼは頷き、ジェライドに一礼してから執務室を後にした。

執務室から客室まで、そう離れてはいない。極僅かな時間だが、頭を整理しなおす時間をくれたことは嬉しく思う。

ジェライドは、アンゼが感情で動く人間ではないことを知っているというのに。

「相変わらずあの人は……身内に甘い」

昔からそうだった。アンゼと同じように客観的な判断を下しながらも、決して個々の感情を無下にしたりはしない。だからこそ、アンゼはジェライドを王へと押した。民衆を思いやれるよき王になれると。

アンゼの足は、迷うことなくリアのいる客室へと向かっていった。

一方、アンゼがいなくなった執務室では、

「夜会で多くの令嬢達を、隙のない笑みであしらい続けたあのアンゼがなあ……」

「それは陛下も同じでしょう……」

生温かい眼差しを扉に向けているジェライドに、トーヴァスが溜め息交じりに口を挟む。付き合いの長い年下の補佐を、彼は本当に弟のように思っていた。

「いやー、春がきたなあ、うん」

ジェライドはトーヴァスの言葉を聞き流した。アンゼがいたら、もう既に春も半ばです、と冷静に斬り捨てただろうなとトーヴァスは思った。

案内された部屋は、今まで見たなかで一番豪華ではなかろうか。ふかふかとした柔らかいソファに身体を沈めながら、リアは部屋の中を見渡す。

壁に飾られた絵画、使われている調度品、足元の真っ白な絨毯、そしてテーブルの上に出された焼き菓子。全てにおいて金がかかっていると思った。金や銀が使われた煌びやかなものではないが、漂っている雰囲気が違う。落ち着いた印象を与えながら、備品の一つ一つに手ばかりがない。そこは流石王宮の客室といったところか。

リアは焼き菓子が乗せられたトレイに手を伸ばし、一つ摘んで口の中に放り込む。さくさくとした触感

とふわりと広がる柔らかい甘さにうっとり口元が緩んだ。一口大だからぼろぼろと零してしまう心配もない。

初めは高級感漂う部屋に気圧されてしまったが、向こうもそれをわかった上で連れてきたのだから遠慮は無用と判断した。大いに寛がせてもらっても問題ないだろう。アンゼルスには行儀が悪いと怒られそうだが、ジェライドと名乗った王は、軽快に笑って許してくれるだろう。

(わたしにまだ何かしてほしいことがあるみたいだね)

ガリスタから護衛をしてほしいと言われて初めは拍子抜けしたが、どうやらアンゼルスを守ることはただの建前で、リア自身を王宮へ連れて行くことが本来の目的だったようだ。彼らが今追っているという事件に協力させるために。

(一体どんな事件なんだろう)

貴族自らが捜査に出るとは、よほどのことがない限りありえない。基本的に貴族というのは面倒くさがり、身の危険に迫られない限り動くことはないからだ。

しかし、始めに出会ったアンゼルスとガリスタ、そしてジェライドやトーヴァスを見ていると、そういった貴族とは一線を画している。

まず、リアのような低い身分の者に対する侮蔑がない。街中でひたたくりにあっていた男のようにわかりやすいのもいれば、態度に出さない者もいる。後者は言動の端々や目線などで感じるができるが、アンゼルス達にはそれすらなかった。

そして自らが動くことに対して戸惑いも躊躇いもない。

だからこそ、何の事件を追っているのかサッパリ検討もつかなかった。彼らが保身に走るような輩なら、ある程度は予想がついただろうに。

(ま、そんな人達だったならとっくにトズラしてるけどねー)

扉の外には見張りの一人も立っておらず、逃げようと思えばいつでも逃げられる。それなのに大人しく寛いでいるのは、彼らが追っている事件とやりに興味が沸いているからだろう。逃げるのは、話を聞いてからでも遅くはない。

リアはむくりと起き上がった。こちらに向かってくる気配を感じたから。するとコンコンと扉がノックされる。

「どうぞー」

返事と共に扉が開き、何度見ても飽きない空色と鮮紅色が姿を現した。ドキリと心臓が高鳴るのを感じる。

どんな用件かは知らないが、彼の近くにいられるのなら、もう暫くいてもいいなと現金なことを思った。

「……話がある。陛下のところまできてくれないか」

「うん、いいよ」

予想通りの展開に、リアはにっこり笑って答える。アンゼルスは、さっ、と顔を逸らした。何故かはわからないが、アンゼルスに笑いかけると彼はいつも顔を背けてしまう。嫌われているわけではないだろうから、顔を背けられる理由が全くわからない。

「い、行くぞ。ついてこい」

アンゼルスはぶっきらぼうに言い放つと、くるりと踵を返した。リアはその後を追う。歩幅こそ差があれど、アンゼルスの歩みは速くはないのでついていくのは簡単だった。

「今度は迷わないよねー？」

「あたり前だ」

冗談混じりに口にしたリアの言葉に、アンゼルスは嫌そうに返す。隣に並んで顔を見上げると、整った顔

を思い切り鬨めていて、リアは思わずクスクスと笑みを零した。

「何故笑う」

「だってアンゼル本気にするんだもん。王さまも言ってたけど、冗談が通じないんだねー」

そういうとアンゼルは苦虫を噛み潰したような顔をして、ふいと顔を逸らした。本人もどうやら自覚があるらしい。

廊下を二人で進んでいくと何人かとすれ違い、彼らは皆アンゼルに一礼して去っていく。彼らよりも、アンゼルの方が身分が高いからだろう。今思えば、ジェライドを探していたときも、人に命令を下すことに手馴れていた。

「アンゼルってわたしと同年くらいなのに、偉いんだね」

確かジェライドはアンゼルのことを補佐と言っていた。王の補佐といえば宰相だ。この歳でそんな地位につくなんて滅多にあることではない。

「与えられた地位が偶々高かったのと、他にいい人材がないというだけだ」

地位について、どうでもよさそうにアンゼルは呟く。彼は地位や権力を鼻に掛けるような人間ではないから、そういう面に興味はないのだろう。

「――ついでに、ここだ」

客室の扉と同じような造りの扉を、アンゼルは軽く叩いた。

「リアを連れてきました。入ります」

「おお、入れ」

中からジェライドの声がした後、アンゼルは扉を開けた。中にはジェライドとトーヴァスと、そしてもう一人初めて見る老人がいた。

顔に刻まれた深い皺に、顎から伸びる真っ白い髭。髪も同じく真っ白で、相当齢を重ねたご老人だということがわかるが、背はすらりと高く、背筋がピンと伸びている。着ているものは丈が踝近くまである藤色の落ち着いた色合いの装束で、素人目で見ても一目で上質なものとわかる一品だ。

「彼女か、件のお嬢さんというのは」

その口調は穏やかだが、リアの方に向けられた灰色の眼差しは、尖った氷で突き刺すかのように鋭く冷たい。

「……これはサウゼンテ宰相閣下。こちらにおいででしたか」

アンゼルが老人に向かって一礼した。彼はアンゼルを見て微かに視線を緩めたが、リアを見て再び眼差しが鋭くなる。

警戒されている。

当然といえば当然だった。彼からしたら、どこの馬の骨とも知れない娘が王宮にいるのだから。

「我が大叔父にして宰相殿も、話を聞きたいらしい。――ったく、どこから嗅ぎ付けてきたんだ、偏屈じじいめ」

リアは視線をアンゼルに移した。てっきりアンゼルが宰相かと思ったが、どうやら違ったらしい。宰相以外に王を補佐する役目を考えようとしてすぐに放棄した。今はそんなことをのんびり考えている場合ではないだろう。

「陛下、何かおっしゃりましたかな？」

「大叔父上殿の気のせいでしょう。さっさと話を進めるが、いいかなリア」

ボソリと呟いた悪態を耳聡く聞かれたジェライドは気づかなかったふりをして、さっと話題を切り出した。

「リア、君はバニティカにどのくらい滞在していたんだい？」

「ん？ 一ヵ月くらいかなー」

随分長い間滞在していたと思う。しかしそれと何か関係があるのだろうか。

「それなら一度は耳にしたことがあると思う。聞いたことはないか？ ある日誰かが、突然いなくなってしまった、と」

「！」

寂しさをごまかしきれていなかった、宿屋の女将を思い出す。雇っていた少女が突然行方をくらまし、街の中をくまなく探したが見つからなかった。そして今も戻ってはいない。

「わたしが泊まった宿で働いていた子が、わたしの来る二週間くらい前にどこかへ行ってしまったって聞いた……」

「大体一ヶ月半くらい前ということか……情報と一致するな」

「アンゼルス達が追っている事件ってそれなの？」

一人で街中全てを探せるわけがなく、女将は恐らく城に探してほしいと訴えただろう。しかしそれだけで王と側近である彼らが動くとは思えない。

「もしかして……いなくなったの、宿屋の子だけじゃないの……？」

しかし、それがもし頻発しているとしたら話は変わってくる。短期間に何人も失踪してしまったのなら、何者かによる故意的な事件に他ならない。

「ああそうだ。ここ一年程、バニティカで何人もの失踪者がでている。いなくなった者達は、誰一人見つかっていない」

リアの推察を肯定するかのようにジェライドは頷いた。

「リアが泊まった宿屋の少女が行方をくらませて十人になる。だいたい月に一度くらいの頻度で誰かが失踪しているんだ」

「……」

寂しい思いをしているのは、女将だけではなかった。いなくなってしまった人達を想う人は、一体どれだけいるだろう。

「数日の誤差はあれど、間隔をおいて失踪してしまう偶然などありえない。誰かが裏で糸を引いていると考えるのは当然だ」

「うん、わたしもそう思う。それで、わたしも犯人探しに協力すればいいってことだよな。誰かがまた失踪してしまう前に」

月に一度誰かがいなくなっているとしたら、そろそろまた誰かがいなくなってしまうもおかしくない頃である。それを阻止するためにも、一人でも多くの協力者がいるに違いない。

「話が早くて助かる。つまりはそういうことだ。十一人目の失踪者を出さないためにも、今は一人でも信頼できる人員がほしくてな」

ジェライドは肩を竦めた。アンゼルスも先程いい人材がいないと零していたが、人手不足は相当深刻らしい。

「一つ宜しいですか」

サウゼンテが厳かに口を開く。口調は穏やかなのに、場の空気が急激に冷えたのはキノ性ではないだろう。ジェライドが苦々しげに首を縦に振る。

「私は、彼女の力が必要とは思えません」

視線が再びリアを射抜いた。ジェライドと同じ色をしているのに、宿っている光はまるで違う。

「街を巡回させる兵を更に増やせばいい話ではないでしょうか。一般人である彼女に、わざわざ手間をかけさせることになってしまいます」

言葉の内容だけを聞けばリアを気遣っているように思えるが、本当は『得体の知れない小娘なんて信用できない』と言いたいのだろう。胡乱気な瞳はとても正直だ。

「まあ、確かにそうだ。だからこちらも強制はしない。君の意思に任せよう」

ジェライドがそういうと、四人の視線が一斉にリアへと注がれる。様々な想いが混じり合った三つの視線と、断る以外の返事を許さないという一つの強い視線。

リアは目を伏せ、注がれる視線を無視することにした。ジェライドの言葉に遠慮なく甘えさせてもらう。

貴族のごたごたに巻き込まれるのはごめんだ。しかし、宿屋の女将は娘のように可愛がっていた少女がいなくなってしまって、本当に寂しそうだった。寂しいのは、楽しいことではない。

「わたしが力になれるなら、やるよ」

こうして彼らと事件に関わることになったのも、何かの縁だろう。女将にはよくしてもらったのだから、これで恩を返すのもいいかもしれない。

「そうか、リアならそう言ってくれると思った」

ジェライドが満足気に笑う。しかし、同時に不機嫌な雰囲気が出てきた。言わずもがな、サウゼンテだ。

「大叔父上殿、彼女自身から了承を得たのですから、それでいいですね？」

サウゼンテは顔を顰めながら大きく嘆息した。

「陛下、もう一度考え直しを。彼女が幽閉した王子達が送り込んだ諜報員でないと、どうして言えますか」

取り繕うのをやめたサウゼンテは、眉間に皺を寄せ、射殺さんばかりに睨みつけてくる。彼の立場からしたら、そう心配するのも仕方がない。

だが、それよりもリアが気になったのは、

「そんな風に睨んでたら、皺がもっと深くなっちゃいますよ」

だった。彼にくっきり皺が刻まれているのは、そのせいではないだろうか。それでは顔が怖いと、見た目で損をすることになってしまう。

「ぶっ……！」

リアの言葉にジェライドが吹きだした。するとサウゼンテにギロリとひと睨みされ、慌てて手で口を塞ぐ。しかし堪えきれず、ひくひくと肩は揺れている。

「いきなり何を言い出すんだお前は!？」

ぎょっと目を見開いたアンゼルと目が合う。リアはきょとんと首を傾けた。何故アンゼルが怒っているのだろう。

「……最低限の礼儀もわきまえていないとは。それとも、雰囲気を読めない愚か者か？」

より一層眼差しが強くなる。もしかして皺が深いことを気にしていたのだろうか。それなら悪いことを言ってしまったかもしれない。

「大丈夫だよ、おじいさん。そのお歳で腰が曲がってないのはすごいことだもの！ それに比べたら皺が人より深めなんて、全然大したことじゃないよ！」

リアはぐ、と拳を握りながら力強く力説した。

「……っ！ ハ、ハハハ、だ、だめだ、もう……アッハハハハハハハ！」

ジェライドが机を拳でダンダンと叩きながら笑い崩れる。トーヴァスがそんな王をなんとか宥めようとしているが、全く効き目がない。

アンゼルはというと、片手で顔を覆い、深い溜め息をつく。今度はいいことを言ったと思うのに、何故諦めたかのような溜め息をつくのだろう。

「アッハハ……視線だけで人を殺せるといわれる大叔父上殿も……リアの前では形無しだ」

「笑い止まない陛下に言われたくはありません」

サウゼンテは慚然とした。そしてリアを一瞥して、軽く嘆息する。

「どうでしょう、大叔父上殿。これでも貴方はリアが諜報員だと思いますか？」

「諜報向きではない、ということはわかりました」

サウゼンテの表情から、鋭さが抜け落ちている。代わりに含まれているのは、多分な呆れ。彼に呆れられるようなことを言った覚えがなく、リアは首を僅かに傾けた。

「だからと言って、ここから先を話してよいかどうかはまた別の問題です。情報を漏らさないという確証がありませんからな」

リアはピクリと眉を寄せた。失踪した人々を連れ去っただろう犯人を捕まえるには、探す方も多くの情報がなければ探すのが困難だ。それなのに漏洩を気にするということは、知られては困ることがある、ということに他ならない。

思いなおせば、アンゼルとガリスタがわざわざ極秘で調査していたのもおかしい。市民に不安を与えないようにするため、ともとれるが、それだけでは理由が弱すぎる。

「ねえ……犯人に心当たり、あるの？」

それも情報を与えたら完全に不利になるとわかっている相手。一般兵等ではない。

「特定には至っていないが、範囲はかなり狭まっている」

そう答えたのはアンゼルだった。

「アンゼル！ 何を考えている。不用意に情報を口にするなど、慎重なお前らしくないぞ」

サウゼンテが信じられないという面持ちでアンゼルを見た。たったこれだけの情報でも、彼らが犯人と検討付けているのがどういった者達なのか、悟るには充分だった。

「閣下。確かに彼女は思慮の足りないところもありますが、仕事に対しての分別はついています。うっかり情報を漏らすということはないでしょう」

「……彼女は、お前が連れてきたのだったな」

サウゼンテは逡巡したあと、苦々しげな表情のままじっとリアを見つめる。灰色の瞳から訝しげな光が失われることはなかったが、初めに比べたらかなり穏やかなものになったと思う。

「仕方がない、お前がそう判断したのなら彼女の助力については認めよう」

「ありがとうございます」

「しかし油断はするな。認めはするが、信用したわけではないのだから」

アンゼルが軽く頭を下げると、サウゼンテは再び瞳を鋭く光らせ、ジェライドに一礼した。

「それでは私はここで失礼致します。調べ物がまだ残っていますので」

老体とは思えない颯爽とした動きで、サウゼンテは執務室をあとにする。部屋に沈黙がおりた。彼が去ってから暫くしたあと、ジェライドがハァー、と深く息を吐き、沈黙を破る。

「やっと帰ってくれたか……いつになったら隠居するんだ、あの偏屈じじい」

「僕達に全てを任せるには、まだまだ未熟だということでしょうね」

「俺は陛下もアンゼルも、よくやっていると思うが……」

「全くだ。だから早く宰相を継いでくれ、アンゼ」

「それを決めるのは閣下です、陛下」

三人はサウゼンテが出て行った扉をじっと見据えながら、それぞれほっとした面持ちで肩を撫で下ろす。顔には出ていなかったが、三人とも随分緊張していたらしい。

「皆あのおじいさんが怖いんだねー」

先程ジェライドが言っていたように、人を殺せるんじゃないかと思われるほど視線が鋭かった。しかし

それはあくまで比喩であり、実際視線だけで死ぬわけがないのだから恐れる必要があるとは思えない。

「いやいや。あのじいさんと対面したら、普通は縮こまるだろ」

「その縮こまる方の前で、盛大に笑っていた人がいう台詞ですか」

「いや、あれは笑うだろ、笑うしかない」

ジェライドはいつになく真面目な顔をして、アンゼルのあだことうだと熱弁を振るい、アンゼルスはそれら全てを一刀のもとに切り捨てる。サウゼンテがいなくなった途端に生き生きとしはじめた二人に、トーヴァスは嘆息しながら片手で顔を覆い、またか、と小さく呟いた。先程のアンゼルスと全く同じ動きだった。「陛下、アンゼルス、そのくらいにして下さい。今はリアに具体的な話をするのが先ではないでしょうか」

「おお、そうだな」

ジェライドは視線をリアへと戻すと、再びトーヴァスから小さな溜め息が漏れた。おそらく、アンゼルスと何度もこうしたやりとりを繰り返してはトーヴァスが仲裁しているのだろう。彼から苦勞が滲み出ている。リアとあまり歳が変わらないだろうに、大変だ。

「まあ察しはついているのだろうが、俺達はこの事件の主犯は力ある貴族の誰かだと思っている」

「根拠は？」

アンゼルスは『成果なし』と言っていた。つまり彼らは犯人に繋がる手がかりを得られなかったということだ。それなのにはっきりと言い切るということは、それを裏付ける何か必ずある。

「痕跡がなさすぎるんだ。特に後半いなくなった者達は、街を巡回する衛兵の数を倍以上に増やし、人気のないところまで隈無く探すようにしていたというのに、怪しい者を誰一人見ていない」

引手繰りを捕まえたとき、衛兵が駆けつけるまでそんなに時間はかからなかった。偶々近くにいたのではなく、多く配置されているため必然的に近くにいたのだろう。

そんな警備の穴をつくには、あらかじめ衛兵達の巡回ルートを把握していなければ不可能だ。そしてそれができるのは、軍を統括する位の高い貴族のみ。

「僕とインディクト卿で被害者が出た周辺を実際に行ってみて、それを確信した。人一人を兵に気づかれずに攫うには、あらかじめ穴があると知っているか、兵を買収するかのどちらかだ」と

「攫った者も、相当の手練れ。街の人々に怪しまれずに迅速に行動するには、場数を踏んだ裏の世界の人間でないと不可能だ。裏の者を動かせる財力を持つ者というのは限られている」

アンゼルスとトーヴァスが続ける。リアはふむと顎に手を当てた。彼らがリアに求めていることを漸く理解する。

「その人達のお屋敷に忍び込んで、証拠を見つければいいんだね」

「……そういうことになるな」

高い位の貴族が相手となると、正攻法では満足に調査もできないだろう。だからといって無理を押し通して捜索したとしても、証拠隠滅をはかられるだけだ。だとしたら、証拠が残っているうちに秘密裏に回収するしかない。

「でも見ず知らずのわたしに頼むなんて、随分人手が足りないんだねー。王さまなら、優秀な密偵が何人もいそうなのに」

権力者というものは、大抵子飼いの密偵が何人もいるものだ。大抵は大っぴらに動くことのできない権力者が、様々な情報を集めるために彼らを使役する。その情報で戦局が変わることも多い。

ジェライドは十二人の王子を押しつけて王位に就いたのだから、当然信頼できる密偵がいるものだとばかり思っていた。

「こっちにもいろいろ事情があつてな。前王、俺の父上についていた密偵達は、王位争いでそれぞれ別々の王子についたんだ。そしてお互いを潰しあい……残ったのは、手にかかる価値がないと判断された見習い

ばかりだ」

そしてその見習い達も、ほとんどが平穩を求めて足を洗ってしまったらしい。つまり、使える密偵はもういないも同然なのだという。

表情を曇らせるジェライドに、改めて王位争いがどれだけ殺伐としていたかが伺えた。

「よく生き残ったね、王さま。それにアンゼルも」

暗殺者に狙われても返り討ちにできそうなトーヴァスはともかく、アンゼルとジェライドはどう考えても強くは無い。才能ある少年達なら尚のこと、真っ先に狙われただろうに。サウゼンテが二人を保護していたのだろうか。

「敵は多かったが、一人じゃなかったからな」

ジェライドはちらりとアンゼルを見遣る。アンゼルは軽く息を吐いて肩を竦めた。軽口では済まない刺々しい舌戦を繰り広げながらも、二人は深い信頼関係にあるのだと一目でわかるやりとりだった。

とても羨ましいくらいに。

「俺達のごとは一旦置いておくとして――」

ジェライドは積み重なっている書類を親指で捲りながら、そこから一枚を引き抜いた。

「あったあった。この紙に、疑いのある貴族達の名前を纏めてみた。全員バニティカの貴族街に屋敷を構えている。手間がかかるかもしれないが、一つ一つ探してほしい」

その紙を近くにいたトーヴァスに渡し、リアはトーヴァスから紙を受け取った。そこに書かれた名前はざっとみて七、八人。容疑者としてあげるには大分絞られてはいるが、屋敷を探すことを考えたら少なくはない数だ。

「あれ？」

紙を眺めていると、聞き覚えのある名前が一つ載っていた。

「この人のお屋敷も調べるの？」

「――ああ。彼もまた裏の者達を雇うことのできる大貴族の一員なんだ。調査の条件に当てはまっている」

ジェライドは苦々しく頷いた。

「でもさ、こういう人達って、自分達の街とか持ってるよね？ そっちに攫った人達連れて行ってたら見つかるものも見つからないと思うんだけど」

「可能性はゼロじゃないが、限りなく低いと見ている。そこに名前を挙げた者達は、ほとんど領地に帰らないんだ。年に二、三度というところだな。せっかく手間をかけて連れ去った相手を、自分がほとんどいない領地に連れて行く意味はないだろう？」

「……生きていれば、の話ですが」

アンゼルが重々しく口を開く。背筋にさっと悪寒が走った。失踪してからかなりの時間が経ってしまっている。既に命を奪われてしまっても全くおかしくはない。

「まだそうと決まったわけじゃないぞ」

「最悪の展開を想像しておくのにこしたことはないと思いますが」

「全く、最近本当にくそじじいに似てきたな。ここにいるのは俺達だけではないんだぞ、言い方を考えろ。――大丈夫か、リア」

言われて呆然としていたことに気づく。紙を握む手に自然と力が籠った。――早く見つけなくては。最後にいなくなってしまった子ですら、一ヶ月以上も経ってしまっている。

「焦らせてしまったみたいだな、すまない」

「ううん……本当にその通りだから……覚悟しておかないと、だめだよな」

ずっと旅をしていて、祖父以外の人の死に直面したことは幾度かある。その度に胸が抉られるような、鈍

い痛みを覚えた。旅を始めたばかりのころは平気だったのに、いつからだったろうか、人の死が怖くなったのは。祖父が死んでから？ いや、もっと前だったと思う。ある苦い記憶がリアの脳裏に蘇った。

とある国で、リアはよかれと思って偶々見つけた盗人を捕まえたことがある。そして身柄をやってきた兵士に引渡し――兵士はリアの目の前で盗人の首を撥ねた。自分が直接手を下したわけではないのに、とつもない喪失感を感じたのをよく覚えている。

しかもその兵士は嗤っていた。死んで当然の屑だと。命を奪うことになんの躊躇いがない者の存在が、とても恐ろしいと思った。――かつての自分を見ているようで、堪らなく怖かった。

しかし今は怖がっている場合ではない。第三者の手で人生を終わらせてしまうことほど、悲しく、虚しいことはないだろう。

「早い方がいいよね。今から行ってくる」

身体を窓の方へと向けた。確かジェライドがそこから脱走したとトーヴァスが言っていたのだから、リアも余裕で飛び降りられる高さだろう。

「待て待て待て。逸る気持ちはわかるが、そこから飛び出されたら騒ぎになってしまう」

「王さまだってそこから脱走したじゃない」

「確かに陛下も人のことは言えないが、だからといってお前もそこから行っていい理由にはならないだろうが」

ジェライドとアンゼルに窘められて、リアは唇を尖らせた。

リアの姿は城の人々の多くが目撃している。しかも客として迎えられているのだ。そういう扱いにするしかなかったのはわかるが、そのせいですぐに動けないのはもどかしい。

「君が俺を探し出してくれたおかげで、城仕えしている者達は、君の正体についての話で盛り上がっているだろう。――そこで、だ」

ジェライドがニヤリと口の端をつりあげる。それを見たアンゼルは本能的に嫌なものを感じたのか、じり、と一歩後退した。

その人は会うと必ず話しかけてきた。『リア』という彼がつけた固有名詞を呼びながら。

「金糸雀（カナリア）という鳥を知っているか？ 黄色い羽毛に包まれた、小さくかわいい鳥なんだ。君と同じだな」
どうやらそれが『リア』と呼ぶ理由らしい。『お父様』が『ご主人様』と呼ぶ人からは『金色（こんじき）の』と呼ばれるが、どちらも自分が持つ髪の色からそう呼んでいるのだろう。

『リア』と呼ばれる理由よりも、どうして彼は自分に話しかけるのかが不思議だった。

自分に話しかけるのは『お父様』と『ご主人様』だけ。それ以外の人間は話しかける以前に、近づいてくることすらない。

「どうして、わたしに話しかけるの？」

彼に質問したのは、一体誰なのか尋ねたとき以来だった。

彼は細い瞳を僅かに見開くと、自分を見つめながらにっこりと微笑んだ。

「リアと話すのが楽しいからに、決まっているだろう」

「一番近いって言われてる二つのお屋敷を探してみたけど、連れ去られたような人、どこにもいなかったよ。空っぽな地下室なら幾つかあったけど」

それらの地下室は、恐らく表沙汰にできない取引をするための特別な部屋だろう。大貴族ともなれば、そういう地下室があったとしてもなんらおかしくはない。

それらは最近使われた痕跡はなく、扉は固く閉ざされていたうえに埃がたくさん被っていたらしい。この事件とは関係ないとみていいだろう。

「仮眠とったらまたいくよ。でもって明日には全部回る」

「それなら、僕のベットを使ってくれて構わない。僕はソファで寝るから」

「ありがとう」

アンゼルの寝室の方を指で示すと、リアは微笑んで寝室へと足を踏み入れていく。

リアを見送った後、アンゼルは人知れず溜め息をついた。

ここはアンゼルが城の中で執務をするために使っている部屋だ。置いてあるのは最低限必要なものだけで、飾り気は全く無い。

アンゼルのための部屋に何故リアがいるのかといえば、ジェライドがそう提案したからだった。

「リアはアンゼが一目惚れして連れて来たということにしておこう」

「はあっ!？」

執務室内にアンゼルの絶叫が響く。ジェライドはいつも突拍子もないことを言うが、今日は更に度を越えていた。

「何でそうなの……そうする理由を教えてください」

感情に任せて荒がせた声を、途中で何とか抑えた。彼は確かに突拍子もないが、こんなときに無意味な言動をする人間ではない。つまり、確固とした理由がある。

「まず、一日で全ての屋敷を調べるのは、いくらリアが有能でも無理だ。そこで、城を拠点として動いてもらいたい。その方が、俺達も状況を把握しやすいからな」

確かに全て調べるまで待つよりも、時折報告してもらおう方が効率よく動ける。

ジェライドの言おうとしていることは大体理解できた。アンゼルの恋人という立場ならば、城に滞在していても怪しまれずに済む。

「それなら、芸人として城に滞在させる方法もありますが」

リアは曲芸師だ。ジェライドがリアの曲芸を気に入って暫く滞在させる、という理由でも充分成り立つだろう。むしろリアの奇抜な見た目からして、その方が怪しまれないし何より不自然さがない。

「いや、それだけが目的じゃないんだ。――二人には、中央の貴族達の関心を一身に集めてもらいたい」

灰色の瞳が爛々と光を放った。

「いくら黒幕が証拠を残していないといっても、俺達が気づくかもしれないという恐れを多少は抱いているはずだ。そんな中、事件の中核を担っているアンゼに恋人ができたと思ったら、どう思う？」

「……僕なら、何を考えているんだと疑いますが」

「そう、疑うよな。そしてリアとアンゼに心が向くはずだ。俺だったら、リアが何者なのかははっきりするまで犯行は控えるぞ」

「つまり牽制？」

リアの問いにジェライドが力強く頷く。大分顔色がよくなっていた。

アンゼはリアを視界から外す。もやもやと罪悪感が胸を漂いはじめたせいで。

最悪の可能性として口に出した一言で、リアは明らかに顔を強張らせた。アンゼとしては、ただ覚悟をしておいたほうが良いと判断して言ったのであって、そんな顔をさせたくて言ったわけではなかったのに。

ジェライドに指摘されて、今更のようにリアが人の死を恐れていることを思い出した。悪事を行った者ですら気にかけていたのだから、失踪した人々の命が失われることを気に病まないわけがない。それをジェライドに伝えたのはアンゼ自身だというのに。

「そう、上手くいきますかね」

たったそれだけの言葉を紡ぐのにも、平静を保つのに必死だった。

それにしても、何故リアに対しては冷静でいられないのだろうか。思えば、出会ったときから振り回されてばかりだ。「少なくとも、宮中が大騒ぎになるのは間違いない。なんてたって、色事に無縁の次期宰相殿に、ついに春がきたのだから」

「確かに……アンゼに恋人ができたと言われたら、相手が誰であれ真偽を確かめたくはなりませんね」

「同じく無縁な貴方がたに言われたくはありません」

ジェライドはともかくトーヴァスにまで同意されて、アンゼは憮然とした。

王位争いに終止符が打たれて早三年。大分政情は安定してきたが、まだまだやらなければならないことはたくさんある。色恋沙汰に現をぬかしている場合ではないのは、なにもアンゼだけではないのに。

「ま、確かに人のことは言えないが、お前だって俺やトーヴァに恋人ができたと言われたら、絶対気になるだろ？」

そう返されて、ああそうかと納得した。アンゼもこの二人にそんな噂がたったならば、真偽を確かめたくなるに違いない。

「三人共、女の人に人気ありそうなのに、モテないの？」

「はっはっは、ずばりと聞くなあ。俺は君のそういう飾らないところ、好きだよ」

ジェライドは軽快に笑った。本来ならば無礼に値する言葉だが、飾ってばかりの令嬢に辟易しているジェライドにとって、思ったことをそのまま口に出すリアは話していて気持ちがいいのだろう。

「簡単に説明すると、逆だ。自分でいうのもなんだが、容姿に地位、両方持っていて言い寄られない方がおかしいだろ？」

「偉い人って大変なんだねー」

苦笑しながら言うジェライドの言外の意味を感じ取ったのか、リアはしみじみと頷いた。

「……話が逸れましたが、そういう確固とした狙いがあるならば、僕に反対する理由はありません」

犯人の注意をひきつけておくことは必要だ。次の犯行を防ぐために動いているのに、その間にまた誰かがなくなってしまっては元も子もない。

「リア、それで構わないか？」

「うん、いいよ」

当のリアは二つ返事であっさりと了承する。

「悪いが、今日のところはアンゼの部屋の窓からこっそり出入りしてくれ。城の者には二人きりにさせてやれと命じておくから」

「結局窓から出るんだね」

「そういうことになるな」

そしてジェライドは給仕を呼び、リアが暫くアンゼルの部屋で寝泊りすることを説明しはじめた。給仕はぎょ、と目と口を大きく開く。信じられないと言わんばかりだ。彼女はちらちらとアンゼルを見遣った。その眼差しは困惑と好奇心が複雑に絡み合っている。

「よろしくお願いします」

ジェライドが説明し終わると、リアは給仕に向かってにっこり微笑み、丁寧に頭を下げた。給仕はまあ、と両手で口を覆い、頬をうっすらと染める。

「そういうわけだから、暫く二人きりにさせてやってほしいんだ。そう皆に伝えておいてくれ」

「はい！ かしこまりました！」

給仕は興奮した面持ちで頷くと、そそくさと執務室を後にする。

「これで仕込みはいいだろ。彼女が話を広めてくれるはずだ」

ジェライドの口調はウキウキと、そしてとても楽しげだった。

(あれは絶対楽しんでいる……)

自室のソファに背もたれながら、アンゼルは自分が仕える王を恨めしく思った。

話はアンゼルが吃驚するほど、急速に王宮に広まっていった。

リアと連れ立って自室まで歩いていくと、すれ違った者達全てが興奮した面持ちの視線を向けられる。いくらなんでも早すぎではないだろうか。女官の噂話を広がる速さに舌を巻く。

しかしこの調子なら、犯人の耳に届くのも時間の問題だろう。後は彼がリアの存在を疑い、こちらの動きを警戒してくれることを祈るばかりだ。

アンゼルは身体を横にして足先を外へと投げた。いつも夜遅くまで執務をしていることが多く、用意されている仮眠室を使ったことはあまりない。わざわざ少し距離のある部屋へ移動するよりも、そのままソファに横になった方が楽なのだ。だからこそ、リアに寝所を提供するのにあまり抵抗を感じない。

ガチャ。

突然扉が開く音がし身体を起こすと、リアが寝室から姿を現したところだった。

「眠れないのか？」

「ううん、もう充分寝たよ」

「もう!？」

彼女が寝室に入ってから一時間も経っていない。そんな短すぎる時間で充分睡眠をとったと言えるわけがない。

「焦る気持ちはわかるが、睡眠はしっかりとれ。動いている最中に倒れられたら困る」

「焦ってないとは言わないけど、本当に大丈夫だよ。――そういう身体だから」

その言葉にはととして、思わずリアを凝視してしまった。のほほんと笑っているせいで失念しがちになるが、彼女はガリスタとトーヴァス、二人の腕の立つ騎士からその腕を恐れられた暗殺者（アサシン）だ。暗殺者（アサシン）が動くのは主に夜だが、昼夜関係なく動かなければならないことも多い。そのために僅かな休息で充分休めるよう、訓練されているはず。

不意にリアがにっこりと笑った。

「皆言わないでいてくれるけど、気づいてるでしょ？ だから大丈夫」

何だろう、胸中を巡るこのやるせない思いは。何か言おうと思って口を開こうとするが、言葉が全く生まれない。

このときになって、リアを巻き込みたくないんだろと言っていたジェライドの言葉が身に染みた。

「……どうしていつも、そんな風に笑ってられるんだ……？」

リアは確か、アンゼルよりも一つ年下だと王宮に向かう最中に言っていた。そして長い間旅をしていたと言っていたから、暗殺者として生きていたのは相当幼い頃ということになる。恐らく、今の実力を身につけたのも。

そんな凄絶だろう幼少期を過ごしていたというのに、彼女の笑顔に屈託はない。だからこそ不思議に思うのと同時に、自分がその笑顔を曇らせてしまうのではないかと不安になる。

「じいちゃんが言ってたんだ、人生って本当に短いんだって。それなのに怒ったり悲しんでばかりだと勿体無いじゃない。少しでも多く笑って過ごせたら、それだけで幸せになれるんだよ」

屈託無く、リアは笑う。

「それに昔のことは変えられないけど、これからのことはいつだって変えられるんだもの。大事なのはわたしがこれからどう生きるか、だよ」

アンゼルは呆然とリアを見つめた。

彼女は強い。物理的な力だけではなく、心が。自分が思っているよりも遙かに。こうしてわざわざ気を揉まずとも、彼女が笑顔を失うようなことは、きっとない。

アンゼルはそっと目を伏せた。

「これからについて、どうするか決めているのか？」

「んー、実はこれといってやりたいこととかないんだよねー」

毎日笑って生きられればいいのだと、リアは言う。寝て、食べて、ときどき踊る。それさえできれば特にこだわりはないらしい。

「あ、でも今は――」

リアは言葉を途切らせると、アンゼルが座っているソファの前にひよいとやってくる。膝に両手を添えながらアンゼルを見て微笑んだ。

「アンゼルと、ずっと一緒にいられたらいいなって思うよ」

「――！」

心臓が大きく跳ね上がり、頬にカッと朱が走る。リアの顔をまともに見ることができず、思わず視線を思い切り逸らした。

「あれ？ アンゼルどうしたの？ 体調よくない？」

心配そうな顔をしてリアが顔を覗き込んでくる。アンゼルは逃げるようにソファから立ち上がった。

「な、何でもない！ 僕はまだやらなければならないことがあるから、行くならさっさと行け！」

「あ、うん」

リアは窓の方に向かい、軽い音を立てながら窓を開く。

「わたしが言えたことじゃないけど、もう夜も遅いから早く寝た方がいいよ」

「……ああ。お前も無理はするなよ。調査が滞る」

「わかってるよー」

最後にまたにっこり笑うと、リアは窓から身体を躍らせる。ここは三階だというのに、リアが着地した音は全く聞こえなかった。

アンゼルはリアがいなくなるとソファに身体を沈めた。顔が熱い。何か得たいの知れない病にでもかかってしまったかのようだ。

こんなに誰かに振り回されたのは、ジェライド以来かもしれない。しかし彼とリアとでは振り回され方が全く違う。

ジェライドといて心臓が跳ねることなどないし、リアをあちこち探し回ることも、舌戦を交わすこともない。

(明日……トーヴァスにでも相談してみようか)

アンゼルより一つ年上のジェライドの護衛騎士は、穏やかで心根が優しく、ジェライドより遙かに頼りになる存在だから、きっと相談にのってくれるだろう。

次第に険が重くなり、訪れてきた睡魔に身を委ねた。

(ここで四つめか)

闇が大分薄らいだ明朝。それでも、人が動き始めるにはまだ早い。

ずんと建てられた門や囲いの壁をあっさりと乗り越えて侵入に成功したリアは、人の気配がする部屋をかたっぱしから調べていた。しかし使用人の部屋と思われる部屋で眠っている住人達の中に、ジェライドから聞いた失踪したという者達の特徴と一致する者はいない。おまけに隔離された部屋や隠し部屋と思われる場所も、怪しげな地下室もなかった。

(うーん、ここも違うかな)

リアは周囲を見渡ししながら小さく唸る。結論を出すのはもっと隅々まで探してからだが、ここにも失踪した人達はいなさそうだ。

静けさに満ちた廊下を歩いていくと、上質な素材で作られた扉が目に入る。音を立てずにそっと開けると、そこには柔らかそうな質感の寝間着を纏った男が、いびきをかきながら気持ち良さそうに眠っていた。視界に映る調度品は王宮の客室で感じたのと同じく、上品な雰囲気漂っており、この男が屋敷の主人なのだと検討づける。

早速リアは壁をべたべたと触って隠し通路があるか調べる。が、ここにもそれはないようだ。ならばと今度は机の引き出しをひたすら覗く。もしも人に見られては困るような大事なものがあるとするならば、自室に厳重に保管してあるはずだ。失踪した人が見つからなくても、それに関する証拠が何かあるかもしれない。

順当に引き出しを開けては閉めてを繰り返していくと、一つ、鍵がかかって開かないものがあった。他に開かないところはないかと探してみるが、どうやらこれだけのようだ。

リアはシンプルなヘアピンを取り出し、鍵穴に差し込む。カシャンと小さな音が鳴るが、それは男の大きないびきにかき消された。

開いた引き出しの中から出てきたのは、不思議な紋様が全体的に刻まれた小さな箱だった。それを手に取りしげしげと眺めると、繋目のところに何かをはめ込む穴がある。紋様は穴のところで中途半端に途切れていて、その部分だけ欠けているように見えた。

(これ、『術式封印』だ！)

この世には、魔力と呼ばれる不思議な力がある。特殊な紋様を様々なものに刻むことで、人智では及ばない力を発揮させることのできる、摩訶不思議な力。その特殊な文様のことを一般的に『術式』と人々は呼んでいる。

主に使われているのは街の街灯だ。暗くなると光を発し、夜道を明るく照らしてくれる。

箱に主に刻まれるのは、絶対に開かない強固な保管庫を生み出すため。そして同じものを扉に刻めば、開かずの扉となる。そのような保管を目的として利用される術式は『術式封印』と呼ばれている。

そして『術式封印』は、大抵王家などの宝を保存している部屋など、絶対盗まれてはいけないもののために使われるため、基本大掛かりなものばかりだ。こんな小さな箱、普通は使わない。

欠けたようなこの穴は、紋様を繋げる役割を果たすものを嵌めこむ場所だ。そして、それだけがこの箱を開ける絶対唯一の鍵。

リアは舌を巻いた。開錠ならお手の物だが、それが魔力のかかったものとなると手も足もでない。

しかし同時に、それだけ中の物を見られたくない、ということだろう。だからなんとしてでも、この中にあるのが何なのか確かめなくては。

鍵はどこにあるだろうか。少なくとも、この部屋にはない気がする。他の引き出しが施錠されていないのがその証拠だ。それにそんな大事なものをセットで置いておくわけがない。別々に保管するに決まっている。

箱が小さければ当然穴も小さい。そんな小さいものを探すとすると、これはかなり骨が折れる。更にもうじき夜が明けてしまうのだから、鍵を探している時間はないとっていい。

(……本当はやりたくないし、できるかもわからないけど)

リアは腰に吊るされた双つの剣のうちの片方を手に取った。

(箱は……傷つけない。この箱にかかっている封印だけを……斬る)

剣先を箱に触れるか触れないかの位置にあて、手首を捻って一線を描く。

ピキ……ピン、パシ……

箱からヒビが入る音がした。しかし箱に外傷は何一つない。剣を収め、恐る恐る箱の上口に触れてみると、小箱はあっさり大口を開けた。

「……開いちゃった……」

リアは驚きのあまり思わず声を漏らす。慌てて口を塞ぐが、男は相変わらず気持ち良さそうに眠っていた。ほっと肩を撫で下ろし、大きな口を開けて現れた小箱の中身を確認する。

(紙……だね)

そこにあったのは一枚の羊皮紙だった。綺麗に畳まれたそれを取り出し、そっと広げると、そこにはとんでもないことが書かれていた。

(これ……闇オークションの招待状だ！)

日時、開催場所、そして表には出すことができない目玉商品の宣伝文句。そしてその中に含まれている『人』という文字。

(失踪した人達……このために連れ去られた？)

しかし一つ疑問が残る。連れ去られた人々は、皆優れた容姿を持つ者達ではないのだ。一言でいうなら無難な顔立ち。目だった特徴が全く無いと言っていい。言い方はよくないが、闇オークションで高値がつくとは思えなかった。

だが、全く関係がないという可能性もなくはない。

リアは羊皮紙を術式が刻まれた小箱ごと持っていくことにした。そしてわざわざ閉じていた引き出しを、再びひたすら開き始める。

同時に値打ちのありそうな宝飾品を幾つか手に取った。別にこれらに用があるわけではなく、盗人が侵入したと思わせるため。帰り際に水路にでも放り込んでおけばいいだろう。

人の物を盗むのはよくないことだが、闇オークションに参加するような財力の持ち主であるし、これらがなくなったとしても代えは幾らでもあるだろう。

本当は羊皮紙だけを持っていったらいいが、錠破りの開錠方をしたうえに、闇オークションのことが外部に漏れたことが知られたら、保身に走って証拠を隠滅する可能性がある。

だから小箱ごと持っていき、盗人の仕業と思ってくれれば、箱の中身を調べることはできないと、焦ることはないはずだ。そうなれば、この屋敷のどこかにある小箱の封印を解くための唯一の鍵が、この男を捕らえるための物的証拠となってくれるだろう。

そうと決まれば長居は無用だ。引き出しという引き出しが開かれて高級感が台無しになった部屋を、そくさと後にする。

目指すはお城。まだ半分ほど調査していない屋敷は残っているが、それらはひとまず後回しでいいだろう。

アンゼルの報告するために、朝日が登り始めたさわやかな街道を走り抜けた。

「アンゼル！ 起きて！」

城の中にあるアンゼルの部屋に戻ったリアは、ソファで熟睡しているアンゼルの身体をゆさゆさと思い切り揺さぶった。本当なら自然と起きるまで寝かせてあげたいが、先の件を一刻も早く知らせるために、彼には起きてもらわなければならない。

「あ……？ リア……？」

「そうだよ！ 知らせないといけないことがあるから、起きて！」

リアの緊迫した状態を感じ取ったのか、アンゼルががばりと起き上がった。

「何かわかったのか？」

「この件と関係あるかはわからないけど、四つ目の屋敷からこれが見つかったの」

術式が刻まれた小箱を取り出し、畳まれた羊皮紙をアンゼルの目に渡す。アンゼルは羊皮紙に目を通すと、はっと息を飲んだ。

「闇オークション……しかもこの場所は……」

「どこか知ってるの？」

「……辺境に飛ばした三人の王子のうちの一、第五王子についていた一派が構えている屋敷だ」

その一派というのは、爵位は低いけど昔から金だけは持っていたらしく、位の低さを賄賂や買収などで補っていたという。そしてジェライドが王位を継ぐと、彼らはあっさり降伏し、誠意の証として財産の半分を王家に寄贈したのだとか。

「彼らの資金源がどこからきてたのか、いつかは調べようとは思っていたが……こんな形で関わってくるとは思わなかった」

アンゼルは顎に手を当て、目を鋭く細めながら羊皮紙を見据える。

端正な顔立ちと美しい色彩が相俟ったその姿はとても様になっていて、リアは思わず魅入ってしまった。どうして彼はこんなにも綺麗なのだろう。ずっと見ていて飽きないどころか、更に惹かれていっている自分がある。こんな感覚は初めてだった。

「リア。聞いているのか、リア！」

アンゼルの名前を呼ばれて暫くぼーっとしていたことに気づき、素直にごめんと謝った。

「疲れているんじゃないのか？」

「疲れてないよ！ 元気元気！」

リアはぐっ、と身体の前で拳を握り、疲れていないとアピールする。実際、疲れは感じていなかった。ただ、見惚れていたと言うことを口に出すのがなんとなく憚られて。

「……ならいいが。聞いていなかったみたいだからもう一度言う。お前は どうやってこの箱を開けた？」

アンゼルの持つ紋様が刻まれた小箱を示した。当然とも言える問いに何て答えようかと逡巡し、素直にありのままを言えばいいだろうという結論に至る。

「わたしもまさか開けられるとは思わなかったんだけど」

丁寧に説明した。持っている剣で封印だけ斬れないか試したところ、あっさり成功してしまったと。

「……その剣を見せてもらってもいいか？」

「いいよー」

鞘から片方の剣を抜き、アンゼルの手に渡した。青磁色で統一された色彩の剣は、アンゼルが持つと宝飾用の剣に見える。

「……刃がないのか、これは」

「うん。でもこの剣ちょっと特殊でね。――何か斬っても大丈夫なものってない？」

口で説明するより、実際に見てもらった方が早い。アンゼルはソファから立ち上がり、文机の引き出しから廃棄するという書類を数枚手渡してくれた。

「それじゃあ見てて」

書類を宙に舞わせ、腰に収まったままの剣を素早く抜き放つ。一閃の後、書類は床へはらりと落ちた。アンゼルがそれを見て瞠目する。床に散らばった書類は、初めの枚数の倍になっていたから。

「その剣だけ刃がついているのか？」

「違うよ。双つとも刃はついてない。――わたしが『斬る』と思ったときだけ斬れるの。普通じゃ切れないようなものもね」

「！」

アンゼルが食い入るように剣を見つめた。剣を持つ手が強張っている。

「使い手の思い一つで何でも斬ることができるなんて……『魔剣』じゃないか」

「否定は……しないよ」

もしもこの剣の使い方を誤れば、とんでもないことになってしまうだろう。薄々特異性を感じてはいたが、術式封印を解いてしまって確信した。

だから魔剣というアンゼルの言葉を否定するつもりはない。だが、リアにとってこの剣は――

「この剣、じいちゃんに貰ったの。『斬ると思わなければ絶対斬れない剣』だって」

裏を返せば『斬れない剣』でもあるのだ。ずっとそのつもりでこの剣を使ってきた。

「わたしは、じいちゃんから貰った大事な剣を、何でも斬ってしまう『魔剣』にはしないよ。それは、同時にわたしが人を斬らないってということにも繋がるから」

二度と人を斬らない。斬りたくない。その思いを尊重して祖父はこの剣をくれた。

「剣は所詮剣だよ。大事なものは、それをどう使うかじゃないかな」

そう教えてくれたのも祖父だった。たとえそれが『魔剣』と呼ばれる代物だとしても、使うのはリア自身なのだ。

アンゼルは軽く目を伏せると剣をリアへと差し出す。それを受け取り、そっと鞘へと収めた。

「その剣のことも含めて、陛下に相談してもいいか？」

「うん。いいよ」

ジェライドならば、剣のことを知ったところで悪用しようとは思わないだろう。リアは二つ返事で了承する。

「陛下を起こしてくる。その間、お前はここで待っている。――少し休んだ方がいい」

アンゼルは椅子にかけられた上着を羽織ると、リアが返事をするより先に部屋を出て行ってしまう。

「……疲れてないって言ったのにな」

アンゼルには疲れているように見えてしまったのだろうか。それならばじめから誤魔化したりせずに、素直に見惚れてたと言えよよかったかもしれない。

そう、いつもなら素直に言っていたはずだ。もともと自分の思いとは違ったことを言うのは苦手で、思ったことをそのまま口に出してしまう性分なのだから。口に出して悪いことでもないのに、どうしてあのとき言い淀んでしまったのだろう。

「まあいっか」

そんなことで深く考えていても仕方がない。アンゼルが座っていたソファに遠慮なく身体を預けた。

僅かに残ったアンゼルのぬくもりは、袖に覆われていない肩には十分な温かさだった。

大分明るくなってはきたが、動いている人間はまだ少ない。ジェライドの寝室までですれ違ったのはほんの数人だった。だから彼もまだ動き出してはいないだろう。しかし重要なことがわかったのだから、彼

には今すぐに起きてもらわなければならない。

アンゼルは軽くノックする。当然返事はない。

「急ぎの用事です、入りますよ、陛下」

ギイイとわざと音を立てながら扉を開けた。寝台の上に規則正しい寝息を立ててジェライドが眠っている。アンゼルは躊躇うことなく寝台に近づき、かかっている布団をひっぺがした。

「起きてください、陛下」

「んあ？」

灰色の瞳がうっすらと開くが、立っているのがアンゼルだと分かったら、再び瞼を閉じてしまう。アンゼルの額に青筋が走った。

「起きろ。リアが重要な情報を手に入れた」

「聞くから、言ってくれー」

ジェライドはだるそうに片手をあげた。聞く気があるとは全く思えない態度である。

「四つ目の屋敷……フォーラ卿の寝室からある書類が見つかりました。説明するよりご自分でお読みになった方が早いでしょう」

小箱から羊皮紙を取り出し、ジェライドの顔の前につきつける。しかしそれを手で取ることはせず、再び片手をあげて軽くふるだけだった。

「読んでくれー。今は目が開かないんだあー」

「さっき開けただろ。ふざけてないで起きろ、本当に重要なことなんだ」

羊皮紙を顔の上に叩きつけるように乗せる。いて、と呻く声が聞こえるが、さっさと起きない方が悪い。

ジェライドは仕方なさそうに身体を起こし、ぱさりと落ちた羊皮紙を拾う。

「俺が朝苦手なこと、お前だって知ってるだろ……」

片方の手の平で目を擦りながら、もう片方の手で器用に羊皮紙を開いた。眠気の晴れない瞳で羊皮紙に目を通す。

「！」

刹那、灰色の瞳が大きく見開かれた。顔つきに真剣みが帯び、一文字も見逃さないとばかりに羊皮紙の文字を追っている。

「闇オークション……まさか王都で堂々に行っているとは思わなかった」

「ええ。完全に油断していました」

闇オークションの元を知るのは、並大抵のことでできることではない。しかしそれでも王都で開くことを許してしまっていた事実には、力不足を感じずにはいられなかった。

「俺達は万能じゃないんだ。今はできることを一つ一つやっていけばいい。そうだろ？」

「――そうですね」

力不足を嘆くことはいつだってできる。今大事なのは、これからどうするかだ。

「しかしリアはすごいな。この紙、厳重に保管されていただろうに」

今度開錠の仕方を教えてもらおうかな、とジェライドは何とも楽しげな眼差しで羊皮紙をヒラヒラと弄る。

「……それについて、一つ話があります」

リアの持っている双つの剣について説明した。使い手の思い一つで何でも斬ることができる『魔剣』だと。

「その羊皮紙はこの箱に入っていたようです」

封印が決壊した小箱をジェライドに見せると、羊皮紙に目を通したとき以上に瞠目した。

「リアはそんな剣を、一体どこで手に入れたんだ？」

「育ててくれた祖父から貰ったようです」

「なら、リアだけでなく、その祖父とやらも只者じゃないな」

アンゼルはこくりと頷いた。恐らく、今のリアがあるのはその祖父の存在があったからだろう。幼い少女が、たった一人で凄絶な過去と向き合えたとは思えない。同じ境遇の頼れる大人がいたからこそ、乗り越えられたのかもしれない。

「強い子だな。何でも斬れる剣を、斬れない剣として使ってるなんて」

「……僕は、ただ誰かを斬ってしまうことを恐れているように見えたが」

使い手が斬ることを恐れていれば、どんなに鋭い刃も鈍るもの。リアの持つ剣は、まさにそれを体現しているのではないだろうか。

「なら、リアに感謝しないとな。本当は人間だけでなく、『斬る』こと自体が嫌だろうに、彼女は俺達のために封印を斬ってくれた」

「随分知った風な口をききますね」

まるでリアのことを全て理解しているような口ぶりに、思わず顔を顰めた。ジェライドは人の本質を見抜くことが得意なことは知ってるが、今回はそれが妙に癪に障る。

「何だ、嫉妬か？」

「な……！」

ジェライドがニヤリと口の端をつりあげる。

「そんなわけないだろ！ 誰が誰に嫉妬してるというんだ！」

「はいはい、朝っぱらから怒鳴るな怒鳴るな。とりあえず、この件のことは後でトーヴァも含めて四人で話し合おう。恋人ができたアンゼをからかいに行っているという名目でお前の部屋に行くから、先にトーヴァにも知らせておいてくれ」

「……わかりました」

腑に落ちないところもあるが、くだらないことで言い争っている場合ではない。丁寧に頭を下げ、失礼しますと言い残し、くるりとジェライドに踵をかえす。

心なしか早足で部屋を後にすると、ジェライドがポツリと呟いた。

「意外とわかりやすい奴だな、あいつ……」

リアはちらりとアンゼルを見て、ハア、と大きく溜め息をついた。

「溜め息をつくくらいなら見るな」

「だってー……」

再びちらりと目をやって、ハア、と嘆息する。

ゴトゴトと音を立てながら揺れる小さな馬車の中に、リアは座っていた。中は丁度四人乗りで、リアの隣にアンゼルが座り、向かいにジェライド、その隣にトーヴァスという席順だ。

「末の弟は、どうやらその髪がお気に召さないようだな」

「だってせっかく綺麗なのに……」

アンゼルの髪はいつもの美しい空色の髪ではなく、茶色交じりの黒い色をしている。それがリアの溜め息の原因となっていた。

四人は今、闇オークションの会場となる場所へと向かっている。しかし潜入するためには、当然そのままの格好では無理だ。特にアンゼルとジェライドは髪の色彩がとても特徴的なため、それだけでバレてしまう可能性が高い。そのため、別段珍しくもない色合いの鬘を被っているのだ。

「まあ、今夜限りだから我慢してくれ。それにしても、俺のお古がピッタリでよかったよ」

アンゼルと全く同じ色の鬘を被ったジェライドが満足気に笑う。リアは現在着ている服を軽く指で摘んだ。

フリルがたっぷりとしらわれたブラウスに、ボタンがたくさんついた丈の短い濃紺のジャケット。膝が見えるか見えないかぐらいの真っ白いズボンに銀細工のベルト。まさに貴族のご子息然とした格好だった。

何故少年の格好をしているのかと問われるならば、オークションに参加している者達を捕まえるために必要だからだ。大立ち回りは必須で、令嬢が着るようなドレスでは、いくらリアが身体能力に優れるとしても、自由に動き回るのは難しいだろう。今の格好も決して動きやすいというわけではないが、ドレスよりは充分ました。それに剣を所持していても宝飾用と見えるため、堂々と腰につけていける。双つの剣が美しい青磁色をしていることも一役かっていた。

「やっぱり髪切った方がよかったんじゃない？ 男の子にしては流石に長すぎると思うんだけど」

潜入する際の設定として、リア、アンゼル、ジェライドの三人を兄弟ということにしようとなった。闇オークションの表向きは小規模の仮面舞踏会であり、招待客は仮面をつけることを義務づけられている。仮面をつけてしまえば、顔の造りが似ていなくても問題ない。だからアンゼルとジェライドは同じ色の鬘を被っている。

リアは歳の離れた末っ子、という設定だ。貧弱というわけではないが、特別凹凸が激しい身体でもないので、フリルやジャケットで特有の丸みはごまかせる。しかしリアの髪は腰まであり、鬘を被るには長すぎた。せめて纏まりをよくするため、三つ編みにし、背中に流している。

「流石にその髪を切ってしまうのは勿体ないだろう。なあ、アンゼ、トーヴァ」

「……そうですね」

同意を述べたのは、リアとは反対に普段は降ろしている髪を結っている以外は、特に普段と変わらないトーヴァスだ。彼は三兄弟の護衛という普段と同じような設定なのと、アンゼルやジェライドに比べて落ち着いた髪の色をしているため、ただ一人変装をしていない。

「アンゼもそう思うだろ？」

「……」

ジェライドはアンゼルの同意を求めたが、アンゼルはそれには答えずふいと顔を逸らした。

「やっぱり切るよ。ナイフある？」

変装をするなら完璧な方がいい。商売道具でもある大事な髪ではあるが、髪はいつか伸びるもの。ここで切り落とすとしても惜しくはない。

「……待て」

しかしそっぽを向いていたはずのアンゼルの静止の声をあげた。

「ナイフで切り落としたり、違和感のある髪型になる。その方が問題だ」

「あ、そっか」

貴族の子息がザンパラな髪をしている方が確かに目立つかもしれない。リアは素直にアンゼルの言葉を聞き入れ、髪を切るのを思い留まる。

「素直じゃないなあ。その綺麗な髪を切るなんて勿体無いといえればいいのに」

「何かおっしゃいましたか陛下」

ボソリと呟いたジェライドの言葉を、鋭い声が斬り捨てる。ちらりとアンゼルを見ると、口元は笑みを作っていたが目は笑っていないかった。ジェライドを見ると、負けじとアンゼルに笑みを向けている。

にこにこ、にこにこ、と効果音はとても可愛らしいのに、車内の空気はどんどん冷え込んでいく。

トーヴァスがそれを見て片手で顔を覆った。また始まった、という心の声が聞こえた気がする。

リアは、いつも大変だね、という視線を送ると、それに気づいたのか、もう慣れている、という視線が返ってきた。苦労性だ、と心の中で呟く。

「お屋敷についたら、わた……ぼくは二人を兄上と呼べばいいの？」

とりあえず空気を変えるために、役柄の再確認をすることにした。

「俺の希望としては、兄上よりもお兄様の方がいいな」

「ふざけてる場合か」

「心外だな。俺はいつでも大真面目だ」

「尚悪いだろ、放蕩太子」

冷たい空気は緩和したが、今度は舌戦に油を注いでしまったらしい。もうそろそろ着く頃だというのに、この調子で大丈夫なのだろうか。

「……スウェン様、クラウド様、そろそろ到着するのでそのくらいにして下さい」

トーヴァスが前もって決めてある偽名で二人を諷めた。それぞれ家名から振ったわかりやすい名前。

「おお、そうだったな」

「トーヴァスに敬語を使われるのは、慣れませんか」

「今はルーナーだぞ、クラウド」

「わかってますよ、スウェン兄上」

トーヴァスもまた家名から偽名を振っていた。女性の名前のようにも聞こえるが、家名としてなら別におかしくはないらしい。

「クラウドが兄上と呼ぶのだから、ファニエルにはやはりお兄様と呼ばれたいな」

ファニエルというのがリアの偽名だ。リアには彼らのような家名がなく、ある人物の名前をそのまま借りることにした。

(じいちゃんの名前を使う日がくるなんて思わなかったなー)

ファニエルは祖父の名前だった。いつもじいちゃんと呼んでいたせいであまり彼の名前を呼んでいなかったからか、懐かしさと共にすんなり自分の中へと浸透する。呼ばれたのに気づかない、ということはなさそうだ。

「そんなに呼ばれたいならそう呼ぶけど、お兄様」

ジェライドが期待に満ちた眼差しでリアを見ているため、試しに呼んでみたところ、
「……いいな。やっぱりいい！ 俺、可愛い妹がずっと欲しかったんだ！」

ぐ、と拳を握り締め悦に入った。

「変態染みたことを言わないで下さい兄上。それに設定上は妹ではなく、弟です」

「いちいち揚げ足をとらなくたっていいだろ」

チッ、とジェライドが舌打ちする。再び不毛な言い争いが勃発しそうなので、ふと思ったことをそのまま口に出してみた。

「王さまって末の王子だったっけ。妹もいないの？」

男兄弟の中だけでなく、女兄弟を含めた末っ子なのだろうか。一人くらい妹がいたとしてもおかしくはないだろうに。

「……確かに異腹の妹ならいるが、俺は父上の愛妾達に嫌われてるからな……継承式のとき、一度顔を会わせただけなんだ」

王位争いが苛烈だったのも、愛妾同士の仲が悪く、皆が皆、我が子に王位をと目論んでいたことが大きいらしい。彼女達からしたら、ジェライドは王位を横取りした憎き相手以外の何者でもなく、王女達にもろくに会ったことがないのだとか。

「……せっかく同じ血を持つてるんだから、仲良くできたらいいのに」

「全くだな」

権力に興味も関心もないリアからしたら、何故王位など欲しがるのかが理解できない。そんなものよりも、大切なものはたくさんあるということがわかっていないのだろうか。

「本当に妹にはなれないけど、そう呼んでほしいなら呼ぶよ、お兄様」

「ああ……いいな、やっぱり。可愛げのかけらもないこの二人とは大違いだ」

「僕達に可愛げを求めてどうするというのですか」

アンゼルが鋭いつっこみをいれ、トーヴァスが苦笑する。ジェライドはそこが可愛げがないと言ってるんだ、と子供のように唇を尖らせた。

彼は血の縁には恵まれなかったが、それよりも確固たる絆がここにある。同じ血が流れていようがいまいが、そんなことは些細なことなのかもしれない。リアも、違う血を持つ人から温もりをもらったのだから。

「おっと、見えてきた。そろそろ着くぞ」

ジェライドがそういうと、馬車の速度が徐々に落ち、そしてピタリと止まった。リアは横目で窓の外を確認すると、他にも幾つかの馬車が同じように止まっているのが見える。

「それじゃあ仮面をつけようか」

あらかじめ用意された目許と鼻を覆う仮面を装着する。リアがつけているベルトと同じような銀細工の造りに、小さな宝石が散りばめられた値の張るだろう一品だ。アンゼルとジェライドも色彩は違うが同じようなものを、トーヴァスはそれよりも簡素なものをつけた。

これをつけて改めて三人の顔を見てみると、額の部分まで仮面で覆われていて、顔の特徴をうまく捕らえることができない。確かにこれなら似ていなくとも兄弟と通じるだろう。

トーヴァスが初めに馬車から降りると、胸に手をあて、無駄のない動きで一礼した。

「足元にお気をつけてお降り下さい、ご主人様」

淀みなく紡がれた言葉に続いて、ジェライドがご苦労と声をかけながら降りる。アンゼルもそれに続き、リアは一番最後に馬車から降りた。

周りを見渡すと、それぞれ個性豊かな仮面をつけた者達の姿がちらほらと見える。顔がわからない彼ら

は、傍から見ると不気味だった。着ている物はとても上質で品があるのに、仮面の下の素顔は服装と同じとは思えない。誰も彼もが、腹の中に一物を抱えているだろう。

ここからは敵地だ。気を引き締めなければならない。

「ファニエル、どうした？ 緊張しているのかい？」

ジェライドが顔を覗き込んでくる。その構図はさながら、弟を心配する兄の図だろう。リアはにっこりと微笑んだ。

「いいえ、お兄様。皆さんとても個性的な仮面をつけていらっしゃるので、思わず見入ってしまったのです」

卒なく答えると、ジェライドがニヤリと口元をつりあげた。丁寧な口調は慣れないが、アンゼルが普段使っているような言葉を真似ていればなんとかなる、と言ったのは他でもないジェライドだった。

「兄上、ファニエル、行きますよ。そこには他の方の邪魔になります」

仮面をつけて表情が全くわからないのに、アンゼルが何をやっているのかと呆れているのがわかる。仮面のせいで鮮紅色の瞳まで見え辛くなってしまったのは残念だが、仮面をつけてもアンゼルは変わっていないと思うと、心が落ち着くのを感じた。アンゼルはやっぱりアンゼルだ。

リアは二人の後ろをついていき、リアの後ろをトーヴァスが続く。屋敷の門前に検問をしているらしき屈強な男が二人いた。彼らも仮面を被っていて、その場に立っているだけで威圧感がある。

しかし場にそぐわない屈強な男が相手でも、参加者の貴族たちは怯えることはなく、手馴れた様子で招待状を見せて中へと入っていった。招かれざる客をつまみ出すことを考えたら、これぐらい屈強なのが当たり前なのかもしれない。

「護衛含めて四人だ」

ジェライドが男に招待状を見せた。当然、リアがフォーラ卿と呼ばれた男の部屋から持ってきたものである。

「どうぞ、お通り下さい」

特に怪しまれることもなく、あっさりと通過することができた。招待状には招待客の名前等の個人情報は一切記入されておらず、別人が何食わぬ顔で持ってきて、それを確かめる術はないのだ。だから堂々としてさえいれば、主催者側に疑われることもないだろう。

しかし、リアは周りの客達の視線を集めていた。それは怪しいと思われる視線ではない。まだ幼いと言える『少年』が、闇オークションに参加しているというもの珍しさからくるものだろう。ちらりちらりとリアを盗み見ては、ヒソヒソと小声で何かを囁きあっている者達の姿が視界に映った。

「……！」

不意に妙な視線を感じ、リアはバツ、と振り返る。好奇心とは全く異なる、まるで舐めるかのような、悪寒の走る嫌な視線だった。

「どうかしましたか、ファニエル」

アンゼルの問いかけにすぐには答えることができなかった。人の耳が多い所で、感じたことをそのまま伝えるわけにはいかない。きちんと言葉を選ばなければ。

「申しわけありません、クラウドお兄様。誰かにじろじろと見られているような気がして……」

伝えるべきことを織り交ぜながら、好奇の視線に晒されて怯える少年を演じる。その言葉と同時に、あからさまにリアを見ていた者達がバツ、と視線を逸らすのがわかった。

リアは視線を感じた方をちらりと見るが、そこには既に誰もいない。

「お前は少女のように可愛らしいからな。思わず見たくなくなってしまう気持ちはわからなくもない」

「ふざけたことを言わないで下さい兄上。だから僕はファニエルを連れてくることを反対したんですよ」

「社会勉強は早いのに越したことはないだろう？ お前は過保護すぎるんだクラウド」

普段と同じようなやりとりをしながら、ジェライドが身体を屈め、リアの頭を撫でた。

「何、心配しなくてもルーナーがいるから大丈夫だ。何かあったら何とかしてくれるだろう。なあ、ルーナー」
「……お任せください」

トーヴァスが一礼をする。

「はい。わかりました、お兄様」

リアはにっこりと微笑んだ。

どうやらジェライドにリアの真意は伝わったようだ。何かあったらトーヴァスに任せるから、リアは予定通り行動すればいい。ジェライドの言外に含まれた言葉をリアはしっかり読み取った。

「ルーナー、よろしくね」

リアはす、と気配を消した。周りの空気に溶け込むように。

アンゼルとジェライドはトーヴァスに任せればいい。リアはこれから、彼らと別行動をとる。この屋敷に配置されている見張りを、全て気絶させるために。

そろそろ親衛隊と呼ばれる、トーヴァスが所属しているところの騎士達が近くへとやってくる頃だろう。彼らが速やかに突入できるようにするのが、今回のリアの仕事。手始めに、検問をしている屈強な二人の男達から気絶させよう。

来場した客達が屋敷の中へと入って行って、検問近くは静寂に包まれていく。だからといって彼らは気を抜くことはしない。検問が終われば、今度は見張りをしなければならないのだから。

しかし彼らは招いた客の中に、仇名す者がいるとは思っていなかった。更に、その者がずっと影の中に潜んでいたとも。

「暫く眠っててもらうよ、おじさん達」

そのせいで彼らは鈍い打撃音と共に、頸部に鈍痛が走ったと悟るより早く、見張りの任を全うすることなく意識を手放すことになってしまった。

「よし。次行こう、次」

小さな襲撃犯である金糸を三つ編みにした少年は、仮面で隠された朱色の瞳をきらりと光らせた。

オークション会場は盛り上がっていた。次々と表沙汰にはできない品々が運ばれ、一つ一つにとんでもない値段がつけられていく。

「こんなことに使う金が勿体無い……」

何に使うかわからないような怪しい物体や、明らかな盗品、快樂を与える代わりに精神を病んでしまうような薬に高値をつけるなんて、他に使い道はないのだろうか。有意義な金の使い方は他にたくさんあるだろうに。

「どうせこれが最後になるんだ。そうピリピリするな」

ボソリと呟いた言葉に、ジェライドが手を上げながら小声で返した。すると別の者が再び手をあげ、ジェライドもまた手を上げる。

アンゼル達の目的は、リアが見張りを全て気絶させ、親衛隊が突入するまでの時間を稼ぐことだ。そのために、一回の競りをできるだけ白熱させる必要がある。

それはジェライドが嬉々としてやっていた。どのタイミングで手を上げるか、どのくらい値をあげたら相手も食らいつくか、を綿密に頭の中で瞬時に計算している。引き際の見極めもまさに的確だった。

「売られている物のことを考えなければ、オークションとは楽しいものだな」

何とも楽しげにジェライドは言った。

彼を連れて来たのは間違いだったかもしれない。余計なことを覚えさせてしまった。一般的に度々開かれている競売のことを耳にしたら、参加したいと駄々をこね、脱走を図る可能性が充分に有り得る。ただでさえ脱走癖（へき）があるのに、それに拍車をかける一因となつては困る。

「続いての品物はこちらになります！」

漆黒の縁を持つ仮面にシルクハット。そして燕尾服というほとんど真っ黒という井出達の司会を務める男が、大仰に左手を客に向かって広げてみせた。

ガラガラと音を立てて運ばれてきたのは、人と同じ高さの鉄格子に覆われた檻。その中には、上質な衣に身を包んだ少女のように美しい少年が座っていた。しかし、細い手首には手枷が嵌められ、足首には重量のありそうな鎖がつけられている。丸みのある大きな瞳は呆然と宙を見つめ、多くの人々の視線に晒されても眉一つ動かさない表情は、全ての感情を拭い捨てたかのようなようだった。

「……」

周囲の人間達が、わっ、と沸きあがる中、アンゼルは込み上げる気分の悪さと憤りを懸命に堪えていた。

盗品や危険な薬などはまだ序の口だった。招待状にも目玉商品として記載されていたが、ただ知っているのと実際見るのとでは、全く違う。一人の人間をまるで人形のように見つめる人間達の、なんて悍ましいことか。

「……俺の知らないところで、こんなことが罷り通っていたんだな」

いくら長引かせるためとはいえ、流石に人間を競ることに抵抗があったのか、ジェライドは手を上げることなく、じっと檻の中の少年を見つめている。トーヴァスをちらりと見遣ると、彼もまた少年をじっと見据え、口を引き結び、自分の手を強く握り締めている。憤りを覚えたのは、アンゼルだけではなかった。(リアと別行動をとってよかったかもしれない)

貴族の闇の部分をも身を持って知っている自分達でさえ、沸き立つ怒りを抑えるのに必死なのだ。こんな悍ましい光景を見ずに済むのなら、それにこしたことはない。

「しかし、あの少年は失踪した者ではありませんね……」

「そうだな。失踪した者達は至って標準な容姿の持ち主ばかりだ」

少年の競りは白熱していた。次々と手が挙がり、値がどんどんつりあがっていく。

「……彼を見る限り、失踪者が出品されるとは思えないな」

「でしょうね」

彼のような美しい容貌を持つ者はそうそういない。もしも失踪者が商品とされているのならば、少年より先に出されるはずだ。そうでないと、失踪者達にあまりいい値がつかなくなる。

それなのに少年を先に出したということは、同じくらいの美貌の持ち主が他にもいるのか、もしくは人間はこの少年しかいないのかのどちらかだ。

「まあ、関係があったらそちらも解決できて万々歳と言ったところか。可能性はかなり低そうだがな」

「そう上手くことが運ぶとは思えませんね」

カンカンと金槌を叩く音が響く。落札されたときに鳴る音だ。

甲高い音に対しても少年は顔色を全く変えず、無表情のまま檻の中で佇んでいた。ガラガラと檻は音をたて、舞台から姿を消す。

少年の後に出てきたのは、日くつきの鎧だった。その後も同じような物が続き、再び人間が出てくることはなかった。やはり、人間はあの少年だけなのかもしれない。

オークションが始まってから、どれだけの時間が経っただろう。既にかかなりの数の品物が落札された。軽く見積もっても小一時間はゆうに経過しているはず。

そろそろリアが全ての見張りを気絶させ、屋敷の外で待機している親衛隊に合図をおくっていてもおかしくはない。

会場の入り口の方をちらりと見遣ると、トーヴァスも同じように入り口を気にしながら、いつでも抜刀できるように柄に右手を添えていた。

そんな自分達のピリピリとした雰囲気になど目もくれず、その他大勢の客達は競売に夢中だった。

「落ち着け。彼女ならうまくやってくれるさ。俺達はただ待てばいい」

競りを長引かせることを再開したジェライドが、口元に笑みを浮かべた。一人だけ暢気とも言える態度に思わず嘆息するが、それはそれで彼らしい。トーヴァスと顔を見合わせて、お互い軽く肩を竦めあう。

突如、バン！ と会場を揺るがす大きな音が響いた。それは勢いよく扉が開け放たれた音であり、自分達がずっと待ち望んでいたもの。

「我らはジェライド陛下の親衛隊である！ 今宵は陛下の名の下に、闇オークションを企てた者達を捕らえるために参上した！」

開かれた扉から武装した騎士たちが次々と入り込み、会場は騒然と化した。誰もがおろおろとこの場からどうにかして逃げようと周囲を見渡すが、出入り口は全て親衛隊が封鎖している。

舞台上の主催者側も、突然のことに身体を竦ませるが、すぐに身体を捻って舞台裏へと姿を消した。そこから逃げるのかもしれない。

「待て！」

「大丈夫だ！ トーヴァがもう追った！ 俺達も追いかけるぞ！」

漆黒の服に身を包んだ青年が舞台の上に飛び乗る姿が視界に映る。アンゼルもジェライドと共に、あたふたと慌てている客達を掻き分けながら舞台の上へと登った。

舞台裏へと入っていくと、ひい！ という情けない悲鳴が聞こえてくる。悲鳴がした方へ進んでいくと、トーヴァスが司会をしていた男を壁際に追い詰め、鼻先に剣をつきつけていた。

「よくやった、トーヴァ」

ジェライドが労いの言葉をかけると、彼は軽く頭を下げる。視線はまっすぐ司会の男へ向けられていた。

男は顔が青ざめながらも周りをきょろきょろと見回し、隙さえあれば逃げ出してやると言わんばかりだった。何とも油断ならない。

「そ、その剣をどける！」

突如震えた声が横から割り込んだ。声がした方を向くと、見覚えのある小太りの男が興奮のあまり鼻息を荒くしていた。リアと王宮へ向かったときに、引手繰りにあった貴族の男だった。

「こ、こいつがどうなってもいいのか！」

そういつて示したのは小脇に抱えた少年だった。手枷や足の鎖は外されていたが、少女のごとく美しい容姿を持つ少年は記憶に新しい。鈍い光を持つテーブルナイフを眼前につきつけられた少年は、白い肌を真っ青に染め上げ、瞳は恐怖に揺れている。自分が売られることに何の感慨も抱いているように見えなかった少年も、命の危機には流石に顔を歪めていた。

「多少やっかいなことになりました……あの男に正論は通じません」

ジェライドとトーヴァスにだけ聞こえるくらいにボソリと呟く。宥める言葉でも、この男は逆上する可能性がある。ジェライドはそれを瞬時に悟ったらしく、コクリと軽く頷いた。

「命にはかえられないな。その剣をどけてやれ」

トーヴァスはその言葉に従い、徐に剣をどけ、腰の鞘へと戻す。

それを確認したとたん、司会の男は少年を抱えている男の元へと背中を向けて走った。少年を抱えている男がほっと嘆息する。それは致命的な油断だった。

それを見逃すトーヴァスではなく、彼は力強く床を蹴る。司会の男に体当たりを食らわせて転倒させると、素早く剣を抜き放ち、少年を抱えている男が持っているナイフをはじき飛ばした。

「な……！」

男は何が起こったのかさっぱりわからないという顔で啞然とした。トーヴァスは隙だらけになった男の、少年を抱えている腕に剣の柄を叩きつける。男はうめき声を上げると同時に少年を抱える力を緩ませ、少年は床へと落下した。

アンゼルはすかさず床に倒れた少年の腕をひっぱり、こちら側へと引き寄せ、後ろへと庇った。これで人質はもういない。

トーヴァスは少年の身体が解放されたのがわかると、長い足を後ろへ振り上げ、膝を鳩尾へと微塵の容赦もなくきめた。男は背中から床に倒れ、腹を抱えて蹲る。

「頼みの人質はいなくなった。大人しく投降してもらおう」

いつもの温厚なトーヴァスとは思えない低く冷たい声音。仮面をつけているため表情はわからないが、とてつもない怒りに身を震わせているのはわかる。幼い少年を競りにかけただけでなく、盾として使った非情な行いが、心根の優しい彼の逆鱗に触れたのだ。

司会の男はトーヴァスの気迫に気圧され、がくがくと震えていた。しかしそれでも少しでも活路がないか、視線を周囲に走らせている。なんとも往生際が悪い。

「お前達の罪、必ず白日の下に全て曝け出す。国王ジェライドの名にかけて」

ジェライドは鬘と仮面を外す。赤み交じりの銀髪と力強い灰色の瞳を持った儂い美貌が姿を現した。

「へ、陛下……！」

「久しぶりだな。財産の半分を進呈すると頭を下げにきたとき以来か。――俺の治世の下でこのような非人道的催しを行った罪は重い、覚悟しておけ」

司会の男はがくりと肩を落とした。国王直々に罪を暴かれ、逃げおおせる術などないと漸く悟ったのだろう。

アンゼルとトーヴァスも仮面を外し、変装を解く。これはもう必要ない。

「もう大丈夫ですよ。君は自由です」

アンゼルの膝を折って後ろに隠れていた少年の頭をそっと撫でた。少年は大きな瞳を更に大きく見開くと、目尻に雫を溜めた。徐に目を伏せ、つ、と雫が薔薇色の頬を伝い落ちる。

「今まで辛かっただろうが、もう大丈夫だ。君の身の安全は俺達が保障する」

「……ありがとうございます」

ジェライドが少年の前に屈んで視線を合わせ、アンゼルと同じように頭を撫でた。少年は涙を袖でこすり、うっすらと微笑む。それを見たトーヴァスが厳しかった目許を和らげた。

アンゼルの少年を二人に任せることにし、項垂れている司会の男の前に立つ。彼に聞かなければならないことがあった。

「単刀直入に聞きます。現在問題となっている失踪事件も、あなた方の仕業ですか？」

男はがばっと顔をあげた。

「ち、違います！ その件とは無関係です！」

「……調べればすぐにわかることですよ？」

「ほ、本当に違います！ ただの一般市民を攫ったって、価値なんてたかが知れてるでしょう!？」

「……成る程、それもそうですね」

軽く一笑した後、瞳を細めて鋭く睨む。男は喉でひっ、と唸った。

「どのみち、貴方の犯した罪は重い。独房で深く反省することですね」

そう言い捨てて男に背中を向けた。人を『物』としか見ていない男を、これ以上視界に入れておきたくはなかった。

「陛下！ こちらにおられましたか」

鎧を纏った二人の騎士がタイミングよく現れる。二人は現状を報告してくれた。オークションに参加していた者達全てを捕縛し終わったと。現在は出品された品々を押収している最中だという。

ここにいる二人の男の捕縛と、少年の保護のことを口に出そうとしたとき、片方の騎士が気になることがありまして、と顔を曇らせた。

「何かあったのか？」

「その……陛下は見張りは全て気絶（・・・）させてある、と仰いましたよね……？」

「気絶していなかった見張りがいたのか？」

「いえ、そうではなく……。確かにほとんどの見張りが気絶していたのですが、品物を保管していた、倉庫近くの見張りをしていた者達だけが、刃物で斬られ、絶命していました」

「!？」

三人は同時に息を飲んだ。それはリアがやったことではない。己の剣を魔剣にはしないと云った少女が、たった数人だけでも命を奪うとは思えなかった。つまり、リアではない別の誰かが、倉庫を見張っていた者達の命を奪ったことになる。

「一体誰が……？」

アンゼルの呟いたと同時に、ドォンと何かが倒壊する音が響いた。

ドサリと力なく倒れた見張りの男を確認する。ここはこれで全員のはずだ。

さっさと次に進むべく、振り向きもせずにとったかと走り出す。廊下を巡回している見張りや遭遇したら、叫ばれるより早く急所を強打して意識を奪った。

屋敷の構造は、ジェラドがどこからともなく手に入れた見取り図によって、頭の中に入っている。見張りを効率よく気絶させるために、道順はしっかり決めてあった。このまま進めば、商品を保管しているという倉庫に辿り着くはずだ。そしてその見張りを気絶させれば、全ての見張りを気絶させたことになる。

途中の道を曲がり、だんだんと細くなる通路に入った。確かこの先に倉庫がある。あと少しだと思ったとき、そこはかたなく違和感を覚えた。何かがおかしい。その思いは正しく、倉庫へと辿り着くと同時に瞠目した。

そこにいたのは倒れている三人の男達と血溜まりだった。白目を向いて仰向けに倒れている男に恐る恐る近寄ると、肩から腰まで斜めに一度に斬り裂かれた跡がある。血が大量に流れ出ていなくとも、即死の致命傷だ。他の二人も同じように斬り裂かれており、完全に絶命している。

(誰がやったの……?)

血はまだ完全には乾いておらず、殺されてからさほど時間は経っていない。そしてこんな致命傷を負わせるには、斬ることに躊躇いがあるとは不可能だ。つまり、人を殺すことを躊躇わない者が近くにいる。

ふと思い出したのは、入場したときに感じた不自然な視線だった。

「出てきなよ。近くにいるんでしょ？」

空気が動いた。同時に潜めていた気配を感じる。コツコツと小さな足音とともに一人の人間が物影から現れた。

背の高い男だった。まず目についたのは翠色の宝石が散りばめられた、顔の半分を覆っている仮面。髪は長めの鮮やかな青。服は金の刺繍や銀の釦がついた真紅の燕尾服。ところどころ赤みが濃いところがあるが、それは返り血かもしれない。

そして手には、怪しく光る紫色の刀身を持つ大剣が握られていた。

「あなただよ、この人達斬ったの」

「――ええ」

男は口元に笑みを浮かべた。人を殺めたことを肯定したとは思えない、穏やかな笑みだった。

「何でこの人達を殺したの？」

「あなたのお手伝いがしたくて」

再び口元がにっこりと笑みを作る。仮面の下の顔も、恐らく穏やかな笑みを浮かべているのだろう。

それが余計に悪寒を募らせる。リアは口を引き結びながら男を睨みつけた。

「殺す必要はなかったはずだよ。気絶させるだけで充分なもの」

「機嫌を損ねてしまいましたか。申しわけありません」

男は胸に手を当て、軽く頭を下げた。人を殺めたことに、微塵の後悔すらない。

「君の目的は、何？ オークションに参加しなくていいの？」

見張りの命を奪うためだけにここにきたのではないはずだ。明確な目的が、必ずある。

「フフ、目的ですか。それは――」

リアは素早く剣を抜いた。刹那、キィンと甲高い金属音が狭い空間に響き渡る。

「大変魅力的なお嬢さん(……)がいるというのに、暢気にオークションになど出てはいられませんよ」

「言葉と行動が見事にあってないね」

双つの剣で男の剣を受け止めたリアは、わざと力を緩めて体を横に捻る。前屈みになった男の顎を目掛けて剣を振るうが、男は片足でリアの反対方向へと飛んだ。不安定な姿勢をもろともしない動き。

男は地を蹴った。そう思った瞬間には、既にリアの眼前にまで迫っている。とてつもない瞬発力だ。リアは瞬時に身体を大きく屈め、今度は脛を狙う。しかし直前で彼は身体を宙に浮かせてリアの頭上を通り過ぎる。リアは直ぐに振り返り、頸部目掛けて剣を振り下ろすが、キンと大剣に阻まれた。速い。

素早くもう片方の剣で大剣を薙ぎ払い、バックステップで距離をとった。

「流石ですね……速さも力も、人間の持つものとは思えません」

「それ、そっくりそのままそっちに返すよ」

男の反応速度は異常だった。踏み込んだ瞬発力も、斬り返しの速さも。これが常人なら、既に急所を捉え、意識を奪うことに成功している。

「失礼ですね。私は普通の人間ですよ、貴女とは違います」

男は心外だとばかりに肩を竦めた。

「平然と人を殺しておいて、よく言うよ」

人を殺すことを全く躊躇わない人間を、リアは『普通』とは呼ばない。目を細めて睨みつけると、男の仮面の下の瞳がギラリと光ったように見えた。

「おや、貴女がそれをいうのですか？ 『金色の殺戮人形（デリーター）』と呼ばれた貴女が」

「なっ……！」

何故その名前を、と思うより早く、男が再びリアに向かって地を蹴った。すぐに気を取り直して真横に跳ねる。だがその僅かな反応の遅れのせいでかわしきれず、剣先が腕を掠めてしまった。しかし痛みはなく、どうやら服の部分を斬られただけで済んだようだ。

「やはり素晴らしいですね。隙をついた攻撃にも無傷で済むとは」

また笑った。しかも、とても楽しそうに。まるで仕留めがいのある獲物を見つけて喜んでる狩人のようだ。

（落ち着け。わたしの仕事はまだ終わってないんだから）

見張りを全て気絶させることだけが仕事ではない。あらかじめ渡されている煙が出る筒を使い、屋敷の外で待機している親衛隊に合図を送る。そこまでが仕事だ。リアが合図を送らない限り、親衛隊が会場へと乗り込むことはない。

親衛隊だけでなく、会場の中にいるアンゼル、ジェライド、トーヴァスもリアが早く合図を送ることを待っているはずだ。しかし、こんな危険な男がいるというのに、合図を送ることなんてできない。親衛隊の人達を危険に晒してしまう。

だが、この男を気絶させることは容易ではないだろう。好機は何回かあったにも関わらず、全て防がれてしまった。こうなったら無理に気絶させることは考えず、突入箇所に全く関係のないところまでこの男を引き付ければいいのかも说不定。一度突入してしまえば、制圧するのにそう時間はかからないはずだ。それくらいなら、何とかなる。

リアは後ろへと跳ねた。少しずつでいい。この男をここから引き離さなければ。

男はフ、と軽く息を吐くと、再びリアに向かって踏み込んだ。リアは一步一步後退しながら、剣を何度も振りかざす男の刃を受け止める。男は速いだけでなく力もあり、一つ一つの剣戟が重い。衝撃を逃がしながら受け止めるのは骨が折れるが、同等の力で受け止め続けては腕がもたないだろう。

本当にやっかいな相手だ。

誘導は少しずつ成功していた。倉庫に繋がっていた細い通路を抜け、会場とは正反対の道をひたすら下

がり続けている。

しかし同時におかしくも思った。上手くいきすぎではないだろうか。リアの誘導にわざと乗っているように思えてならない。

すると、男が口角をあげた。ぞくりと悪寒が走り、リアは剣をふりあげて男の剣をはじき後方に大きく飛ぶ。

「そろそろ、合図とやらを送ってさしあげてはいかがですか？」

「……」

やはりこちらの意図を読まれていた。だが、この男がそれにあえて乗った理由がわからない。オークション関係者が捕まって困るのは、この男のはずだ。

「私に気を使わなくて構いませんよ。オークションでは確かに面白いモノが入りますが……貴女以上に面白いモノはそうそうありません」

「人をモノ扱いしないでほしいね」

「おや、褒め言葉のつもりだったのですが、いけませんね。またお嬢さんの機嫌を損ねてしまったようです。申しわけありません」

初めに問答したときと同じように、男は胸に手をあて、優雅に頭を下げた。リアはその隙に近くの窓ガラスを素早く叩き割り、筒から煙を発生させて外へと放り投げる。これで親衛隊が中へと入れるはずだ。

「本当に、あなたは何が目的なの？ オークションに興味があるわけではないみたいだし」

「ええ。オークションはただの暇つぶしです。彼らがどうなろうと、私の知ったことではありません。——もう必要ありませんから」

リアが構えたと同時に腕に衝撃が走る。相変わらず速い。更に、それなりに長い間何度も切り結んだというのに、男に疲れた様子は微塵もなかった。それはリアも同じだが、リアは常に身体への負担が極力少なくなるように動いている。それに使っている獲物も、彼のような重い大剣ではなく、使い勝手のいい双つの短剣だ。

「流石ですね。最小限の力での剣さばき、思わず見惚れてしまいそうです」

「そう思うなら、手を緩めてくれると嬉しいな—」

「そんな勿体無い。——やっとなおきなく、貴女と殺し合いができるというのに」

「！」

斬撃に重みが増した。今まで手を抜いていたというより、抑えていたものを爆発させたという感じだろうか。しかしどこからそんな力が湧いてくるのだろう。いくら体力に自信があっても力を抑えていたといっても、何度も大剣を振りかざし続けるだけで、とてつもない運動量になる。持久力だけの問題ではなく、身体全体に負荷がかかっているはずだ。

それなのに彼は息すら乱すことなく、軽々と大剣を扱っている。同じことをトーヴァスに求めたとしても、ここまで全く疲れずにいるのは無理だろう。

男は性格だけでなく、身体そのものが異常だった。

縦に、横に、斜めに。角度を変えた激しい斬撃が続く。時折長い足を活かして足払いをかけてきたりと、一縷の油断も許されない。

緊張感に満ちた中、リアは防戦に徹していた。

人間離れた身体能力は、何か秘密があるに違いない。動きや動作は無駄がないだけでなく、人目をひく優雅さもある。それはこの男がれっきとした貴族だからだ。もし彼もリアのように幼い頃から鍛えられていたのなら、そんな優雅さとは無縁のもの。暗殺者に優雅さなど必要ないから。

その秘密がわかれば、攻略の糸口が見つかるかもしれない。

思いつくことは二つあった。一つは何らかの薬を使って身体に疲労を感じさせないようにしていること。薬物投与だ。闇オークションに参加していたのなら、そんな薬を手に入れることも難しくはないはず。

そしてもう一つは――

リアはその可能性に掛けることにした。

連続で振り下ろされる刃を一点集中してはじき返し、受身の姿勢から攻勢へと変える。男はそれを見て嬉しそうに微笑みながら、剣を振りかざした。リアはその剣戟を真っ向から迎え撃つ。右手で振り上げた剣が、大剣の根元をとらえた。

キィン

甲高い音と共に、あるものが宙を舞った。怪しく発光する紫色の刀身が、クルクルと円を描く。そして高い天井に深々と突き刺さった。

「な……！」

男が初めて驚愕の声をあげる。その隙を逃さず、左の剣を薙いで刀身を鳩尾へ叩き込む。しかし寸でのところで受身をとられ、決定打にならない。

「まさか……この剣を折ってしまうとは……」

「その剣、魔剣でしょ？ しかも持ってるだけで所持者に力を与えてくれる系のヤバイ奴」

男は腹を押さえながら、刀身のほとんどを失った剣を見つめた。その反応からして、剣が男に力を与えていたという考えは当たっていたようだ。

薬物の投与は、肉体的負担がとても大きい。使っている最中は何も感じなくとも、薬が切れた途端にそのしわよせが身体を蝕む。つまり制限時間がある。だが、この男は時間を気にしている様子が全くなかった。気にする必要がないからだとしか思えない。それなら、時間に関係なく力を与えてくれているのは、剣の方ではないかと踏んだ。

単純に、剣が怪しい雰囲気をかもしだしていたからというものもある。

これで形勢は一気にリアへと傾いた。異常な身体能力を与えていた魔剣は折れ、受身で軽減されたものの、鳩尾へのダメージもある。

「フフ……ハハ」

男から漏れた声に眉根を寄せた。圧倒的不利な立場に立たされたというのに、彼は笑っている。先程と同じようにとても楽しげに。

「本当に……貴女は私の想像を遙かに超える女性（ひと）ですね、リアさん」

「え!？」

何故名前を知っているのだろうか。いや、それだけではない。彼はリアがかつて呼ばれていた通り名まで知っている。それを知っているなんて尋常ではない。何故なら、そう呼ばれていたのはもう十年以上前（……）のことなのだから。

「あなたは一体……！」

何故リアのことを詳しく知っているのか問い質そうとしたときだった。

ビシビシと亀裂の入っていく音が上から鳴った。バツと天井を見上げると、魔剣が突き刺さったところから、蜘蛛の巣状の罅がどんどん広がっている。

「流石魔剣ですね。すさまじい切れ味だ。早く逃げないと、生き埋めになってしまいますね」

男が暢気に呟く。まるで他人事だ。

せめて男を気絶させようと一步を踏み込もうとするが、それを見通していたかのように、天井のかけらがリアの足元へと落下する。これでは無闇に近づけない。

「フフフ……楽しいひと時も終わりのようです。それではまた（・・）お会いしましょう、リアさん」

「待て！」

踵を返して走り出した男を追おうとするが、そのときタイミング悪く、天井がいきなり崩れ落ち始めた。リアはクッと歯を食いしばり、剣を素早く鞘に収めながら、近くにある窓へと走った。勢いをつけて跳躍し、硝子を蹴り破りながら外へと脱出する。

ここは二階だった。三階から普通に飛び降りられるリアからしたら、大した高さではない。下に池が広がっていなければ。幾らなんでも空中で自在に動けるわけがなく、リアはそのままドボンと池の中へと落下した。直ぐに顔を出すと、同時に背後からドォンと建物が崩壊する音が聞こえてくる。間一髪だった。

リアはゆっくり水を掻き分けながら岸へとあがる。この池は思ったより深く、衝撃をすべて受け止めてくれた。おかげで大した怪我もない。

しかし男を逃がしてしまった。しかも魔剣を折ったことが仇となって。まさか突き刺さっただけで天井を崩すなど、誰が想像できただろう。魔剣の力を甘くみていたのかもしれない。

地面へ腰を下ろすと、リアは徐に右手で剣を抜く。そしてそれをじっと見据えた。

また、斬れてしまった。術式封印だけでなく、魔剣と呼ばれた剣すらも。他に方法がなかったからとはいえ、『斬る』ことに頼ってしまった。アンゼルに魔剣にはしないとはっきり言ったのにも関わらず。

これでは、この剣こそが魔剣そのものではないか。

リアは頭を振って、剣を鞘に収めた。今はくよくよしているときではない。アンゼル達と合流し、逃げた男のことを報告しなければ。

振り返ると、倒壊した屋敷が視界に映る。屋根が崩れ落ちた衝撃で、壁や床も連鎖的に崩れてしまったようだ。これでは中へと入ることができない。あの男をオークション会場から引き離すため、倉庫がある所から離れたところで倒壊が起きたことだけが唯一の救いだらう。他に倒壊に巻き込まれた者はいないはず。

崩壊する音はとても大きかったから、聞きつけた誰かがそのうちやってくるだろう。自分からアンゼル達を探すよりも、誰かがくるのを待っていた方が効率がいいかもしれない。

リアは仮面を外し、上着を脱いでぎゅー、と服を絞った。ポタポタと水がどんどん落ちる。フリルのついたブラウスも同じように脱いで水気を払う。そして三つ編みにされた髪を解いて首を思い切り振った。水滴が四方八方に散っていく。

服を広げて地面におき、そのままちょこんとリアも座った。どうせ誰も見ていないのだから、暫くこうやって乾かしておいたほうがいい。濡れた服をずっと着ている方が身体を冷やしてしまう。

ぼうっと池の水面を見ていると、アンゼルと出合ってからのことをふと思い出した。夜の帰り道に見つけたとても美しい色彩。それを追って間近で見て、また会う約束をして。明るい日差しの中の彼の髪と瞳は、やっぱり綺麗で見ていると飽きなくて。これから先も彼のことを見ていられたら、どれだけ幸せなんだろう。

アンゼルのことを考えているだけで自然と頬が緩んだ。剣のことであれこれ考えていたことがまるで嘘のように。

誰かのことを考えるだけで幸せになるのは初めてだった。祖父のことを思い出して、楽しかった思い出に浸るのとは何かが違う。胸がくすぐったくなるような、それでいて温かいこの気持ちは一体何なのだろうか。

暫くそんな思考に耽っていると、人がやってくる気配を感じ、すぐさま乾かしておいた服を手にとった。しかし当然ながら、短時間で完全に乾くわけがなく、服は湿っていた。しかしある程度水気をきっていた分だけましだろう。さっと腕を通し、崩れた屋敷の方へと向かう。

そこでは親衛隊と思われる武装した人達が、誰かが瓦礫に向かおうとしているのを止めているのが見える。

「リア！ いるか!? いるなら返事をしろ！」

アンゼルがリアを大声で呼んでいた。その声音は焦っているように聞こえる。もしかしたら、崩れた瓦礫の中に生き埋めになってしまったと思われているのかもしれない。

「アンゼル！ わたしはこっち！」

気づいてくれるよう、大きな声を出しながらアンゼル達に駆け寄っていく。くるりとリアの方を向いたアンゼルの頭には地味な色の髪はなく、顔の半分を覆っていた仮面はリアと同じように外していて、すっかりいつも通りのアンゼルだった。美しい鮮紅色の瞳がリアをとらえると、安堵したかのように目を伏せた。

しかし、傍に寄ったリアを見て、アンゼルは顔を顰める。

「おい、濡れてるがどうしたんだ」

「窓を蹴破って外に出たら、下が丁度池だったの」

待っている間に少し乾かしたから大丈夫と伝えたと、突然アンゼルに腕を掴まれる。

「血が出てる。怪我をしたんじゃないのか」

「え？」

蹴破った硝子で切ってしまった覚えもなければ、謎の男に斬られた覚えもなかった。

腕を見ると、確かに服がさっくりと裂けていた。そういえば一回だけかわしきれず、服をあの男に斬られたことを思い出す。

しかし肌は傷つけられていない。つまり、その裂け目から自分の腕だけが見えている状態だ。それなのにアンゼルが『血』がでていると思ってしまったのは――

「見ないで！」

リアはアンゼルから腕を振り払い、服の裂け目を手で押さえながら腕を抱えた。頭から血の気が引いていく。

(これだけは誰にも見られたくなかったのに――)

腕を抱きしめたまま俯き、何も言えないでいると、ぱさりと背中に何かがかげられた。アンゼルの上着だ。

「あ……」

「そのままでは風邪を引く。――関係者は全員捕まえたから、話は後で聞かせてくれ」

アンゼルは軽くリアの頭を撫で、遅れてやってきていたジェライドとトーヴァスの方へと向かった。今後のことを話し合っている。リアもそれに参加しなければならないのに、足が縫い付けられたかのように動かない。

リアは何とも言えない気持ちのまま、ずっとそのまま立ち尽くしていた。

落ち着きを取り戻したリアから聞いた話は、思わず耳を疑いたくなるようなことばかりだった。しかし現実に屋敷の一部は倒壊し、そこから紫色の折られた刀身が見つかったのだから疑う余地はない。

「多分その剣もオークションで手に入れたんだと思う。見た目もかなり特徴的だし、あの男の人自体もかなり派手だったし、主催者も誰に売ったか覚えてるんじゃないかな」

持ち主さえ特定すれば捕まえられるとリアは思ったようだが、しかしこれはそんな簡単なことで済む話ではなかった。

「いいや、問い詰めても無駄だ。特定はできやしない」

「なんで？」

「その男が変装していたからさ。当然名前も偽名だな。俺達が侵入したのと同じように」

ジェライドが肩を竦めながら簡単に説明した。もし主催者を問い詰めたとしても、偽っていた名前がわかるだけだろうと。

「……何でそれがわかるの？」

リアが抜け目なく尋ねた。ジェライドの口調が疑問系ではなく、断定していたことに気づいていたようだ。

「リアの話を知っていたら、心当たりのある顔が浮かんでね……。もうそいつしか考えられなくなった。そいつが、足がつくようなヘマをするはずがない」

ジェライドのいう『心当たり』とは――恐らくアンゼルが思っているのと同じ人物だろう。

アンゼルも、リアの話を知って『彼』のことが頭に浮かんでいた。

「その人って、誰？」

リアの問いにジェライドが思った通りの名前を告げる。リアは目を見開きながら息を飲んだ。

「やはり、彼か……」

トーヴァスが顔を悔しげに嚙める。違っていてほしかった、という願望が滲み出ていた。

「リアを待ち構えていたであろう言動からして、間違いないでしょうね」

リアが見張りを全て気絶させて回すことは、自分達四人しか知りえないこと。それなのにその男は知っていた。だが、『彼』だとしたら、知っていても、否、予測できていてもおかしくはない。何故なら、リアをこの事件に協力させるのを推した張本人なのだから。

「――それなら、今から屋敷に行って、証拠が残ってないか探ってくる」

アンゼルがかけた上着の裾を握り締めながら、リアが力の籠った声で言った。

本当なら別の服に着替えさせてやりたいが、まさか池に落ちるとは思わず、着替えの用意などしているわけもなく。そんな湿った服のまま、アンゼルの上着の裾を握り締める彼女は、とても痛ましくみえた。

リアの方を見ると、彼女は罰が悪そうに顔を逸らす。今まで逸らしていたのはアンゼルの方だったというのに。

理由はわかっている。腕を掴んで見た『モノ』が原因だろう。裂けた服から赤い色が見えたから、てっきり怪我をしたのだと思ったが、どうやら『それ』は怪我ではなかったようだ。

いつも能天気には笑っているリアが、悲痛なまでに『それ』を見られることを拒んだ理由はわからない。ただ、そのときは怪我をしていなかったのならそれでいいと思っていた。

「……そんな不安定な状態で、行かせられるわけがないだろう。それに――」

大分落ち着いたとはいえ、リアの顔色はまだいいとは言い難い。もしもその状態で彼の屋敷へと向かえ

ば、それこそ彼の思う壺だ。

「彼の狙いはリア、お前だ。お前が自分の屋敷へ忍び込もうとすることも想定しているはず。今彼の屋敷に向かえば、わざわざ捕まりに行くようなものだ」

リアと剣を交えていた彼は、とても楽しげだったらしい。目的を尋ねたときも、リアと戦うことこそが目的だといわんばかりだったとも。リアが魔剣を折ったことで立ち去ったようだが、それで満足したとは思えない。

「俺も反対だ、リア。――あいつは危険だ」

「大丈夫だよ。わたしと対等に渡り合えた魔剣はもうないんだから。絶対遅れはとらない」

「そうじゃない。あいつは俺達のすぐ近くにいながら、狂気の片鱗すら見せたことがないんだ。そんな奴の巢の中に、狙われている君を飛び込ませるわけにはいかないだろ」

彼が側近になったのは、ジェライドが王位を継承してすぐのこと。名家の出でありながら、地位をひけらかさない腕の立つ騎士は、人材不足の継承直後は貴重な人材だった。

王位を継承してから今までずっと、彼はジェライドに忠実だった。その姿はまさに騎士そのもので、罪もない人間を躊躇なく斬り殺す残酷な姿は想像もつかない。

リアから直接話しを聞かなければ、疑うことすらしなかつただろう。

「じゃあ、王さまが直接調べるのはどう？」

「……残念だが、上級貴族である彼の屋敷を調べるには、確固とした証拠が必要なんだ。状況証拠だけでは、兵を動かすことができない」

「それじゃあ、誰も調べられないじゃない」

リアが愕然とした表情で俯いた。

何もそう思ったのはリアだけではない。アンゼルも、ジェライドもトーヴァスも、相手が誰かわかっているのに、確固たる証拠がないという理由だけで次に進めないのだ。これほどまでもどかしいことはない。

「きっと、こうなることを見越していたのだろうな、彼は……」

ボソリと呟いたトーヴァスにアンゼルは頷いた。今まで築いた信頼を失ったとしても、確固たる証拠さえ残さなければ捕らわれはしないと。

もともとリアに協力をしてもらったのも、調査ができない上級貴族達の屋敷を調べてもらうためだった。幾ら王といっても、彼らの領域に勝手に踏み込むことはできない。それは王の独裁を防ぐ役割を兼ねているため。ジェライドはそんなことをする王ではないが、それ以前の王たちには必要な措置であったため、急に改変することはできなかった。

「……やっぱり、わたし調べるよ。誰かがやらなきゃ、全然前に進めないじゃない」

リアの言い分も理解できる。

だが、今はもう普通の道を歩む少女に、これ以上危険なことをさせたくはなかった。

ちらりとジェライドを見遣ると、彼はコクリと頷く。どうやら、ジェライドもアンゼルと同じ気持ちのようだ。

「リア、そう言ってくれるのは嬉しい。けど、これ以上君を危険な目に合わせたくないんだ」

「でも……！」

「闇オークションのことがわかったのは君のおかげなんだ。それだけで充分だよ」

リアは唇をかみながら俯く。何度言っても、自分達の考えが変わらないと悟ったのだろう。そんな頑なな理由が、リアの身を思っていることだということが、もしかしたら余計に彼女の陰りの原因になっているのかもしれない。

「とにかく、一旦城へ戻ろう。闇オークションのことは親衛隊に任せればいい。今日はもう遅いから休ん

で、明日からまた対策を練る」

アンゼルとトーヴァスは軽く首を縦に振って答えた。リアはずっと俯いたままだったが、ジェライドがもう一度念をおすと、ゆっくりと頷いた。

城へ向かう馬車の中は、行きと違い誰も何も話さなかった。車輪がガタゴトと立てる音、馬の蹄の音ばかりが静寂を支配し続ける。

城についた後は、直ぐに自室へと戻り、リアを着替えと共に仮眠室へと押し込んでから外から鍵をかけた。頷いたとはいえ、彼女は納得していない。隙さえあれば、彼の屋敷へと行ってしまいかもしれず、それを防がなければならなかった。

「着替えたら寝ろ、いいな」

返事はなかった。城についてからずっとこの調子だ。アンゼルは軽く息を吐くと、自身も身体を休めるため、ソファへと向かう。

ブラウスとスラックスという楽な格好になってからソファへと身体を預けようとしたとき、コンコンと扉をノックされる。こんな時間に一体誰だろう。

「夜分にすまない、アンゼル。私だ」

「閣下……？」

扉を開けると、厳粛な面持ちの老人が、普段と全く変わらない身なりで立っていた。

「申しわけありません、このような格好のまま……」

「いや、構わない。押しかけたのはこちらの方だ」

アンゼルはサウゼンテにソファを勧め、上着を一枚羽織る。こんな時間に彼が尋ねてくるとは、何かあったに違いない。

「あの娘は？」

「仮眠室に――」

いますと答えようとして、あることに気づいた。仮眠室の近くにある開けた記憶のない窓が開いている。アンゼルはソファから立ち上がり、仮眠室の扉に手をかけると、鍵がかかっていたはずの扉があっさり開いた。中には当然、誰もいない。

「あの馬鹿……！」

ずっと大人しくしていたから油断した。まさかサウゼンテを迎い入れた僅かな隙をつかれるなんて。

「逃げたのか……？」

サウゼンテの問いかけに、アンゼルは首を横に振って答えた。十中八九、『彼』の屋敷へ向かったに違いない。馬車に乗ったときから、抜け出す頃合を見計らっていたのだろう。

「本人がいないのなら丁度いい。アンゼル、彼女のことについて話がある」

「リアのこと……？」

サウゼンテの灰色の瞳に、鋭さが増した。

(アンゼル、怒ってるかな……)

仮眠室に押し込まれてからすぐに着替えて髪を結び、腕にしっかりとリボンを巻いた。音を立てずに鍵をあけ、アンゼルが突然の来訪者に気を取られた隙に近くの窓から外へと出た。

彼らには悪いが、リアはやはり『彼』の屋敷を調べないと気が済まない。

アンゼルの部屋を抜け出したリアは、既に『彼』の屋敷の中へと侵入していた。片っ端から調べ、怪しいところを見逃さない。

隠し扉もないかと壁を探っていると、中が空洞になっている壁を見つけた。そこに目掛けて体当たりすると、壁はあっさり動いて反対側へと躍り出る。

その先は階段になっていた。下へと続いている。

嫌な予感がした。階下からおいで、おいでと誘い込まれているような気がする。今更のように、ジェライドが危険だと言っていた意味がわかったかもしれない。

だが、ここまで来て引き返すわけにはいかなかった。危険など初めから承知している。

駆け足で階段を下る。階段はどっしりとした壁に覆われ、光の一切を遮断しているが、階下には淡い光が灯されていた。誰かいる。

しかし実際降り立つと、一つの燭台に火が灯されているだけで、人の気配は全くなかった。

僅かな灯りだけで照らされた地下は、幾つかの部屋に分かれていることがわかった。特別大きな部屋が一つと、小さな部屋が三つほど。小さいといっても大きな部屋に比べて小さいのであって、アンゼルの部屋と同じくらいの広さがあるように見える。

近くの部屋から調べようと扉に手を添えようとしたとき、リアはその手で口と鼻を覆った。異臭がする。何かが腐っているような、刺激臭が。

リアは片手で勢いよく扉を開けた。鍵はかかっていなかった。

強くなった異臭に思わず顔を顰めた。それでもなんとか光のない暗闇の中を、目を凝らして見つめる。闇に目が慣れてくると、何かが折り重なって倒れているのが確認できた。

「……！」

リアははっと息を飲む。人間だ。幾人の人間が重なり合いながら、闇の中でさらに闇を濃くしていた。

黒影の数を目で数える。その数は丁度十。一一失踪した人間達と同じ人数だ。

(偶然……じゃ、ないね)

折り重なった人間達は、誰も生きてはいなかった。異臭が充満した密閉された部屋の中では、もし生きていたとしても生き続ける方が難しいだろう。

死後の腐敗を考えたら、かなり時間が経っていることがわかる。最低でも一ヶ月以上。それが『偶然』で済むはずがない。

リアは扉を閉めた。想像以上の『証拠』を見つけてしまった。闇オークションの件だけでなく、失踪事件の犯人も『彼』で決まりだ。『彼』さえ捕まえることができれば、この事件は終幕を迎えられる。

リアは扉の前で両手を重ね、目を閉じる。

(間に合わなくてごめんなさい……せめて向こうの世界では、どうか安らかに)

別の部屋にも何かあるかもしれない。簡単な祈りを終えたリアは、一番広い大部屋へと向かい、扉を開く。僅かな光すらなかった先程の部屋と違い、幾つもの燭台に火が灯され、中をぼんやりと照らしていた。

「……なに、これ」

その部屋の中にあっただのは巨大な鳥籠だった。上部が丸くなった形に、網目状に覆われた格子。一つ一つに細かく模様が刻まれており、美しい黄金色の輝きを放っている。金だ。

もしも普通の大きさだったなら、金持ちはすごいな、と感嘆したかもしれない。人間が入れるくらい、大きくなければ。

「気に入っていただけましたか？ リアさん」

後から声をかけられ、リアは徐に振り返る。ここの扉を開けてから、覚えのある気配が上から降りてくるのを感じていたので、別段驚きはしなかった。

「気に入るわけがないよ。こんな悪趣味な籠」

「それはとても残念です。一一貴女のために一流の技師に頼んで作らせたのですが」

やってきた男は肩を軽く竦め、本当に残念そうに嘆息した。

「変装はしないんだね。わたしは赤より、青い髪の方が好きだよ」

記憶に鮮明に残っている豪奢な赤い巻き毛を持った、長身の男の金の瞳を睨みつけ、リアは剣を抜いた。
「私は三つ編みよりも、今の高い位置で一つに結い上げた髪型の方が好きですね」
「お前に好きだなんて言われたくないよ、ガリスタ」

リアは吐き捨てるように男の名前を口に出す。顔の半分以上を覆っていた仮面すらつけずに素顔を晒したガリスタは、そんなリアに対しても微笑みを絶やさなかった。
「それは残念です。どうやら私は酷く嫌われてしまったようですね。女性の扱いは慣れていると自負していたのですが」

「そんなのどうでもいい」

このままではガリスタのペースに巻き込まれると思ったリアは、無理やり話を断ち切った。彼の戯言が聞きたくてこんなところまで来たのではない。

「さっき人の死体を見たよ。あの人達、失踪した人達なんじゃないの？」

「ええ、そうです。彼らは皆、私が殺しました」

まさか素直に答えるとは思わず、リアは目を見開く。同時に人を殺めたということを告白しながら浮かべた微笑を見て、背筋がぞわりと震えた。

オークション会場の屋敷でもそうだった。三人の見張りの命を奪ったとは思えない、穏やかな笑みを浮かべ続けていた。

「何で……何で人を殺しておいて、そんな風に笑えるの……？ 理解できない」

ガリスタと話したのはほんの短い時間だった。そのときのガリスタは、おしゃれが大好きな面白いお兄さんという印象で、人の命を奪うことに何の躊躇いもない人物だとは全く思わなかった。

だからこそわからない。何故彼は人の命を奪って平然としていられるのだろう。
「そんなの決まっているじゃないですか。楽しいからですよ。人を殺すのが——正確には、人の血や断末魔の叫び、絶望に染まった表情を見るのが好きなんです」

再び背筋に悪寒が走った。彼は狂っている。普通の人間ならば、人を殺めて楽しめるわけがない。

リアの心情を悟ったのか、ガリスタは残念そうに額に手を当てた。
「貴女なら理解してくれると思ったのですが、『金色の殺戮人形』と呼ばれた伝説の暗殺者である貴女なら」
「……！」

またその名前か。リアはガリスタを睨む視線を、より一層鋭くした。

「そう呼ばれてたのは昔。——今は違う。お前と一緒にしないで」

確かに幼い頃はそう呼ばれていた。だがそれは過去の話。今のリアは『金色の殺戮人形』などではなく、『歌って踊れる男装の美少女曲芸師』だ。

「わたしはもう、人殺しはやめたの。だからお前のそんな気持ちは理解できないし、したくもない」

「何故やめられたのですか？」

「そんなの決まってる。楽しくないからだよ」

人を殺すのは楽しくない。命令されるがままに動いていた自分がそのことに気づくには、とても時間がかかった。祖父によって気づかせてもらえなければ、ずっと気づかなかったかもしれない。

偶然顔をあわせる度に何かしら話しかけてきてくれて、まともな名前と呼ばれたことすらない自分に『リア』という名前をくれた。次第に彼と話すことが楽しいと思うようになって、そのとき人を殺すことは楽しいことではないと、気づいたのだ。

「わたしは、もう絶対人を殺さない。だから人を殺すお前を放っておくなんてできない。——大人しく捕まってもらうよ」

剣先を対峙するガリスタに向けた。魔剣はもうないのだから、分は完全にリアにある。それなのにガリ

スタは帯剣すらしていなかった。何も考えず無防備な姿を晒しているとは思えない。だから、何かがある。気を抜いてはいけない。

「ここで私を気絶させても、何の意味もありませんよ」

「物証と一緒に王宮まで引きずってあげろ」

リアは勢いよく床を蹴った。懐に飛び込み、顎を狙って剣を振り上げるが、寸でのところをガリスタは後退してかわした。今度は鳩尾を狙って突くが、これも一步横に動いて躲される。魔剣を持っていないとも、普通の間人より身体能力は優れているようだ。

だが、今のガリスタに余裕の笑みはない。双剣による手数の方で攻め続けると、彼はすぐに息が上がってきた。やはり魔剣の有無の差は大きい。

そしてついにリアの剣先がガリスタの脇腹をとらえ、強く打ち付ける。

「ぐっ……！」

初めてガリスタが相好を歪め、大きく後ろへと跳躍する。

「ハハ……流石ですね。剣を持っていても、貴女に勝てる気がしません……」

ガリスタは肩で息をしながら片膝をつき、強打された腹を手で押さえる。

次で終わりだと、再び間合いを詰めようとした、そのときだった。

「あ……え……？」

腕が急に動かなくなった。両手からすると剣が滑り、カランと音を立てて床に落ちる。足にも力が入らず立っていられなくなって、ガクリと膝をついた。

「な……何で……」

全身から力が抜けていく。指先一つ上手く動かすことができず、ついには床へと倒れ伏してしまった。起き上がろうにも、身体が全く言うことをきいてくれない。

「だから言ったでしょう？ ここで私を気絶させても、何の意味もありませんよと」

ガリスタが腹を押さえながら、リアの頭上へやってくる。表情に曇りはあるが、口角は穏やかな笑みの形を作っていた。

「この地下に、吸い込み続けると神経が麻痺する薬を充満させました。色も匂いもないので、流石の貴女も気づけなかったようですね。致死性はありませんし、後で解毒剤を投与いたしますのでご安心ください」

やられた。待ち構えているとは思っていたが、まさかそんな薬まで持っているだなんて思わなかった。恐らく闇オークションで手に入れたものに違いない。

ガリスタはリアの前で屈むと、高く結った金の髪に手を伸ばし、手の平で髪を弄り始めた。

「さわ……ら、ないで」

「気丈な方だ。全く動けないというのに、貴女の夕焼けのような瞳から、強い輝きは失っていない」

手を振り払いたくも、相変わらず身体は言うことをきいてくれなかった。今のリアにできるのは、ガリスタを睨みつけることだけ。

「本当なら、会場で貴女を圧倒して屈服できればよかったのですが、貴女は想像以上に強い人でしたので、こうした方法をとらせていただきました」

「わたし、を……捕まえて……どう、しようと……いうの……」

振り絞った声はかすれていた。アンゼンは、ガリスタの狙いはリア自身だと言っていたが、彼がリアに何を望んでいるのか全くわからない。命を奪いたいなら、とっくに奪えるだろうにそれをする気配もなかった。

「先程も申し上げたでしょう？ ——私は絶望に染まった表情を見るのが好きなんですよ」

狂った彼の嗜好は当然狂っていた。身体が憤りで熱を帯びていくのを感じる。そんなことのためにオー

クシヨン会場で見張りの人達を殺したり、わざわざこんな薬を用意したのというのか。正直、吐き気がする。

「わたしは……お前に、屈したり、しない」

「力ごしではそうでしょうね。ですが、恋慕う相手が目の前で無残に殺されてしまったら、流石の貴女も強気ではられないのではないですか？」

「……っ！」

恋慕うと言った意味はよくわからなかったが、ガリスタが何を言おうとしてるかはわかった。わかってしまった。先程まで火照っていた全身から、一気に血の気が引いていく。

「——ああ、やっといい表情になりましたね。アンゼルを連れてきたときが楽しみです」

ガリスタを止めなければ。止めなくてはいけない。彼はアンゼルを殺すつもりだ、リアの目の前で。絶対に阻止しなければならないのに、思いとは反して身体は全く動いてはくれない。

「もう貴女のような可憐なお嬢さんが起きている時間ではありません。夜はまだ長いのですから、どうぞゆっくりお休みください」

頭を撫でるガリスタに、リアはされるがまま愕然とするしかなかった。

朝になってもリアは帰ってこなかった。

(結局一睡もできなかった……)

リアの身を案じたのと、サウゼンテからリアの素性を聞かされて。凄絶な幼少期だったのだろうと予想はしていたが、彼の口から聞いた言葉は想像以上に過酷なものだった。

それと同時に、アンゼルが見たリアの腕の赤いものが何だったのかも知ることができた。

(あの馬鹿……過去を乗り越えたんじゃないか、目を逸らしてるだけじゃないか)

もしも過去を完全に過去のものとして割り切っていたのなら、あれを見られたとしても平然としていられるはず。なのに見られたくないと拒んだのは、そういうことだ。別のことに目を向けて、考えないようにしてるだけ。少なくとも、アンゼルにはそうとしか思えない。

そんなようなことを悶々と考えこみ、気づいたら夜が明けてしまっていた。しかし、一番深く考え込んでいたのはそれとは全く別のこと。

サウゼンテからリアの話聞き終わり、それをジェライドに伝えたのか尋ねたところ、まだ彼には話していないと軽く首を横にふった。何故先に自分にこのことを伝えに来たのかと問うと、サウゼンテはいつも鋭く細めている瞳を僅かに丸くさせる。

「気づいてないのか？」

サウゼンテが驚いているのを見るのは久しぶりだった。しかし彼の言っていることに心当たりは全くない。困惑するアンゼルに、サウゼンテはとんでもないことを口にする。

「あの娘に惹かれているだろう。だからこそ忠告を含め、先にお前に伝えたのだ」

思考が停止した。そういえば似たようなことをジェライドにも言われたような気がする。そのときは嫉妬か、とからかわれただけだったが、サウゼンテの口ぶりは、明らかにからかうものではない。

「そ……それは一体、どういう意味でしょう」

「どうもこうも、そのままの意味だが」

サウゼンテは一つ嘆息すると、未だ整理のついていないアンゼルを見据える。その瞳は射殺す視線と恐れられるものとは程遠い、穏やかな光が宿っていた。

「誰かを想うことは悪いことではない。だが、相手は普通の人間ではないのだ。そのことを充分理解しておけ。今、真っ当に生きているのなら尚更だ」

サウゼンテは立ち上がる。何か声をかけるべきなのだが、かけるべき言葉が見つからない。それだけ頭の中が混乱を極めていた。

「大分成長したと思ったが、まだまだ子供だな……。安心してお前に全てを任せられる日がくるまで、私もまだ頑張らねばならぬらしい」

軽くアンゼルの肩を叩くと、サウゼンテは部屋を後にする。アンゼルは慌てて立ち上がって頭を下げ、彼を見送った。

何度もサウゼンテの言葉を違うと否定しつつ、その度に脳裏にリアの笑顔が浮かんで慌てて掻き消す作業を繰り返す。同時にリアの身のことや過去のことなどもあり、頭の中は混沌としていた。

未だ自分の中で確固とした答えは見つかっていない。しかし今はそれよりも、帰ってこないリアの身の方が心配だ。サウゼンテが部屋を辞したあと、すぐに熟睡寸前だったジェライドを叩き起こしてリアの脱走を伝えた。しかしだからといって何かできることがあるわけではなく、リアが帰ってくるのを待つしかなかった。

アンゼルの気を紛らわせるために、常備してある珈琲を炒れた。仕事柄徹夜することも多くあるため、珈琲は欠かせない。しかし味に頓着はないため、分量はかなり適当だ。

特有の苦味が口の中に広がっていくと共に、頭が落ちていくのを感じた。今一番考えなければならぬことは何か。

最悪の事態を想定しておいた方がいいかもしれない。そのとき、アンゼルのできることは何だろう。確固たる物証もなしにガリスタの屋敷を強制的に調査することはできない。そんなことをすれば、三年かけて漸く築いた、ジェライドの王としての信頼が失われてしまう。だから親衛隊は動かせない。それに所属するトーヴァスも同じだ。

一つだけあった。アンゼルのできることが。しかし、相当無茶苦茶な方法であることに変わりはなく、成否にかかわらず、大問題になるだろう。だが、それしかないならやるしかない。普段の自分なら、こんなことは絶対にしないだろうに。

自分でも本当におかしく思う。

そんなことをしてまで成し遂げたいのは、ガリスタを捕まえることではなく、リアを助けることの方だということにも。

あれだけ悩んでいたのに、認めてしまったら何かが抜け落ちたかのように楽になった。

自分はリアを守りたい。物理的なことだけでなく、精神的にも。そのためには、直ぐにでも行動をおこさなければ。

アンゼルの羊皮紙を文机から取り出し、筆を走らせる。書き終わるのにさほど時間はかからなかった。丁寧に折りたたみ、後はこれを伝令に渡せばいい。

そろそろ朝礼の時間だ。アンゼルの身だしなみを整え部屋を後にする。正式に決まっているわけではないが、次期宰相と目されているアンゼルの朝礼時はジェライドに続いて入ることになっていた。アンゼルの自身は、それを単に、朝に弱いジェライドを起こす役割を押しつける建前としか思っていない。

ジェライドの部屋についていつもの様にノックをしてから扉を開ける。案の定、彼はまだ眠りこけていた。布団を剥ぎ取り、容赦なく揺り起こす。よろよろと起き上がるのを確認したら、クローゼットを開き、適当に服を引っ張り出してジェライドに向かって投げた。彼が王位につく前から、毎朝のように繰り返しているやり取りだった。

「偶には丁寧に起こしてくれよ……」

「それで起きるならとくにそうしてます」

軽く揺さぶる程度で起きてくれるなら、アンゼルのとて乱雑なやり方はしない。起きる方も大変なら、起こす方も大変なのだ。

しびしび投げつけられた服に袖をとおすジェライドに、アンゼルの小さく呟いた。

「結局リアは帰ってきませんでした」

「そうか……」

ジェライドは身なりを整えながら顔を曇らせる。リアの身を案じているのはアンゼルのだけではなかった。

「……これからの朝礼、きっと参加してるだろうな。何食わぬ顔で」

「そうですね……」

身支度を終え、二人で玉座の間に向かう。互いに無言で歩みを進めた。扉の前で待っていた使用人がこちらに気づくと、頭を下げて扉を開ける。

赤い絨毯を中心に、何人もの重臣達が整列していた。

絨毯よりも、より赤い豪華な巻き毛は普段から目立っていたが、今はより一層際立って見える。あまり意識しないよう視線を逸らすと、彼から離れた位置にトーヴァスがいた。表情に乏しい彼は、普段にまし

て無表情だった。感情表現が苦手な彼がより無表情になるのは、内心の葛藤を抑えている証拠でもある。

朝礼は普段通り、つつがなく行われた。時折ちらりとガリスタの方を見ると、彼は本当に普段通りだった。昨夜人を殺めたばかりとは思えないほどに。

朝礼を終えるとアンゼルスは自室に戻った。寝ていないだろうとジェライドに指摘され、少し休めと厳命されてしまったから。近くにいた給仕から軽い朝食も渡され、あまり食欲はなかったが仕方なしに腹へとつめこむ。普段はジェライドの方が手を焼かすくせに、アンゼルスが疲れをおして仕事をしようとする、目ざとくそれを指摘してアンゼルスを支える。そういう場合、何を言っても彼は聞き入れてくれないので、大人しくいうことを聞くしかなかった。

いつものソファに身体を沈め、軽く目を伏せる。するとあっという間に睡魔がやってきた。自分では気づかなかったが、身体は休息を欲していたらしい。

どれだけの時間眠っていたらろう。目を開けてゆっくりと身体をおこし、窓の方を見ると、日はまだそれほど高い位置にはなかった。二、三時間というところだろうか。仮眠としてなら充分だ。

立ち上がろうとしたとき、扉がノックされた。誰かがそろそろ起こしに来たのかもかもしれない。軽い気持ちで扉を開け、立っていた人物を見て思わず息を飲んだ。

「おはようございます、アンゼル。疲れはとれましたか？」

そこにいたのはガリスタだった。動揺する胸中を抑え付け、必死に平静を取り繕う。

「ええ、まあ……」

「陛下から仮眠をとったと聞きました。根を詰めすぎるのは貴方の悪い癖ですからね。身体はしっかりと休めない、頭も働かせませんよ？」

冗談めかした台詞は、普段のガリスタそのもの。もしもリアのことがなければ、アンゼルスも自然と微笑みを浮かべられたかもしれない。

今このときほど、笑みを浮かべることが大変だと思ったことはない。沸々と湧き上がる感情を抑えながら微笑むことの、なんて難しいことか。

「気を遣って下さってありがとうございます。ところで、僕になんの御用でしょうか」

アンゼルスの様子を見るために、わざわざ部屋を訪れたわけではないだろう。何か目的があるはずだ。

「ええ。実は貴方に見せたいものがありまして」

ガリスタは相変わらず穏やかに微笑んでいる。

「一ヶ月程前から、ずっと欲しいと思っていた美しい金糸雀（カナリア）が、昨夜ようやく手に入りましてね。どうです？ 息抜きを兼ねて見にきませんか？」

『金糸雀（カナリア）』という言葉に、宙を舞う美しい金糸が脳裏によぎった。誰のことを指している言葉なのか、容易に想像がつく。

これは絶対罠だろう。何かを企んでいるに違いない。だが、わざわざアンゼルスを自分の屋敷へと連れて行って、どうするというのか。普段通りの笑みからは、何も察することができない。同時にそれは、何がおきても不思議ではないということだ。

「――そうですね。帰ってきてからもずっと忙しかったので、お言葉に甘えさせていただきますでしょうか」

それなのに彼の屋敷へ行こうとする自分は愚か者だろう。一応手は打ったとはいえ、失敗する可能性も充分あるのだから。

それでもこのときのアンゼルスは、先程まで必死に笑顔を繕っていたとは思えないほど、自然に笑うことができていた。

ガリスタの屋敷に一人でくるのは初めてだった。トーヴァスやジェライドなど、誰かしらと一緒になら、よく訪れている。普段仕事ばかりで、全く外に出ようとしないアンゼルスを引き張り出す、というほぼ強制

的なことばかりだが、彼らなりの気遣いだとわかっていたため、特に文句も言わずに茶や菓子を振舞ってもらっていた。

今回アンゼルを待っているのは茶や菓子ではない。ガリスタ本人と全く同じように普段と変わらない屋敷の門を潜り、中へと案内される。これでもう後戻りはできないだろう。

「こちらです、アンゼル」

いつも通される客間ではなく、今まで見たこともない通路をガリスタは示した。どうやら地下へと続いているらしい。

「随分なところに金糸雀（カナリア）をおいているんですね。日の光が当たるところの方が、美しさが際立つでしょうに」

「とても大事な鳥ですから。逃げてしまわないように、ですよ」

背中がひやりとした。にっこりと微笑むガリスタが、初めて不穏な気配を顕にする。もう隠す必要がないからか、それとも何か意図があるのか。どちらにしろ、穏やかでないことだけは確かだ。

ガリスタに続いて階段を下る。どっしりとした壁は完全に外からの光を遮断していた。つまり抜け道はなく、この階段を使う以外に外へ出る手段がないということ。

階下へ辿り着くと、ガリスタが不意に振り返った。

「アンゼル、貴方はラチェスタに伝わる、伝説の暗殺者（アサシン）のことを知っていますか？」

「はい？」

突然突拍子もないことを尋ねられ、返答に窮した。

ラチェスタとは、スウェニ王国から南東の方角にある、そこそこ国力のある三つの国に囲まれた小国だ。あまり土壤に恵まれた土地ではなく、支配階級の者達による紛争が絶えないため、国の治安は悪化の一方を辿っている。つまり、スウェニ王国でも起きた王位継承争いが、延々と続いているような状態だ。

ラチェスタを取り巻く三国は、ラチェスタに対し、進攻しない代わりに干渉もしていない。三国とも自国を富ますことで精一杯なのと、ラチェスタよりも他の二国との関係を重要視している。

いつ内部消滅してもおかしくはないラチェスタだが、それでも何とか国という形として存続しているのは、彼らが互いを潰すために開発した『モノ』のおかげだろう。

僅かな量でも致死に至る毒薬や、特殊な術式を剣や槍などに施した武器。非正規のルートでそれらは他国に運ばれていき、高値がつけられている。昨日の闇オークションで売られていた危険物のほとんどが、ラチェスタから流れてきたものと言ってもいいだろう。ガリスタやリアが持っていた『魔剣』と呼ばれる代物も、ラチェスタで造られた可能性が高い。

そんな国柄で、真っ当に生きている者は当然ほんの僅かにすぎない。ラチェスタのほとんどの国民は餓死するか、手を血に染める道を選ぶかのどちらかを選ばなければならないと聞いている。他者を殺める暗殺者への道のみが、唯一の生き残る術だと。

ガリスタはアンゼルの返答を気にする風もなく、饒舌に話し始めた。

「ラチェスタには多くの暗殺者がいますが、中でも多いのは、子供の身体の一部に、特殊な術式を彫りこんで、肉体の内部構造を強靱なものに造り変えた『殺戮人形（デリーター）』と呼ばれる者達です」

ラチェスタの暗殺者のほとんどは、まだ年端もいかない子供だといわれている。親を亡くした子供は多く、そんな弱い彼らの存在に欲の深い大人は目をつけた。

「しかし、本来は無機物に刻む術式を身体に直接彫りこむわけですから、相当な痛みを伴うようです。あまりの激痛にショック死する子供も多いとか。まあ、孤児はそこらへんに大勢いますから、被験体に不自由はしないそうですがね」

口に出すことを憚りたくなるようなことでさえ、ガリスタはさらりと語る。

「発育途上の子供のうちに施さなければ施術は効果がないうえに、人によって相性もありますから、同じ殺戮人形（デリーター）でも、強さに差がでてしまうのが難点なのだから。そんな彼らの中で、一人抜きん出た存在がいました。それが伝説の暗殺者（アサシン）、『金色の殺戮人形（デリーター）』です」

後半になって、ガリスタが何を言おうとしているかがわかってきた。

「……ラチェスタの殺戮人形（デリーター）の大半を、たった一人で葬ったと言われた名うての暗殺者（アサシン）。しかし突然ぱったりと裏の舞台から姿を消した。驚異的すぎる力を持った存在として、今でも畏怖され伝説化し、現在までに語られているとか」

「おや、知っていたのですか？」

「閣下から聞きました。——リアがかつて『金色の殺戮人形（デリーター）』と呼ばれた、ラチェスタの有数の暗殺者だったと」

アンゼルが見たリアの腕の血のようなものは、殺戮人形（デリーター）にされるために彫られた術式の痕だ。二人から話を聞かされたのとリアの反応を考えて、それで間違いないだろう。

「流石閣下……私が一ヶ月近くかけて漸く調べたことを、たった数日で調べ上げてしまうとは……」

「聞いたのはあくまで、リアのことだけです」

サウゼンテは国ごとの情勢を把握するために、世界各地に信頼できる密偵を放っている。彼らは王家ではなく、サウゼンテにのみ忠義を尽くす隠密集団だ。当然ラチェスタにもその密偵はいた。リアを只者でないと判断した際、暗殺者の巣窟であるラチェスタに目をつけ、そこにいる密偵に連絡をとったらしい。

「何故リアにそこまで拘るのですか」

彼の口ぶりからして、アンゼルがリアと偶然出会う前から、彼女のことを知っていたと判断していいだろう。つまり、そのときからリアを狙っていたことになる。

「偶に人を攫わせて、それなりに楽しんでいたのですが、そろそろそれにも飽きてきましてね」

「……」

それは失踪した者達を指した言葉ということにすぐに気づいた。その事件もガリスタが裏で糸を引いていたのか。

「新しい獲物を探している最中に、偶然リアさんを見つけたんです。旅人というだけで狙う理由としては充分でしたが、それが更に美しい金糸を持つ、隙がまったくないお嬢さんだということではありませんか。普通の人間ばかりを相手にしていたので、久しぶりに楽しめると思ったのですよ」

「……っ、自分の快樂のために、リアや他の人々を攫ったのか!?!」

敬語を忘れてアンゼルは声を荒げた。想像以上にガリスタは狂っていた。ずっと人を殺めることに快感を得る者を、ジェライドの傍にいさせていたなんて——

「そうやって気に病むと思ったからこそ、気づかれないよう心を配っていたのですがね。突然いなくなっても、あまり騒がれないような人物を選ぶの、大変だったんですよ。結局聡い貴方達は気づいてしまいましたが、せめてもの償いも兼ねて、闇オークションが開かれることをリアさんを通じて教えてさしあげたのですが」

ガリスタは肩を軽く落として嘆息した。悪びれた様子すらなく、ずっと煮えたぎっていた感情をこれ以上抑え続けることはできなかった。

「リアはどこだ！ まだ生きているんだろうな!?!」

長身のガリスタの胸倉を掴み、顔を近づけながら金の瞳を睨みつける。

今までずっとこんな男を信頼していたのか。彼に対する怒りと、それに気づきもしなかった自分への不甲斐無さが複雑に絡み合い、一言では表せない感情が込み上がってやまない。

ガリスタの思惑に初めから気づいていたのなら、リアをこの件に巻き込むことは絶対にしなかったのに。

「安心して下さい。リアさんは無事ですよ。神経を麻痺させる薬を使ったとは思えないほど、ピンピンしています。流石『金色の殺戮人形（デリーター）』ですね」

「御託はいい。リアはどこだ」

ガリスタはフ、と軽く息を吐き、アンゼルの手をそっとどけると大きな部屋を示した。アンゼルは脇目もふらず扉の元へと駆け出し、勢いよく扉を開ける。

「リア！」

そこに確かにリアはいた。金と思われる細工の大きな鳥籠の中に、両腕を広げた状態で、手首が鎖で繋がれた姿で。

「ア……アンゼル……！」

リアの顔は今までにない程青ざめていた。だが生きている。そのことにひとまず安堵した、そのときだった。

「来ちゃだめ！ 早くここから逃げて！」

直ぐにでも泣き出しそうな悲痛な表情と叫び声に、思わず身体がピタリと止まった。それと同時に背中に激痛が走る。鋭い刃物で身体を貫かれたかのような鈍い痛み。

「もう遅いですよ、リアさん」

ガリスタに背中を刺されたのだと気づくのに、時間はかからなかった。

バシン、バシン。ひりひりとした疼きが頬から発せられた。『お父様』が自分の頬を何度も叩いているから。

「この馬鹿娘が……！ もう殺したくないだと？ ふざけるな！ 誰に何を吹き込まれた!? 言え！」

激しく憤る『お父様』に叩かれ続けることよりも、『お父様』が人を殺したくないということを認めてくれなかったことにショックを受けた。『お父様』は変わらず自分に人を殺すことを望んでいる。でも、自分はもう人を殺したくはなかった。人を殺すことは、決して楽しいことではないと気づいてしまったから。

「……！ お前はもう用済みだ！ クソッ、せっかくここまで上り詰めたというのに……！」

『お父様』はブツブツと何かを言いながら、バタンと荒々しく扉を閉める。

用済み、ということは、殺されるということだろう。確か他の殺戮人形（デリーター）がそうだった。失敗が続き、もう必要ないと言われた殺戮人形（デリーター）の命を奪ったのは、他でもない自分なのだから。

今度は自分が殺される側になる。しかし、それでもう人を殺さずにすむのなら、それでいいかもしれない。

もう人を殺さなくてすむ。心がやっとほっとしたリアは、そっと目を伏せる。ポロリと、一粒の雫が目尻から頬を伝った。

「アンゼル！ アンゼル！」

床に蹲るアンゼルの身体から、鮮血が零れている。最も恐れていたことがおきてしまった。

アンゼルを助けようにも、両手首につながれた鎖はどんなに力を込めてもジャラジャラとなるだけでびくともしない。なんと忌々しい鎖だ。これさえなければ、アンゼルを刺すことを決して許さなかったのに。

「僕を……殺すつもりか、ガリスタ」

片膝を立て、アンゼルは痛みに顔を歪ませながらも身体を起こし、刺された所を手で押さえた。流れ出た血と同じ色の瞳を鋭く光らせ、ガリスタを下から睨みつける。

まだ生きてる。しかし安心したのも束の間だった。

「ええ。リアさんの目の前で。貴方のことは、兄弟のいない私にとって弟のような存在でしたが、彼女を絶望させるにはこの方法しかないのです。仕方がありません。恨むなら、貴方に一目惚れしたリアさんを恨んでくださいね」

ガリスタの言葉が耳に響くと共に心に突き刺さる。

アンゼルと出会ったとき、なんて綺麗な色なんだろうと思った。ずっと見ていて飽きなくて、同時に何故飽きないのかと不思議に思っていた。

その理由がたった今わかってしまった。今なら、ガリスタが恋い慕う相手と言った意味がよくわかる。

確かにアンゼルの持つ空色と鮮紅色の色彩に惹かれていた。でもそれ以上に、その色彩を持つアンゼル自身に惹かれていたのだ。

そして、そのせいで今、アンゼルの命が奪われようとしている。

「アンゼルが先にリアさんと出会ったのは、私も予期せぬことでしたが、おかげで順調にことを運ぶことができました。パブの主人に滞在を長引かせるよう頼んだ甲斐がありましたね。捕まえることこそできなかったものの、そのおかげで久しぶりにいい汗をかかせていただきましたし。これも全て貴方のおかげです、アンゼル」

リアを不意打ちしようとして失敗したパブの主人。彼が売ろうとしていた相手は、ガリスタだったのか。

まさか彼にまでガリスタの手が回っていたとは思わなかった。もしもあのとき大人しく捕まっていたのなら、アンゼルが命を狙われることもなかっただろうか。

「わたしの……せい？」

しかしリアはアンゼルと出合ってしまった。そして惹かれてしまった。それが結果的に原因となってしまった。

「ええ、貴方のせいですよ。貴方がアンゼルに惹かれなければ、私はアンゼルを利用しようとは思わなかった」

全身の血の気が引いた。手首から伝わる鎖の無機質な冷たさが、全身に行き渡ったかのように。身体から全ての温もりが消え失せてしまう錯覚を覚えた。

「そういうわけです。覚悟はいいですか、アンゼル」

ガリスタは先端が赤く染まった剣先を、鋭く睨みつけたままのアンゼルに向ける。

「だめええええええええ！ アンゼル、逃げてええええええええ！」

力の底から叫ぶことしかリアには出来なかった。アンゼルは振り下ろされた剣をなんとか躲す。しかしガリスタは余裕の笑みを浮かべていて、わざと逃げられるようにしたことがわかった。

彼にとって、アンゼルを仕留めることは造作もない。だからこそ、リアの反応を楽しみながら、アンゼルを追い詰めようとしている。

やり場のない怒りが、体中からこみあげてくる。リアは視線を横へ逸らした。そこにはリアの剣が吊るされている。あの剣さえあれば、鎖を断ち斬り、この檻から出ることができるのに。

何が伝説の暗殺者（アサシン）だ。何が『金色の殺戮人形（デリーター）』だ。大事なときに、自由に身動きすることすらできないなんて。

リアは歯を食いしばりながらガリスタを睨みつけた。

アンゼルは何とか凶刃をかわしてはいたが、既に息はあがり、顔には血の気がない。避けている間、刺された箇所から絶え間なく血が流れ続けているせいだろう。太刀を浴びずとも、このままでは出血多量で死んでしまう。そしてガリスタは、それを楽しくて堪らないといった表情を浮かべながら剣を振っている。

——アンナヤツイナクナレバイイノニ

ドス黒いものが胸中を覆った。自分自身がどんどん黒いもので埋め尽くされていくような感覚。本来ならば抑えなければならぬ感情を、リアはあえて抑えることをしなかった。

腕を掲げ、思い切り振り下ろすと、先程までびくともしなかったのが嘘のように鎖が千切れた。もう片方も同じように力任せに引き千切る。手首に鎖はついたままだが、そんな重さは気にもならない。そんなことよりも、身体が自由になったことの方が重要だ。

足を勢いよく横に払うと、金でできた格子は鈍い音と共にへし曲がる。リアが通れるくらいの隙間が開けた。

「おやまあ……すごいですね」

徐に籠の外へと出ると、ガリスタが感嘆の声をあげた。リアは視線を横へ動かし、少し離れたところで吊るされている双つの剣を見据えた。

「私を止めますか？ アンゼルへ剣を振り下ろすのと、貴女が私を止めるのと、一体どちらが速いのでしょうかね」

完全に息が上がっているアンゼルめがけ、ガリスタは剣を振りかざす。

リアは迷わず剣を手にするため走った。身体が軽い。まるで背中に羽が生えたかのように。剣の柄を握り締め、力強く床を蹴り飛ばした身体は、瞬きの後には既にガリスタの背後へと辿り着いていた。

——斬る。

鞘から抜き放たれた青磁の刀身が宙に一閃を描いた。

アンゼルまであとほんの数センチという距離まで振り下ろされた剣は、突然行方をくらませる。背後からボタリという鈍い音と、甲高い金属音が響いた。何かが床に落ちた音だ。

「な……！」

ガリスタが自分の腕を見ながら驚愕した。先程までは確かにあった肘の付け根から先の腕が、なくなっている。

ガリスタは舌を打つと、切断面を残った手で抑えながら、リアから距離をとった。鮮血が溢れ、ポタポタと床を紅く染めていく。

床に落ちたのは、ガリスタの腕と剣だった。

リアはガリスタに向き合い、右の剣の先を向けた。

「覚悟してね」

口に出した声音に、感情の破片も籠ってはいないことにリアは気づかない。顔から全ての表情が抜け落ちてしまっていることにも。朱色の瞳が暗い光を宿していることにも。ただ一つわかっているのは、ガリスタを許すことができないということだけ。

次に狙うは――首だ。切断すれば確実に絶命する。ガリスタに向かって床を蹴ろうとした、そのときだった。

「やめろ！ 殺すな！」

誰かが後ろからリアの腕を掴む。アンゼルだった。

「もう誰も殺したくないんじゃないのか!? 目を覚ませ！」

「――！」

目の前の暗雲が一斉に晴れわたる。アンゼルの言葉が全身を駆け巡った。

今、自分は何をしようとした？ しかも、祖父から貰った大事な剣で。まるで走馬灯のようにガリスタに斬りかかったことが鮮明に脳裏に甦る。するりと手から剣が滑り落ちた。

「あ……ああ、あ……」

膝からガクリと力が抜ける。ガタガタと身体が震えた。手首につけられた鎖が異様に重く感じ、両手がだらりと床につく。

「わ……わた……し……」

殺そうとしてしまった。今まで一番嫌悪していたことなのに。自分が再び手を血に染めてしまうことを、ひたすら恐れていたはずなのに。

「フフ……ハハハ、ハハハハハハハ！」

ぞわりとする高笑いにビクリと身体が竦んだ。ガリスタが晒っている。とても愉快で堪らないといった表情で。

「それが貴女の本性ですよ、リアさん。殺伐とした世界から足を洗ったと思っているのは、ただの勘違いです」

「あ……」

ガリスタの言葉が心に深く突き刺さる。

「口先だけではなんとでも言えます。ですが誰も本能には逆らえません。だから逆らうのではなく、受け入れてはいかがでしょう。人殺しとしての本能を」

「……っ」

否定したいのに言葉がでてこない。自分でも悟ってしまったからだろう。ガリスタの言う通りだろうと。だけどそれを受け入れることなんてできない。したくない。

「黙れガリスタ！」

アンゼルの鋭い一喝がビリビリと宙に響いた。徐に彼の方を向くと、顔色は血の気を失って青ざめているものの、持ち前の鋭さは全く失われていない。

「リアも、こんな奴の言葉なんて聞き流せ。聞くだけ無駄だ」

「無駄だとは失礼ですね。私は本当のことを言っているだけなのに。目を逸らし続けても意味はないですよ、と」

「それがただの戯れ言だと言っているんだ」

鮮紅色の瞳と金色の瞳が互いを射抜く。

「お前の好きなようにはさせない」

「ハハハ……。ならどうするというのです？ リアさんの代わりに、貴方が私を殺しますか？ アンゼル」

「お前を裁くのは僕じゃない。しかるべき機関だ」

ガリスタは目を丸くしたあと、再び相好を崩した。斬られた腕から血が滴り落ちていることに全く構わず、腹を抱えて笑い出す。

「どうやって私を突き出すつもりですか？ どうやって？ 問題はそこですよ。私が貴方達をみすみすみ見逃すとしても――」

ガリスタが不意に言葉を途切り、扉の方をふり向いた。リアもつられてそちらを伺うと、誰かが地上から降りてくる気配がした。その数は一人ではない。

「クランバート卿！ こちらですか!？」

武装した数人の兵士が姿を現す。纏う軍服の色からして、ジェライドの親衛隊ではない。

「確かに陛下は動けない。親衛隊に所属するトーヴァスも。――だったら、僕の私兵を動かせばいい」

そのために、バニティカにあるあまり戻らない自分の屋敷に伝令を出したのだと、アンゼルは告げる。

「どう理由をつけるつもりなのですか？ 上級貴族の屋敷に私兵を向けるのは、宣戦布告ととられてもおかしくはありませんよ。陛下の腹心だからと、許されるとお思いなのですか」

宣戦布告。つまり戦争になるということか。だからガリスタの屋敷に兵を向けることができなかったのだと、リアは頭の片隅でぼんやりと思った。

「最近出来たばかりの『恋人』が、インディクト卿の屋敷にいるのを誰かが目撃したのを最後に戻らない。つまり、若さ故の突発的な過ちだというわけだ。――それに、罰を受ける覚悟くらいできている」

「……成る程、恋人を取り戻すためだけに兵を差し向けたと……。確かにそんな噂が流れてはいましたが……」

中央の貴族達の関心を集めるために作られた『設定』。周りが騒いでいるだけで特に気にしたことはなかったが、それはしっかりガリスタの耳にも届いていたようだ。

「まさか貴方がそこまでなりふり構わない手段に出るとは……流石に予想外でした」

「上は奇襲をしかけた僕の私兵が制圧しているはずだ。もう逃げ場はない」

アンゼルは兵にガリスタを拘束するように命じた。兵は片腕のないガリスタを見て僅かに固まるが、すぐに気をとりなおし、拘束する。

「最後に見る血が自分のものになってしまうとは……まあ、それも悪くはありませんね」

「随分諦めがいいな」

「みっともなく足搔くのは格好悪いでしょう？ 洒落者で通ってきた私には似合いませんよ――それと、初めて感情で動いた弟分に、敬意を込めて」

そうやって浮かべた笑みは、弟の成長を微笑ましく思う兄のようだった。アンゼルのことを弟のように思っていたと言っていた言葉は、どうやら嘘偽りではないらしい。

捕まったガリスタに悲愴の色はなかった。これから自分がどうなるかわからないはずがないだろうに。むしろすがすがしく思っているのではないかと思えるくらい、彼は穏やかな表情を浮かべていた。「貴女の絶望的な表情、とても素晴らしかったですよ。ありがとうございます、リアさん」

「っ……」

ガリスタがリアを見て微笑んだ。大分落ち着いてきた身体が再びビクリと震えだす。

「さっさと連れて行け」

アンゼルがリアの前に立った。まるでガリスタの視線からリアを庇うかのように。

「ク、クランバート卿、貴方は大丈夫なのですか……？」

「僕は平気だ。インディクト卿を頼む」

アンゼルの服は血が滲んで真っ赤に染まっていた。顔色も血の気がなく真っ青で、とても大丈夫だとは思えない。

兵もそれを察して踏みとどまろうとするが、アンゼルは頑なにそれを拒んだ。結局根負けし、貴方も早く上へとお急ぎくださいと一言残してガリスタを連行していく。

「終わった……の？」

「ああ、終わった。もう大丈夫だ」

アンゼルが振り向き、鮮紅色の瞳と目があつた。こんな満身創痕な状態でも、アンゼルは綺麗だ。極限の状態でも折れない程に、強い確固とした意志があるからこそ、彼の持つ色彩が更に美しく見えるのだろう。

リアは自分の手を見た。再び愚を冒そうとした己の、なんて醜いことか。そんな自分を見て欲しくなくて、顔を俯かせる。

「ごめ……な、さい」

それは何に対する謝罪なのか自分でもわからなかった。一人でガリスタの屋敷に乗り込んだことか、アンゼルの怪我をさせてしまったことか。それとも惹かれてしまったことか、出合ってしまったことか。もしくはその全てか。リアは瞼をぎゅっと閉じる。

アンゼルがリアの横を通り過ぎた。そのまま彼も早く上へ行けとばいい。こんな犯罪者など放っておいて。

しかし彼はまたリアの前へと戻ってきた。そしてことりと何かをリアの前へ置く。うっすらと開いた視界に映ったのは、見慣れた青磁色の双つの刀身。抜き身のまま置かれたそれは、どこか寂しげな印象をリアに与えた。

「祖父から貰った、大事な剣なんだろう？」

アンゼルもリアと同じように膝をついて、じっとリアを見つめた。

「ちゃんとしまっておけ」

同じく見慣れた鞘を双つ、アンゼルから手渡される。

リアはそれを呆然と見つめた。大事な、大事な祖父の形見。何でも斬れると同時に斬れない剣でもある『魔剣』。

「もう……持てないよ……」

「何故だ？」

「だって……」

斬れる剣にしなくなかったのに、ついにこの剣で人を斬ってしまった。そんな自分に、この剣を持ち続ける資格があるとは思えない。

「……確かに、お前の祖父は、誰かを斬ることを望んではいないだろうな」

リアがもう何も斬らなくていいようにと、この剣をくれたはずだ。それなのにリアは、その気持ちを裏

切ってしまった。

「だが、それだけなら、そんな『魔剣』を与えるのではなく、ただの木剣や本当に刃がついていないだけの剣をやればいいと思わないか？」

「え……？」

考えたこともないことを言われ、リアは思わず顔をあげた。鮮紅色の瞳と間近で目が合う。

「剣自体が斬れなければ、二度とお前が誰かを斬ってしまうことはないにもかかわらず、使い手の思いしだいで斬ることも斬らないこともできる剣を与えた。――僕は、ときには『斬る』ことも必要だからこそ、その剣を与えたのではないかと思う」

術式封印のこと、ガリスタが持っていた魔剣のことをアンゼルの例として述べた。術式封印を破らなければ闇オークションのことはわからないままであり、魔剣を折らなければガリスタに危険な物を持たせたままになってしまっていたと。

「で、でも、わたし……ガリスタを、こ、殺そうと……！」

「ガリスタは死んでない。生きています。だからお前は誰も殺してなどいない」

ポンと、頭にアンゼルの手が添えられた。

「お前は僕を守ろうとしてくれたんだろう？ それにもし、ただガリスタを殺そうとしていただけなら、一番先に撥ねていたのは腕ではなく、首だ」

いくらリアが神速の持ち主だとしても、ガリスタと距離があった状態で剣だけを折ることは位置的に不可能だった。腕を切り飛ばす以外に、アンゼルの凶刃から守る手はなかったといえる。そしてもしもリアがガリスタの首を先に撥ねていたら、途中まで振り下ろされていた剣は、そのままアンゼルの襲っただろう。「助けられたのは、これで二回目だな。……ありがとう、リア」

「――っ」

胸の奥から熱いものが込み上げる。アンゼルの言葉も、頭を撫でる手つきも、とても優しいもので。

気づくと瞳からたくさんの雫が溢れ出ていた。次々と頬を伝い、落ちていく。

アンゼルは何も言わず、ずっと頭を撫で続けてくれた。それがとても嬉しかった。

「……落ち着いたか？」

「うん……」

腕で涙を拭おうとして、手首に未だ鎖がついたままだということを思い出した。剣に手を伸ばし、鎖を切り落とす。ゴトンという鈍い音と共に、手首が自由になった。剣を鞘に収めた後、早速自由になった手首でゴシゴシと目許を擦る。そしてアンゼルにお礼を言おうと、顔をあげたときだった。

「ア、アンゼル!？」

膝頭を抱えてアンゼルの顔色が真っ青を通り越し土気色になっている。

「……少し血を流しすぎたな」

「！ 止血しないと！」

失ってしまった血液を元に戻すことはできないが、今ある血液をこれ以上失わせるわけにはいかない。何か包帯になるようなものはないかきょろきょろと周りを見渡して、自分の腕に巻きつけている真紅のリボンに目が留まった。

迷う理由はなかった。リアは急いで腕からリボンを外す。腕に刻まれた術式の痕を隠すために長めになっているから、充分包帯としての役割を果たしてくれるはずだ。

「おい……腕はいいのか？」

「そんなこと言ってる場合じゃないよ！」

リボンと同じ真紅の刺青が姿を現す。かつてリアが殺戮人形（デリーター）だったという証であり、一生

消えることのない爪痕。リアにとってこれを見られることは己の罪を見られることと同意であり、だからこそ誰にも見られたくないものだった。

しかし今はそんなことはどうでもいい。自分の過去のことよりも、アンゼルが死んでしまうかもしれない状況を回避することの方が大事なのだから。

アンゼルの上着を全て脱がせ（初めは何故か渋られたが押し切り）、リボンを刺されたところを圧迫するようにアンゼルの身体に巻きつける。急所は外れていたが、深く刺された傷はそう簡単に塞がりそうにならない。それでも、これ以上の失血は抑えられるはずだ。

「わたし達も早く上に――」

行こう、と続けようとしたが言葉が続かなかった。鮮紅色の腫が伏せられている。慌てて呼吸を確かめると、息はあった。意識を失ってしまったようだ。

だがいつ呼吸も止まってしまってもおかしくはない。アンゼルの俯せにして横にすると、リアは再び腫が雫で溢れでそうになるのを必死で堪えながら、助けを呼ぶために地上への階段を登り始めた。

呼び出された場所に漸く辿り着くと、そこは血の海になっていた。

『ご主人様』と、リアと同じく『ご主人様』に仕えていたであろう殺戮人形（デリーター）と思われる者達が、血を流しながら横たわっている。激しい出血だ。もし生きていたとしてもこれでは助からない。

そしてもう一人、大量に血を流している『お父様』が、この場で唯一立っている者に向かって、憎らしげに形相を歪めていた。

「この裏切り者め……！」

「もともとこのために身を寄せていた。貴様達の仲間になった覚えはない」

『お父様』はカッと目と口を大きく開くと、その形相のままがくりと項垂れ、そのまま動かなくなった。

「……じいちゃん？」

『彼』がこう呼ぶといいと言ってくれた呼び名を恐る恐る呼ぶと、立っていた男はリアの方へ振り向いた。

唯一立っていたのはやはり『彼』だった。リアにいつも向けてくれた穏やかな笑みはそこにはなく、暗い光を宿した無機質な瞳がリアを見据えている。

「……じいちゃんがみんなを殺したの？」

「そうだ」

「どうして？」

「それがわしの仕事だったからだ」

リアの脳裏に『お父様』の『裏切り者』という言葉が蘇る。つまり、『彼』はずっと皆を騙していたのだ。誰かから依頼された仕事を達成するために。

「そっか……じゃあ、わたしも殺して」

ふしぎと、騙されていたことに対して悲しいと思わなかった。

元々リアがここに呼び出されたのは、始末されるため。横たわる殺戮人形（デリーター）達は、恐らくリアを殺すためだけに集められたのだろう。『彼』のいう『仕事』とは、この屋敷に住む者全員を殺すことだろうから、リアにとってはちょうどいい。リアを殺すのが殺戮人形達から『彼』に変わっただけだ。

これでもう、人を殺さなくてすむ。

リアは目を伏せ、『彼』が剣を振り下ろすのを待った。しかし、いくら待っても鈍い痛みは襲ってこない。不思議に思って目を開けると、目を細め、視線を揺らがせながらリアを見つめる『彼』と目が合った。

「……なんでわたしを殺さないの？」

「お前は……そんなに死にたいのか、リア」

『彼』から逆に問いかけられるとは思わず、リアは首を傾げた。『彼』は仕事を遂行するためにリアを殺さなければならないはずだ。リアもこれ以上人を殺さなくて済むよう、殺されなければならない。

「わたし、もう人を殺したくないの。だから殺されないとだめなの。『役立たず』になってしまったから。じいちゃんはわたしを殺さないといけないでしょ？ だから殺していいよ」

『彼』は力強く瞳を伏せると、リアに歩みよった。やっと殺してくれるのかと思ったら、眼前にきて剣を床へと捨ててしまう。そしてリアに手をのばすと、そのままリアを引き寄せ、抱きしめられた。『彼』の腕の中はとても温かく、心が安らいでいく。

暫くして『彼』はリアを解放し、膝を折ってリアと視線を合わせた。

「……わしの仕事は終わった。そしてもう、これ以上人を殺すことはしない」

「……わたしを殺してくれないの？」

「ああ、殺さない。だからわしと共に生きるんだ」

「……生きてしまったら、また人を殺さないと……」

『お父様』から教えられた、生きるということは誰かを殺すことなのだと。それ以外で、自分が生きることとはできないと。

「ラチェスタの外に行けば、殺さなくても生きられる方法がある。——だから、わしと一緒にいかないか？」

「殺さなくても……生きられる？」

『彼』は大きく頷いた。

殺されることを望んだのは、殺さずにすむにはそれしかないと思ったから。だが、もし生きていても殺さずにすむのならば——

「——生きたいよ。生きていたい。もっと楽しいこと、たくさん、知りたい」

「——そうか」

『彼』が微笑んだ。それはいつも見せてくれる、穏やかな笑みだった。

目を開けると、そこは薄暗い地下室ではなかった。

まず視界に入ったのは真っ白い清潔な枕。そして同じく真っ白いシーツ。ここはベッドの上だ。俯せになったまま横たわっている。

「お、やっとお目覚めか」

聞きなれた声に首を動かすと、長い足と腕を偉そうに組みながら、近くの椅子にどっかりと座っているジェライドがいた。その後ろにトーヴァスも控えている。

「陛下……！」

慌てて起き上がろうと腕をついて身体を起こそうとするが、ズキリと背中に鈍い痛みが走る。思わず腕から力が抜け、再び俯せに倒れてしまった。

「無理して起きようとするな、アンゼル。傷口は塞いで貰ったが、随分深いから完治にはもう暫くかかるそうだ。傷跡も完全には消えないと……」

トーヴァスが心配そうに目を細めながら、何とかして起きようとするアンゼルの止める。そんな顔をされたら、大人しくする以外他にないではないか。

「そう……ですか」

起き上がることを諦め、仕方なしに身体を横に傾ける。

傷跡が残ろうが、男であるアンゼルには大した問題ではない。問題なのは、完治にもう暫くかかるということだ。このまま俯せの状態では、執務ができないではないか。

「安心しろ。すぐ治ったとしても、ここ一ヶ月、お前は執務に携わることができなくなった。何故なら謹慎しなければならないからな」

軽い衝撃を受けながらも、心当たりは充分にあった。

「それは……僕がガリストの屋敷に私兵を向けたから、ですか？」

「それ以外にあると思うか？」

ジェライドは肩を落としながら大きく嘆息する。

「いつも冷静で、無茶無謀とは無縁なクランバート卿が大した無茶をしでかしてくれたおかげで、こちらはてんでこ舞いだ。全く——相談くらいすればいいものを」

私兵をガリストの屋敷に差し向けたことを咎めているのではなく、それを何の相談もなしに一人で決めてしまったことに対しての苦言らしい。トーヴァスもそれに頷いている。

アンゼルは苦笑した。彼らしいといえらしいが、少し考えれば、相談できる状況ではなかったことぐらいわかるだろうに。

「よく一ヶ月の謹慎程度で済みましたね」

ジェライドの補佐から外される程度はあたりまえだと思っていた。それだけ上級貴族の屋敷に私兵を差し向けることは、踏み越えてはいけない一線なのだから。

「緊急に開いた御前会議では、そりゃあもうお前を糾弾する声ばかりがあがったあがった。ここぞとばかりにな。やはり皆、若き党首殿の台頭は前々から気に入らなかつたらしい」

容易に想像がついた。王より若いくせに、王に最も近いところにいるアンゼルの、嫉妬と羨望の眼差しを向ける者は多い。

「しかし、新たに王佐を決めるとした際、俺がお前が日々こなしている執務を並べ立てたら、全員顔を真っ青にしてな。若者が大きい顔をするのは気に入らないが、仕事に忙殺されるのはもっと嫌なようだ。今回ばかりは、仕事嫌いな連中に救われたな」

「……宮廷の今後が不安になりました」

つまり、アンゼルの代わりになる者がいないために、この程度の処分ですんだと。人材不足だと常々思っていたが、これはかなり深刻だ。

「とりあえず、この謹慎は療養を兼ねての休暇みたいなものと思え。暫くは俺と大叔父上でなんとかするから。――この貸しは大きいぞ？」

ジェライドはニヤリと楽しげに口の端をつりあげる。確かに一人でこなすなら大変な量だが、ジェライドとサウゼンテの二人掛りでやれば何とかなるだろう。サウゼンテはともかく、ジェライドはやる気さえあれば、どんなに膨大な量の書類もあつという間に捌いてしまう。あくまで、やる気さえあれば。

「謹慎が終わったら、逆に仕事を押し付けられそうですね」

そういえば、一ヵ月半後に確かとある街で正式なオークションが開かれることを思い出す。嫌な予感がした。アンゼルのげんなりとした顔を見ると、案の定、ジェライドは顔を嬉々とさせる。やはり彼を闇オークションなどへ連れていかなければよかった。

「何、その一日だけでいいんだ。ああ、俺は何て寛大で献身的な王なのだろう。一月分の仕事を、たった一日の休暇を得るためだけに引き受けるのだから」

それは寛大で献身的ではなく、ふてぶてしくて抜け目がない間違いだろう。

「……必ずトーヴァスを護衛として連れて行くのであれば、僕の方から閣下へ打診しましょう……」

「うんうん。流石アンゼ、話がわかるな」

抜け抜けと言い放つジェライドに、もはやつつこむ気力もない。

「そういえば……リアは？」

ジェライドもトーヴァスもいるのに、彼女の姿だけがこの部屋にはなかった。アンゼルの怪我をしたのは自分のせいだと、己を責めていなければいいが。

「ああ、リアなら今休ませてる。お前が寝ている最中、飲まず食わずなうえに一睡もせずずっと付き添っていたんだ。何を言っても休もうとしないから、睡眠薬入りの紅茶を何とか飲ませて、漸くひと段落ついたところだ」

「……あの馬鹿」

いくら特殊な術式を刻んでいるからといって、無理をすれば身体を蝕むだろうに。人の心配をする前に、自分の心配をすればいいものを。

「そういつてくれるな。アンゼのことが、よほど心配だったんだろう。――お前に見られて悲鳴をあげた腕を、惜しげもなく晒す程にな」

「！」

リアがいつも腕に巻いていたリボン。応急処置としてそれを包帯変わりにしてしまったために、術式が

彫られた腕を覆い隠すものは何もない。

「リアの腕の刺青のようなものは、特殊な術式らしいな。クソじじいから聞いた」

「……そうですか」

その様子だと、リアが『金色の殺戮人形（デリーター）』と呼ばれていたことも知ったのだろう。だからといって彼がリアをどうこうするとは思えないが。

「因みにガリスタの処遇だが、改めて調べると余罪が次から次へと出てきてな。闇オークションの検挙から偶々逃れた者も判明したり、失踪した者達の遺体が見つかったりと、てんやわんやだ」

あの地下室はリアのいた大きな部屋の他に、幾つか部屋が別れていた。ガリスタから失踪事件に関与していたことを仄めかされてはいたが、あのときはリアのことで頭がいっぱいで、他のことを気にかける余裕はなかった。だが、ガリスタの性格を考えると、一つ一つの部屋の中に何かがあってもおかしくはない。実際、そこから次々と様々なものが見つかっているのだろう。

「それに関しては時間をかけてやっていくつもりだ。一一刑はもう決まっているようなものだしな」

彼が手にかけた人間は多い。厳罰は必至だ。

「とりあえず、お前は身体を治すことに専念しとけ。復帰したら嫌でも働いてもらうんだからな」

「……覚悟しておきます」

やれやれと嘆息すると、突然扉がバン！ と勢いよく開かれた。ジェライドとトーヴァスがぎょっと目を見開く。

「アンゼル！」

やってきたのはリアだった。いつも結い上げている髪をおろしている以外、最後に会ったときと全く同じ格好で。

「……あの睡眠薬、最低でも丸一日は眠ってられる強力なものだったんだけどな」

ジェライドがボソリと呟く。そういえばガリスタも神経を麻痺させる薬を使ったと言っていた。薬物の効果を最小限に抑えるのも、術式の効果なのかもしれない。

リアはアンゼルが寝ているベッドの近くに駆け寄り、アンゼルが起きているのを目にすると、途端に力が抜けたのか、ベッドの上に顔を乗せながらしゃがみこんだ。

「目、覚ましたんだ……よかった……」

それだけで、リアにどれだけ心配をかけてしまったのかがわかる。アンゼルはズキズキと疼く背中 of 痛みに顔を顰めながらも、ゆっくりと身体を起こした。

「……もう大丈夫だから、そんな顔をするな」

そっと腕を伸ばしてリアの頭を撫でる。朱色の瞳の淵には、大粒の涙が溜まっていた。それがまるで真珠のように美しい、と柄になく思ってしまうのも、彼女を想うが故だろうか。

「一一どうやら俺達はお邪魔なようだな」

「一一そうですね」

ジェライドがニヤニヤと、からかい混じりの表情を浮かべながら立ち上がる。トーヴァスも微笑まじげに相手を崩しながら、ジェライドの後に続く。

「話したいことがあるから、落ち着いたらまた呼んでくれ」

それだけ言い残すと、ジェライドはトーヴァスを連れ立って部屋を後にした。

リアとアンゼルだけが、部屋に残される。

気づいたら眠っていたうえに、アンゼルが眠っている医務室ではないところだった。どうしてこんなところで寝ているのかと考えるよりも、アンゼルのことが気にかかり、慌ててアンゼルのいる部屋へと向かった。

中にジェライドとトーヴァスがいたが、彼らには目もくれず、アンゼルが寝ているベットへと駆け寄る。すると、アンゼルの持つ鮮紅色の瞳が開かれていた。起きている。その事実にあ堵すると同時に、どっと力が抜けた。

「目、覚ましたんだ……よかった……」

視界が滲む。たくさん泣いたというのに、未だ枯れることを知らず、溢れ出る。今は悲しいわけではないのに、どうしてまた涙が出るのだろうか。

「……もう大丈夫だから、そんな顔をするな」

頭に軽く手が乗せられた。アンゼルだ。まだ表情に陰りはあるが、顔色は大分よくなっている。本当に言葉通り、もう大丈夫なのだろう。

それはとても嬉しいことなのに、涙はとまってくれなかった。笑顔を見せたいのに見せられない。ぼろぼろと零れる涙はシーツに点々と染みをつけていく。

気づくと部屋の中はアンゼルと二人だけになっていた。

「……心配をかけたみたいだな。すまない」

「……ううん。もとはといえば、それはわたしが――」

彼らの制止を聞かずに飛び出したのが悪い、と続けようとしたが、頭を撫でてくれた手が口元に移動して、無理やり言葉を途切らせられる。

「それ以上は言わなくていい。もう済んだことだ」

「でも……」

「僕は生きてる。だからそれでいいだろう？ ——そんな切り替えの早さは、元々お前の特技だったと思ったが」

出会ったときのこと、リアがアンゼルの追い詰めた男達を悪人と知らず倒したことを、それは結果論だとクドクド説教された。そんなアンゼルが、今度は逆にその結果論でリアを慰めようとしてくれている。

あのときとは当然事の重さが全く違うが、気にするなと気遣ってくれた心が嬉しかった。

思えば、アンゼルはいつも優しくかった。二人で王宮に向かっていた最中に捕まえた引手繰り犯の刑罰を気にしていたときも、素っ気無い口調ながら、気にするなと言ってくれた。貴族の屋敷を調べることになったときは、身体の心配をしてくれた。気にかけてくれていた。傍にいることを許してくれていた。

アンゼルと出合ってから、ずっと彼に甘えっぱなしだったと今更のように思う。そんな自分を咎めることなく、優しくしてくれるアンゼルの申しわけなさが募った。

リアは手の甲で目許をゴシゴシと擦った。アンゼルが眠っている間に決めたことを告げなければならない。

「アンゼル……今までありがとう。それと、たくさん迷惑かけて、ごめんなさい」

上手く笑うことができているだろうか。――最後なのだから、アンゼルには笑顔を見てほしい。「追ってた事件、一応解決したから、わたしの役目も終わったでしょ。だから――明日にでもここを立つよ」

元々、リアはバニティカを立つ予定でいた。そんなときにアンゼルと出会い、この事件のことを知って協力していたのだ。そしてきっかけとなった事件が解決してしまえば、リアが王宮にいる理由はなくなる。

「次はどここの街へ行こうかなあ。どこかお勧めの街とかある？ 場所はまだ決めてないんだよねー」

つとめて明るく振舞った。そうしないと、再び泣き出してしまうかもしれないから。

「――それは本音か？」

「え？」

アンゼルの目がすっと目を細める。

「今にも泣きそうな顔をしてるくせに、強がるな」

「――っ」

堪えきれず、再び瞳から雫が溢れた。涙は止まることを知らず、次々と頬を伝い落ちていく。

本当は離れたくなかった。ずっとバニティカに、アンゼルの傍にいたいと思った。だけど、アンゼルと自分の生きてきた境遇は違いすぎる。

国のために尽くしているアンゼルの優しい手と、血塗れた自分の手の、なんて不釣り合いなことだろう。

今までずっと、過去のことを深く考えたことはなかった。考えてもしょうがないと思ったから。祖父にも、大事なものはこれからのことだとも教わった。腕に刻まれた紅い罪の証を晒すことだけはできなかったけれど。

しかしガリスタの屋敷で、あれだけ嫌っていたはずの殺人を危うく犯すところだった。過去の自分でさえ、誰かに殺意を覚えたことすらなかったのに。

「――本当に、らしくないな」

不意に腕をひっぱられ、身体が傾いだ。ポス、と倒れこんだのは布団の上ではなく――アンゼルの腕の中。何がおこったのか頭が理解するのに、僅かな時間を必要とした。

「お前は何を遠慮している？ ――それとも、屋敷でのことをまだ気にしているのか？」

リアは顔をアンゼルの胸に埋めたまま、コクリと素直に頷いた。

あのとき以上に、自分のことが怖いと思ったことはない。もしもこのままアンゼルの傍にいたら、今度はアンゼルを殺そうとしてしまうのではないか。――それが怖くて堪らない。

「あのときも言ったが気に病むな。お前がそんな衝動に駆られたのは、殺戮人形（デリーター）だったからじゃない。――人間だからだ」

「え……？」

「どんなに強靱な精神の持ち主でも、虫すら殺せない温厚な人物だとしても――大切な人を目の前で殺されそうになって、平然としていられるわけがない。むしろ、殺したい程相手を憎むのは、それだけ想いが深いということだろう」

背中に回されていた手が再び頭を撫でる。まるで幼い子供をあやすかのように。

「感情のない人形ならば、誰が殺されそうになっても何も思わないし、何も感じない。だが、お前は笑えば泣きもする。充分立派な『人間』じゃないか」

アンゼルの言葉の一つ一つが胸に染み込んでいく。確かに父親の言われるがままに生きていたあのころは、まさに『人形』そのものだった。誰かを殺すことに抵抗も疑いもなく、淡々としていた。笑うことも泣くこともなく。だからこそ誰が死んでも殺されても、何も感じはしなかった。

「ねえ……わたし、アンゼルの傍にいてもいい？」

ずっとアンゼルの傍にいたい。いられたらいいと思うのではなくて。

「僕が知っているリアは、自分の感情に正直に従っていたな。人の意見など聞きもしないで。――お前がいたいと思うなら、いつまでもいればいい」

アンゼルの低く耳触りのいい声が胸をくすぐる。気づくと涙は止まっていて、顔には自然と笑みが浮かんでいた。

精神的にも落ち着いてきたからと、ジェライドを呼んでくるようアンゼルの言われた。本当はもう少し抱きしめていてほしかったが、強い口調で行けと言われたら行くしかない。

温かい温もりの包まれた瞬間を思い出すと、自然と頬が綻んだ。恋の力はすごいと思う。アンゼルの見たり、想ったりするだけで幸せな気持ちになれるのだから。

「随分顔色がよくなったな」

ジェライドを呼びにいったとき、開口一番にこういわれた。そんなに顔色が悪かったのかと尋ねると、ポンポンと頭を撫でられる。

「ずっと何か思いつめていたようだが、乗り越えられたようで一安心だ」

そうって笑うジェライドは、まるで本物の兄のようだ。もしも兄がいたら、こんな感じなのだろうか。

「元気になったようで安心した」

ジェライドのように頭こそ撫ではしないが、トーヴァスも淡く微笑んで出迎えてくれた。どうやら、随分心配をかけてしまったらしい。

「もう大丈夫だよ。心配してくれてありがとう」

彼らだってアンゼルのことが心配だっただろうに、リアのことまで気遣ってくれていた。そんな彼らの優しさも嬉しかった。

ジェライドとトーヴァスを伴い、再びアンゼルの病室へと戻る。中に入るなり、まるで自分の特等席だと言わんばかりに、備え付けの椅子に偉そうに足を組みながらジェライドが座った。アンゼルはそれを呆れたかのように目を細めて嘆息する。

「で？ 話したいこととは何ですか」

「ふっふっふ、聞きたいか？」

「用件だけ言ったら直ぐに執務にお戻りください」

「ああ、つれないなアンゼ。怪我をしてろくに動けないお前の心をほぐしてやろうという、俺の心遣いが伝わらないなんて……」

「そんな心遣いはいらない。用がないならとっとと帰れ、放蕩太子」

「……二人とも、話がまた……」

楽しげなジェライドに冷ややかなアンゼル、そしてそれを仲裁しようとするトーヴァス。すっかり見慣れてしまった光景に、リアは思わずくすくすと笑った。

「さて、ふざけるのはここらへんにして本題に入ろうか」

高々と組んでいた足をとくと、ジェライドはリアの方へと身体を向けた。

「リア、君に再び頼みたいことができたんだ」

「頼みたいこと？」

また新たな事件でも発生したのだろうか。しかしジェライドの口の端はつりあがっており、どう見ても悪い事がおきた顔ではない。

「実は俺達は今、相当な人手不足に頭を悩ませている」

闇オークションの関係者には、ガリスタと同じ上級貴族も何人かかんでいて、彼らは一斉に検挙された。その中には政治の要所を任せていた者も含まれており、まずはそこの後任を決めなければならないようだが、なかなかいい人材が見つからないらしい。

「今回の件で、膿みをほぼ一掃できたのはよかったことなんだがな。それでも味方の数が圧倒的に足りない。――だから、これからも君の力を、俺達に貸してはくれないだろうか」

事件のことを聞く前に、人手不足を嘆いていたことを思い出す。初めて会った、素性もわからぬ少女に頼まなければならないほどにそれは深刻なのだ。

「今回のように、また君の心を酷く傷つけてしまうかもしれない。俺もそれは望んではいないが、今は一人でも多くの味方が欲しいんだ。君のように信頼できる味方が」

リアはふとアンゼルの方をみた。彼は嘆息しながら軽く目を細めた。自分で決めると鮮紅色の瞳が語っている。

「わたし、殺すのは絶対しないよ」

「勿論。そんなことは絶対命じたりはしない」

リアも、ジェライドが暗殺を命じるとは思っていない。ただ、その言葉を直接聞いておきたかった。そしてジェライドの方に視線を戻し、言葉を続ける。

「王さまがいい人だっというのわかるよ。独りよがりなことも絶対言わないって。でもね、わたしは国をもっとよくしたいとかっていう政治的なことは、正直よくわからないんだよね」

貴族の厳しい弾圧を受けている人々を、旅をしながら何度も見てきた。反対に人々から慕われる良き統治者も少なくはなかった。総じてリアが思ったことは、『住みやすければ、誰が統治しよう構わない』だ。これからも頑張れと、声援をおくるくらいならいくらだってしてあげるが、もしもジェライドより住みやすくしてくれる人が登場したならば、その人が王になって統治した方がいいと思ってしまう。

「そういう意味では、王さまの味方にはなれないよ」

簡単に言うと、政治自体に興味関心が薄い。住みやすいところは少し長居をして、住みにくいところはすぐに出て行く。一人の統治者を信じて生活するという概念がないのだ。

「でも」

再び視線をアンゼルの方へ向けた。とても綺麗で優しくて、誰より大事だと思える人。

「アンゼルの味方ならいいよ。アンゼルはわたしの大好きな人だから」

政治的なことに興味はなくても、アンゼルの力になれるならなりたい。これからも傍にいることを許してくれたのだから。

リアはにっこりと笑ってアンゼルを見つめた。丸く見開いた鮮紅色の瞳を見るだけで、胸がドキドキと音を立てる。

今ならはっきりとわかる。一目見て惹かれたのは色彩ではなく、アンゼルのものだったのだと。

アンゼルは不意に顔をぱっとリアから逸らし、手で顔を覆った。途端、ジェライドが腹を抱えて盛大に笑い始める。トーヴァスが落ち着いてくださいと、何とか宥めようと頑張っていた。

「素晴らしくストレートな愛の告白だな。流石リアだ。まあ、お前達の『恋人設定』はまだ充分生きているから、何も問題ないだろう」

「黙れ」

からかい混じりのジェライドの言葉を、低くどすの利いた声でアンゼルが斬り裂く。手で覆われていない鮮紅色の瞳が鋭く細められ、それはまさに『射殺す視線』そのものだった。

「アンゼル、わたし何か嫌なこと言った？」

リアとしては、何故アンゼルが怒っているのかがわからない。もしかして迷惑だったのだろうか、しゃがんで恐る恐る下から顔を覗き込むと、アンゼルは何か詰まったような顔をして、何度も言葉にならない声を発する。

「いや、僕は、別に、お前に怒ったわけじゃなく……」

「こういうときは、僕もお前を愛しているといえればいいんだぞ、アンゼ」

「だからお前は黙ってる！ とっとと執務に戻れ、放蕩太子！」

アンゼルの叫び声あまり広くない病室に大きく響き渡る。

激しい啖呵を切ったせいで背中中の傷に触ったのか、アンゼルが顔を苦痛に歪めた。リアが大丈夫!? と心

配そうにわたわたと慌てると、ジェライドがこれはこれにご馳走様、と暢気に笑い、アンゼルをこれ以上刺激しないで下さい、とトーヴァスが溜め息交じりにジェライドを諫めた。

「……ここは医務室だと思ったのだが」

突然現れた第三者の声に、中で騒いでいた四人は一斉に扉の方へ視線を向ける。呆れた面持ちで立っている皺の深い白髪の老人が、深い溜め息をついた。

「外にまで声が漏れておりましたよ、陛下。その有り余ったお力を、今回の件で増えに増えた執務に、是非とも向けていただきたいものですな」

大きな声を出したのはジェライドではなくアンゼルだったが、そんな言い分が通じるサウゼンテではなかった。アンセルに油を注いだのは、紛れもなくジェライド本人なのだから。

「アンセルが目覚めたことを喜ぶお気持ちはわかりますが、まだ怪我は完治していません。それなのに貴方という人は――」

以下延々と、サウゼンテの小言が続いた。ジェライドは顔を引きつらせながら、なんとか小言を止めようとするものの、立て板に水のごとく続く小言は口を挟む暇が全くない。

リアはサウゼンテの方を見つめると、彼もまたリアの方を向いた。しかしほんの一瞥だけで終わり、すぐにまたジェライドへと視線を戻す。リアがこの場にいることを良しとしているわけではないが、わざわざ追い出すつもりもない、と一瞥をくれた灰色の瞳がそう語っていた。

リアは笑みを浮かべた。何だかんだで彼もまた、リアがアンセルの傍にいることを許してくれたのだろう。

よくぞここまで言葉が生まれるものだ、と、いっそ関心してしまうサウゼンテの小言が室内に響く中、止めるのを完全に諦め、聞き流すことにしたジェライドがいて。それをハラハラとした面持ちで見守るトーヴァスがいる。彼らといると、いつも楽しいことがおきてとても面白い。

そして更にアンセルもいる。リアはベットの上に肘を置いた格好のままアンセルを見上げた。アンセルの傍にただで、心が温かくなって幸せを感じることができる。フフフ、と口から思わず笑い声が零れた。

「アンセル、これからもよろしくね」

「……ああ、よろしく」

紅玉のような鮮紅色の瞳が、優しく細められた。リアの大好きな、何度見ても見飽きない綺麗な色だった。